づら研やってます。

特定非営利活動法人フォロ

生きづらさからの当事者研究会レポート Vol.02

づら研やってます。　生きづらさからの当事者研究会レポート　Vol. 02

特定非営利活動法人フォロ

づら研やってます。
生きづらさからの当事者研究会レポート Vol.02

頒価 400 円

目　次

●はじめに　　貴戸理恵 …… 1p

●マンガでづら研紹介　　どんどんどんぐり …… 3p

●づら研、こんなふうにやってます…… 6p

●づら研レポート…… 9p

・「父親との関係」 みやすけ…… 10p
・「手記」 森下裕隆…… 16p
・「教育への否定と批判（１）」 マサラ…… 29p
・「孤独」 津路鳴烏木……34p
・「存在の承認」 ＨＬ…… 40p
・「バカボンのパパになりたくて」 山下耕平……48p
・「生きづらさの連鎖」 イワサキ…… 55p
・「未生」 野田彩花…… 59p
・「『わらべのごとく！』の自己分析」 かーば…… 64p
・マンガ「わらべのごとく！」 かーば…… 71p

●レポート以外のテーマ…… 113p
・学校について　　高頭悠樹…… 114p
・友だちについて　　野田彩花…… 117p
●出前づら研…… 129p

●づら研に参加して…… 133p

表紙写真：ノガミさん（奈良県立民俗博物館にて）
裏表紙写真：柿ちゃん（山辺の道にて）

づら研やってます。
生きづらさからの当事者研究会レポート Vol.02

2013 年　8 月 30 日　発行
頒　価　400 円
編著者　づら研（生きづらさからの当事者研究会）
発行者　特定非営利活動法人フォロ
〒 540-0036
大阪市中央区船越町 1-5-1
Tel: 06-6946-1507/Fax: 06-6946-1577
http://www.foro.jp/
E-mail: communitas@foro.jp

はじめに

貴戸 理恵（関西学院大学准教授・不登校「その後」研究）

「生きづらさから考える研究会」（通称：づら研）は、さまざまな生きづらさを抱え、その生きづらさを自分だけでなくみんなで共有して深めようと決めた人びとが集う場です。具体的には、10 人くらいが月に一度の定例会に集い、それぞれの研究を発表したり、ひとつのテーマについて考えを述べ合ったりしています。テーマは、親との関係や友人関係、仕事や教育をめぐる経験についてなどです。

2013 年 6 月でづら研は丸 2 年を迎え、2 冊目の研究成果をお届けする運びとなりました。づら研は、とくに「成長」しませんが、順調に問題を含みながら、じわじわと繁殖中です。初年度に引き続き、定例会をベースにしながら、その他にも、他の団体からお声をかけてもらって現地に赴く「出前づら研」や、外部から「これは」と思う講師を呼んで講演してもらい交流を持つ「づら研まつり」、女性メンバーによる「づら研・女子編（？）」の開催などを行ってきました。

コーディネーターとして私が考えていることは、「生きづらさは、なくすより活かす」ということです。

私たちのまわりには、さまざまな生きづらさがあります。たとえば、学校に行きづらい。仕事をしづらい。世間で「こうあるべき」とされることがなかなかできない・したくない。存在を受けいれられない・受けいれられなかった経験がある。――そうした生きづらさは、たしかに、本人にとってしんどいものですし、周囲の人びとも、そこにこだわって停滞している本人に対して、「そんなもの、さっさと手放して、捨ててしまえよ」というメッセージを送りがちです。

けれども生きづらさは、見方を変えれば、私たちの財産であり、私たちが人として豊かさであることの証明だと思います。捨ててしまうなんて、もったいない。

何よりもまず、生きづらさを介して、私たちは出会いました。生きづらさは人と人とを結びつけます。またそれは、尽きない問いの宝庫であり、「自分とは何か」「この社会とは何か」を探究する好奇心の出発点です。そして、この「づら研」という（お金にもキャリアにもならない）関係の場を維持していくだけの、けっして小さくはないエネルギーの源泉でもあります。

さらに、この現代の日本という社会にとっても、多くの若い人びとが生きづ

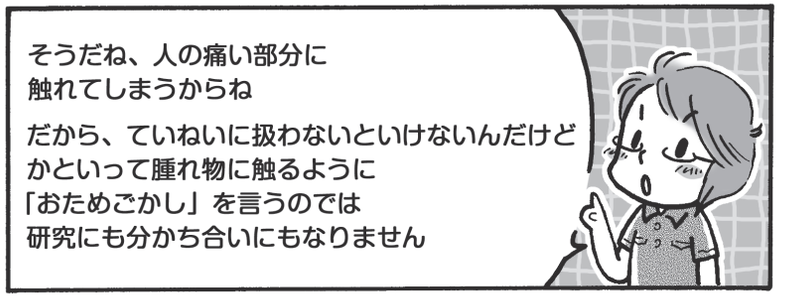
らさを抱えている現実は、けっしてマイナスではないと私は思っています。もちろん、生きづらさを生み出す社会構造に大きな問題があることはたしかです。学校や仕事から離れた人を「だめな人間」とおとしめ、キャリアや生存を保障せず、それを本人の責任として押しつけるこの社会の在り方は、けっして肯定されてよいものではありません。ですが、それに対する若者のリアクションが、他ならない生きづらさというかたちをとっていることについては、希望を持ってよいと思います。生きづらい人びとは、自暴自棄な暴力でもってこの世界と向き合う代わりに、「自分とは何か」「この社会とは何か」と、真摯に、建設的に、問うているのですから。

学校に行っていない・仕事をしていないからといって、「何もしていない」なんて言わせない、ここでこんなに、「づら研、やってます」vol.2。

さあ、はじまりです。

マンガ：どんどんどんぐり／原案：山下耕平

づら研は、そうした試みのひとつとして開いています



【蓮の花は泥沼に咲く】との喩えもありますが
生きづらさ渦巻くお化け沼に咲く花は
きっときれいでしょう

づら研、こんなふうにやってます。

【定例会】

コーディネーター：貴戸理恵（関西学院大学准教授）
日　時　第２月曜日　13 時〜 17 時
場　所　大阪ボランティア協会・ＣＡＮＶＡＳ谷町
参加費　500 円（フォロ会員 300 円）
事務窓口：山下耕平
連絡先　Tel: 06-6946-1507（フォロ）
　　携 帯 : 090-3922-8481（山下）
　　E-mail :communitas@foro.jp
※場所・時間は変更することがあります。

【呼びかけ文】

人が「生きづらい」というとき、それを本人の問題（発達障害、精神障害etc...）に限定してしまうのは、問題を歪めてしまってます。こんなキツキツの社会で、生きづらくない人なんているのかと思います。しかし一方で、「社会の問題」とばかり言っていても、自分の生きづらさが解けるわけではありません。自分の生きづらさ、抱える「問題」からこそ、“ 自分 ” を通して見える “ 社会 ” があり、そこから関係のあり方を模索することができるのではないでしょうか。そこには、自分にしか解けない問いがあるのでしょう。それを「研究」という切口で、他者と共有していくことができないか。そうした思いから、「生きづらさからの当事者研究会」、通称 “ づら研 ” を始めます。関心のある方、どなたでも、ぜひお問い合わせください。

【づら研の作法】

一、研究は「世のため人のため」ならず。まずは「自分のため」にすべし。
一、生きづらさは自分に閉じこめるべからず、開いて他者と共有すべし。
一、自分にとって痛いことこそ要点なり。
一、他者の表出はていねいに扱うべし。
一、おためごかしは無用のこと。
一、自他を混同しないように気をつけるべし。

【研究の方法】

づら研では、ざっくりと以下のような方法で当事者研究をしています。

・自分で自分の生きづらさにまつわるレポートを書いてくる。
定例会で発表し、話し合う。
その後、メーリングリストなどに感想を書く（こともある）。
→レポート（9p 〜参照）

・レポート者を定めず、テーマだけを設定し、フリーディスカッションをする。
参考文献などを提示しあって、読みたい人だけが読んでくる（読まなくてもよい）。
→レポート以外の会（113p 〜参照）

・貴戸さんの講義後にディスカッション。
2013 年度は火曜日にオープン講座「生きづらさからの生存戦略」もやってます（担当：山下耕平）。

・女子づら研など、テーマによってはメンバーを限定して会を開く。

・出前づら研など、お声がかかれば他団体に出向いて交流する。
2012 年度は、神戸オレンジの会、ふくろうの会（姫路市）、ＹＣスタジオ（島根県松江市）に呼んでいただきました。2013 年 7 月にも三田市で開かれたシンポジウム（主催ぱそこんスペース宙）にお招きいただきました。感謝！

・講師などを招いて公開づら研。
2011 年に勝山実さん（ひきこもり名人）を招いて公開づら研、2012 年は月乃光司さん（「こわれ者の祭典」代表）を招いて「生きづらさの祭典（づら研まつり）」を開催。

月乃光司さん（生きづらさの祭典／ 2012 年 11 月 25 日）

「生きづらさ」について今日からできる 10 のこと

1．まずは力をぬきしましょう。

2．自分が「生きづらい」と感じているのなら、それは素直に認めてしまいましょう。

3．無理にガマンしてがんばったあげく、ストレスを他者にぶつけるのはやめましょう。

4．「生きづらさ」を自分に閉じ込めて、自分を傷つけることもやめましょう。

5．マスメディアで流されていることを鵜呑みにするのはやめましょう。

6．「ひきこもり」「ニート」など、人にラベルを貼って、わかった気になるのはやめましょう。

7．自分を否定するのも、まやかしです。

8．「生きづらさ」を開いて、他者と共有しましょう。

9．自分を生きづらくさせている状況に目を向けましょう。

10．問題は簡単に解決しませんが、矛盾こそ大事にしましょう。

※ 2012 年 11 月 25 日 「生きづらさの祭典 “ づら研まつり ”」にて。

づら研レポート

DZURAKEN REPORT

づら研では、基本的に、参加者のレポートをもとに話し合っている。この 1 年間では 9 本のレポートがあった。

父親との関係

2012 年 7 月 9 日　みやすけ

●幼少のみやすけと父親との関係

幼少のころのみやすけにとって父親とは、あやふやな記憶を探っていえば、「怖い」対象だったのを覚えている。みやすけの記憶の断片には、さまざまな父親による、しつけという名の脅しの痕跡が残っているからだ。ご飯の食べ始めが遅いと言って、みそ汁のお椀を叩き飛ばしたり、機嫌が悪いときには、邪魔だといって蹴飛ばされたりもした。父親に理不尽に怒鳴られて隣の部屋にいる母親のところに行っても、いつも言われるのは、「あんたがちゃんとせえへんからやで」と、訴える眼差しを避けるように、お茶を濁されることがほとんどだった。それでも、たまには母親も勇気を振り絞って、怒りを露わにする父親に立ち向かってくれてもいた。そういうこともあり、幼少のころのみやすけにとっては、父親とは恐怖の対象であり、心を許してはならない存在だった。

それでも、幼少のころのみやすけは、父親が好きだった。よく甘えにすり寄っては、自分の背丈以上にある、父親の大きな背中に抱きつきに行った。そして、長く細いあぐらをかいた脚の上に、潜り込んでいたりしていた。夜寝るときは、一緒に寝たいとダダをこねて、寝相の悪い父親に押しつぶされそうになりながらも、逆にそれを愉しみながら眠っていたのを覚えている。その時は、とても父親が好きだった。幼少のころのみやすけにとって父親とは、半ば友だちにも似た、大きな人であったのだ。ひょっとすれば、この記憶は 2 歳とか 1 歳とかの記憶かもしれない。背丈からいって、父親の背中よりは低い視線の記憶。しかし、それは定かには判らない。みやすけにとって記憶とは、あくまで「写真」であり、「時間軸」ではないからだ。

そして、自然と覚えているのは、とある母親と父親との喧嘩の一場面だ。その時、父は母に向かって「誰のおかげで暮らせてるんや！　えぇ？」と怒鳴っていた。母親はその時には「どうしようもないやん！」と言っていたような気がする。喧嘩の発端は、父親のこづかいが少ないとの訴えから起きたものだったと記憶しているが、その時の父親の弁解である「誰のおかげで暮らせてるんや！」の一言には、なぜか共感を示していたのを覚えている。「お父さんのお金なのに、もっと自由に使わせてあげればいいのに」と思ったのが、今でもかすかな幼少の記憶として残っている。その時のみやすけには、この家のお金は、

父親が稼いでくるということを理解していたのかもしれない。しかし、その時のみやすけには、純粋な疑問であったのだ。なぜ、稼ぎ手である父親には、自由に使えるお金が許されないのか、ということを。

もう一つ記憶に残っている思い出として、父親はよく嘘をつくということであった。「今度の土曜日に遊園地に行こうか」夕食時になると、うれしそうに顔を綻ばせてそう言っていた。幼少のころのみやすけにとって、遊園地に出かけるというイベントは、非日常の世界とあって、とても楽しみにしていた。しかし、その期待は、もろくも崩され続けた。父親は家に帰ってきては、毎回うれしそうに、遊園地に連れて行ってくれることを約束してくれた。しかし、一度も、外に出るのも覚束ないほどにダレた父親の、「今日はしんどいねん」という言葉に、乾いた絶望を抱き続けていた。そして、それから、本格的な父親不信が始まった。

●父親不信と幼年みやすけ

それからのみやすけと父親の関係は、堕落の途をたどることになっていった。父親も、みやすけよりも妹に愛情を注ぐようになり、みやすけを蔑むような冷ややかな視線を送ることもままあるようになっていった。そのみやすけ蔑視が始まるのも、お酒の酔いが回るようになってからだった。それも、仕事ですごく疲れている時だったような気がする。今の表現を借りるなら、それは浴びるように呑むといった迫力を思い出す。父親は、会社でのストレスから逃げるように、酒を浴びるように呑み、そしてみやすけにきつく当たり、そして消えるように眠っていく。みそ汁のお椀を叩き飛ばすような時は大抵、この酔いの回るときのようだったような気がする。それは、いってみれば、半ば八つ当たりのようなものだったろうか。とにかく、その八つ当たりが容赦なく、罵声と威嚇によって繰り返された。その逆に、妹には、惜しみない愛情を注いでいた。とにかく、妹には、優しくあろうとして努めていた。そして、その無理な怒りの抑制が、みやすけに向かって暴発したのかもしれない。その時の父親にとっては、うれしくも悲しくも、みやすけという存在は、唯一の、ストレスのはけ口だったのだろう。母親は、日ごろの家事のストレスで疲れと感情が溜まりに溜まり、そして、父親の方は、そんな母親に下手に触れば、逆に理不尽な言動によって、ストレスが増してしまう可能性があるということを目算していたのかもしれない。その環境の中で、その時の家庭は、やり場の無い怒りと、虚しさによって歪んで見えていたように思える。仕事という逃げたくても逃げられ

ない環境に、憤りや、悲しみを溜め続ける父親。そして、家事に追われ、二児の子育てという、いつ終わるか判らない渦に巻き込まれ、そして、その発散場所もなく、感情を溜め続ける母親。その時の環境は、子ども、親ともに、息苦しい、閉鎖的な環境だったのかもしれない。そして、その父親との体験が、大人になった今でも、人が大声で何かに怒鳴っていたり、他人の嫌悪を感じ取ることが、極端に怖くさせる。そう、その時の父親によって、これからも消えないだろう、トラウマが形成されていったのだった。

●その後の父とみやすけ

それからの記憶は、記憶の濃密な幼少期と比べて、より断片的だ。小学生のときの父親との記憶は、ほとんどない。それよりかは、家庭での暮らしのほぼ総てが、まるでなかったかのように、すっぽりと切れてなくなっている。そして、そんな数少ない少年時代の記憶として残っているのが、中学３年生になって、数学に興味を持ち、独学で、三角関数を勉強していたときのことだった。「おまえ、なにやっとん？」「あー、懐かしいなぁ。お前、そんなんやってるんか？　ふーん」そして、それから、父親がかつて通っていた工業高校についての、思い出話を始めた。「なあ、おまえ、関数電卓って知ってるか？」

細かいところは忘れてしまった。でも、そのとき覚えているのは、父親と母親の安らかな郷愁の表情だった。何かを懐かしむような、和やかな雰囲気。数少ない、記憶の中には、きちんと、安らかな家庭の空気があった。それは、みやすけにとっては、少し安心できる部分であった。

みやすけの記憶の中では、父親との会話は、数えるほどの部分しかない。とくに、小学生から、高校を卒業するまでの期間については、ほぼないといっていいほどに、会話した記憶がなくなっている。果たして、本当にその期間の中で、会話したことがあったのか、それすらも判らない。ただ、ほんのかすかな映像として残っているのは、父親に対する、憎悪と蔑みを含んだ、みやすけの視線である。とにかく父親を憎んでいた。それも、それはまるで動機のないように見える、ただ一方的な憎悪と嫌悪の視線。父親の顔が脳裏に浮かぶたびに、その嫌悪と怒りは激しく喚き立てた。心の中で、何度も刺殺を試みたのも、いつもこのころであった。そして、やがて、みやすけが精神病に罹り、その怒りと憎しみが、具体的な殺意に変わっていった。ただ、その時の自分の精神的な崩壊が、主に父親の企みによるもので、この愚か者は、みやすけを幼少のころから貶めようとし、汚らしい蔑むような視線を繰り返し浴びせられてきたもの

だったと信じて疑わなかった。当然、みやすけにとって、その過ちはけっして許されるものではなかった。そう、けっして許してはいけない、愚かな父親による大罪だった。だから何度も、父親を殺そうとした。みやすけが受けてきた八つ当たりが、そしてそれとは打って変わって、妹に注がれ続ける、不平等な愛情に対する憎しみが、みやすけの手に、何度も包丁を握るように誘惑し続けた。そして、わずかな理性が、みやすけに訴えかける。「アイツのために人生を棒に振るのか？　アイツのために、みやすけの人生は狂わされ続けるのか？」そして、そんな自分が怖くて、真夜中に警察にも相談しに行った。父親を殺すには、それだけ必死な覚悟が必要だった。たかがどうでもいいような人間を抹消することなのに、その時のみやすけにとっては、とても踏み込めないような、精神病理以上の恐怖があった。「明日こそは、明日こそは。この手で、人生を狂わせた父親に復讐してやる」。その時のみやすけにとっては、この憎悪こそが、生きる意味であり。その父親を憎み続け、やがて殺戮を企てる、その時が、人生にとっての法悦の瞬間であり、そして終焉なのだと思っていた。父親に対する復讐に向けられた人生は、想像以上の怒りの発作と、表情の豹変によって色濃く心に、鋭い傷をつけることになった。みやすけの表情は怒りと憎しみにより、眼は鋭く釣り上がり、そしてその瞳は、想像上の愚かな父親、ただ一点を見つめているように、むなしく定点していた。

●怒りと憎しみの過去　そしてその後の機転

その後、ある転機に恵まれることによって、今まで抱き続けていた怒りと憎しみが、氷解していくことになる。それは５年前、24 時間テレビを放映していた時である。蒸し暑い深夜だった。見ていた24時間テレビがつまらなくなって、チャンネルを回していたとき、たまたま、西鉄バスジャックの被害者の一人である山口由美子さんのドキュメンタリーが流れていた。そのとき、みやすけはなぜか、この女性に話をしなければならないという脅迫観念に襲われ、さっそく彼女の名前をテレビで知ると、インターネットで検索して捜した。そうしたら、九州地方の新聞記事に、彼女のインタビューが掲載されているのを見つけ、そして、その翌日、その新聞社に電話し、山口さんの電話番号を訊き出すことに成功した。初めて、話してみると、彼女は、佐賀県で居場所をやっているということを知った。それを知って、みやすけは歓び、さっそく佐賀県に行くことができないかと相談した。しかし、佐賀県に行くことはできなかった。その代わりに、大阪で、ちょうどその年の９月から居場所を始める知り合いがいるからとのことで、そちらを紹介された。それが、かの山下さんであり、フォ

ロだった。

それからは、父親への怒りは、徐々に年を重ねるごとに客観視されていった。父親とみやすけの立ち位置が相対化され、そして何より、歳を重ねるごとに、親という立場と、その苦悩の発生の過程を知るようになった。心を無意識に秩序立てて行くなかで、また、みやすけ自身が組織の一員として働き始めるなかで。一個人としての父親の苦悩、逃げたくても逃げられない会社という組織の呪縛、父親にとって子どもが産まれるということは、一つのハプニングであり事件であるということ、そして家庭を自分一人の収入で子どもを十数年、下手をすれば、その後も、死ぬまで母親を養っていかなければならないという、いくら怨んでも弾き返すことのできない事実の重みを知った。その責任の重荷は、凄まじいほどの、身を削ぐ自己献身の精神だろう。家庭を支える責任という名の呪縛。それは、みやすけが大人になって、また、働くようになって、浸透するように理解するようになった、知らなければならなかった事実だった。それは、当時まだ 20 歳そこそこの青年が直面した、責任の連続の数々だったのだろう。

みやすけが、その壮絶な父親という彼の立場を理解した時、今までねっとり粘り着くように、犯し続けたみやすけの怒りと憎悪は、溶けるように崩れ去っていった。

●その後の父親像

その後のみやすけと父親の関係は、みやすけ自身の心が穏やかになったのとは裏腹に、冷たく切り分けられたままだ。それでも、ごくたまに会う彼の表情には、どこかしら安堵感のある、あたたかく和んだやさしさのようなものを感じる。それは、閉塞された父親と息子の関係ではなくて、あの時のみやすけにはけっして感じることのできなかった、一人の人と人としての関係だった。それでも、彼にはみやすけに対し、障がい者としての認識で接する、何かしらの覚悟と気づかいがあるように感じる。みやすけがいくら扶養から離れなくても、けっして口では文句は言わなかった。そして、みやすけが友だちと二人暮らしをして、事実上自立し、ごくごくたまにしか会わない父親の心境を探るには、情報が少なすぎる。それでも、何かの用事で実家に向かう途中で、彼にばったり顔を会わした時には、彼は、うれしそうでいて、はにかむような安堵の微笑みを返してくれる。何も言わないけれど、彼のその表情と、みやすけのほうも今にも微笑みたくなる衝動のあいだには、確かに、小さな交流が流れているような気がする。ささやかではあるが、確かに脈打つ「人」どうしの繋がりの気配が。

みやすけには、彼のように母親や子どものために、言い訳もせず、反抗もなく、上司と折り合い良く働くということがけっしてできないと思っている。そして、そういう働き方のできる父親には、お疲れさまという感謝の気持ちと、超えられない人としての尊敬の念を示す他にはないと思っている。

『手記』

2012 年 8 月 6 日　森下裕隆

ぼくが、迷った時や苦しい時に何度も道しるべにしてきた、たいせつな記憶について話そうと思います。

数年前、あるひとに自分の不登校の経験のことを話したことがあります。そのひとは義務教育についての論文を書いている大学院生で、あるフリースクールへ見学に行ったときに知り合いました。

彼女の名前は、ここではＫさん、としておきます。

不登校について話した、といってもそれはインタビューのような改まったものではなく、会話の流れでたまたまそうなっただけです。

自分の不登校について話すのは、実はそれがはじめてでした。Ｋさんは彼女なりの真摯さでその話を聴いてくれました。

ぼくが話を終えると、今度は彼女が自分の話を始めました。

「あなたが自分の大事な話をしてくれたから、そのお返しというか、お礼に」と言って。

そのとき、Ｋさんがしてくれた話を（もっと正直に言うと、話をしてくれたＫさんを）今でも忘れることはできません。

ただ、彼女の話を始める前に、少し遠回りして、当時のぼく自身について話しておこうと思います。

その時ぼくは大学生でした。とはいっても、ほとんど大学には通っていなかったので、ただ単に学籍があった、と言ったほうが適切かもしれません。

望んで入った大学でした。中学１年の時に不登校になって、フリースクールや居場所などにも通わずに生きてきたぼくは、今度こそひとの輪の中に入るんだ、と気負っていました。

同級生に積極的に話しかけて仲良くなって、一緒にサークルの新歓をはしごしたりしました。新入生どうしの懇親のための飲み会にも参加して、二次会で苦手なカラオケも頑張って歌ったりしました。

ぼくには焦りがありました。この新しい環境で、少しでも早く自分にとっていいポジションを確保したいといつも思っていました。

「グループなんてソッコーで固まるからはやくどっかへ食い込んどけ」当時のある先輩の言葉です。

ぼくはそれまで、人間関係というのは、もっと穏やかにゆっくりと形作られていくものだと漠然と思っていました。しかし、大学に入ってぼくが直面した人間関係はよくも悪くもめまぐるしく、ダイナミックなものでした。ボーっとしてたらとりのこされる、先輩の言うことは正しい、と感じました。

その想いはぼくの心をせわしなくしました。明るく、活発的なひとたちのグループに近づき（多少ウザがられているとわかりつつも）、なんとかこのひとたちの「仲間」になりたい、と思っていました。その一方で、地味に思えたり、非社交的に思える人たちに対しては、「こいつとつるむのはあり得んわ」とあえて距離をとったりしました。ぼく自身もほかの同級生から「仲間」であることを求められたり、「ありえんわ」と切り捨てられたりしていたように思います。ひとから、つまらない・面白くない人間だと見なされることを異常なまでに恐れていました。

今からすれば痛々しいことです。でも、当時の自分を笑う気にはなれません。

「モリシタくんは、頑張ってるのはわかるんだけど、空回りしてる」

あるとき、同級生のひとりに言われました。

その人は、ぼくから見て、いつもひとの輪の中心にいてみんなをまとめる兄貴分のようなひとでした（実際あだ名が「アニキ」でした）。ぼくはなんとかそのひとのグループに入り込みたいと頑張っていて、みそっかすながらも一員として認めてもらえたかな、と思っていました。

それはおそらく、忠告と警告が半々の言葉でした。「もっと力を抜いて、ゆったりと関わってくれたらいいのに」という思いの後ろから、「俺たちの空気を乱すお前をツレと認めるわけにはいかない」という冷たい眼差しがのぞいているような気がしました。

そのときから、大学での自分と周囲のひとたちとのズレを意識しないではいられなくなりました。入学当初から気を張って、テンション高く、ノリよく過ごしてきた疲れがどっと出て、次第に講義にも出席しないようになりました。

それから数カ月のあいだは、薄暗い闇の中で過ごしたようなものでした。大学へ行かず、バイトもせず、友だちもいなければ、ひととのつながりなど何も残りません。部屋にこもって本を読み、それに飽きると、目的もなく外を日が暮れるまで歩き回りました。

つらい時期だったとは思います。でもその薄暗い闇がぼくは決して嫌いではありませんでした。自分の古巣に戻ってきたような安心感が確かにありました。

大学に行けなくなったこと自体はショックだったはずなのに、まるで最初からそうなることがわかっていたみたいに、ぼくはその生活になじんでいきました。

しかし、そんな生活にも、まるで光が射さないわけではありませんでした。

今は大学と距離をとってある程度安定しているけれど、いずれはもとの生活に戻らなければいけない、と感じていたぼくは、大学にあるカウンセリングルームに通うようになっていました。

そこで知り合ったカウンセラーのO先生は、大学の人間関係のなかでは、今でも懐かしく想い出すことのできる数少ないひとです。

「無理してひとと関わろうとしなくても、ただそこにいるだけでモリシタくんのいいところがまわりのひとたちに浸透していけば、それがいちばんいいんじゃないかなと思うよ」

O先生は何度もくりかえし、そう言ってくれました。

ぼくはいまでも、自分が積極的にひとと関わることでコミュニケーションが豊かなものになっていく、という考え方にほとんどリアリティを感じません。大学を離れてからのぼくにとって、ひととのつながりは「ただそこにあるもの」になっていました。そんなふうにすこしずつ肩の力を抜くことができたのは、もしかしたらO先生のおかげかもしれません。

ただ、その言葉は当時のぼくにとって絵空事のように響きました。おそらくぼくの抱えている生きづらさの核心を突いてはいるのだろうと思いましたが、当時の状況とその言葉があまりにも食い違っていて、うまく自分の体の中に浸透していくことはありませんでした。

ぼくは、また講義に出られるようになればいいと思ってカウンセリングを受けていました。O先生も（そこは大学のカウンセラーなので）ぼくが大学生活に戻っていけるような工夫をいろいろ考えてくれました。でも本当は、大学をやめることが自分を取り巻いている抑圧感から解放される唯一の道だとぼくは内心わかっていたし、O先生もそのことに気づいていただろうと思います。でもそのことは口に出してはいけないのではないか、といつも感じていました。だからぼくは、カウンセリングのときに大学を辞めたい、と言ったことは一度もありません。

O先生のことを思い出すと、懐かしさとともに、若干の後ろめたさを今でも感じます。

夏休みが終わり、後期の授業が始まっても、ぼくは大学には戻りませんでした。前期の必修単位が取れていない時点で普通に進級できないことは確定していたので、ぼくは休学を考えるようになっていました。

「今は大学から距離をとって、ゆっくり元気を充電する時期なのかもしれないね」

O先生はそういって休学に賛成してくれました。ぼくは休学届けを出しに大学の学生課に行くのもしんどいような状態だったので、事務的なことはほとんどO先生に任せきりでした。

大学に行かなければならないという当面の重圧から解放され、張りつめていた気がゆるむと、時間はただ流れるように過ぎ去っていきました。

何がいけなかったのだろう、とぼくはよく考え込むようになりました。本を読んでいても、気がつくとそのことばかり考えて、ページがまるで進んでいないこともありました。考えてもしょうがない、考えたくない、と思っていても、それを止めることはできませんでした。

根っこのところからズレている、そう思いました。今まで周囲のひとたちに感じる違和感は言葉遣いや服装や趣味の違いとして意識されてきたけれど、そういう表面的な部分で周囲とあわせることができたとしても、覆い隠しようのないズレがある。

そのズレの正体は何なのか、考えてみてもよくわかりませんでした。ただ、自分が当面することを無意識にずっとさけてきた不登校経験にその根はあるのではないか、と次第に考えるようになっていきました。

ぼくは、あちらこちらのフリースクールに見学に行ったり、不登校関係のシンポジウムに顔を出したりするようになりました。

そんな中で出会ったのが、Kさんでした。

ぼくがあるフリースクールに見学に行ったとき、もうひとりの見学者がいて、それがKさんでした。

彼女は、よくしゃべるひとでした。

「わたし自身は不登校の経験もないし、ガッコウも楽しかったし、違和感なんてなかったなぁ……。研究テーマに教育を選んだのは、たまたまなんとなく、かも。一度大学に戻って、何かをちゃんと勉強してみたかったんだ」

挨拶ていどのつもりで、なぜ不登校に興味を持たれたんですか、と聞いたぼくに、彼女はそんなふうに答えてくれました。

Kさんは、もともとはY県で働く地方公務員だったのですが、仕事を休職して、東京にある主に行政や政策を専門とする大学院で義務教育の研究をしてい

ました。
　見学が終わったあと、彼女から、せっかくだからいっしょにお昼食べない？
　と誘われたので、適当な定食屋を探すことにしました。
　いっしょに並んで歩くと、彼女はヒールを履いてもぼくより少し低いていどの背丈でした。

　近くの駅前のお店で二人で親子丼定食を食べながら、たわいのない話をしました。
　泊まったホテルの部屋のテレビがシャープの液晶で、さすが三重県だなぁと思った、とか、半年前まで土木課にいて現場でヘルメット被って働いてたんだよ、とか、江頭 2:50 は天才だと思う、とかそんな泡のような言葉のやり取りです。
「たとえばわたしが結婚して、子供を産んで、公園デビューとかしてママ友グループに入らなきゃいけなくなったらきっとしんどいだろうなって思うのね。不登校もそんな感じなのかな？」
　それはちょっと違うかも、と思いましたが、どう違うのかはよくわからなかったので黙っていました。
　今にして思えば、Ｋさんはづら研で語られるような種類の「生きづらさ」に対して実感の薄いひとだったのかもしれません。ぼくが自分の不登校経験について話しても、彼女にとってよくわからないのであろう部分は、よくわからないなぁ、という顔をして聞いていました。
　彼女は「わからない」ことを隠そうとはしませんでした。

　Ｋさんは自分自身について、典型的な田舎の優等生、自嘲気味に表現しました。
「地方のそこそこの偏差値の大学にはいって、でも夢とかやりたいことがあったわけでもなくて、とりあえず食いっぱぐれがないかって思って公務員試験を受けて、今に至るっていう……。きみみたいに根源的な問いに頭を悩ませたりすることもないし……。軽蔑する？」
　ぼくが、そんなことないですよ、とあわてて否定すると、彼女は冗談だよ、と笑いました。
　この「田舎の優等生」という言葉にどういうニュアンスがこもっていたのか実際のところはわかりません。ただ、田舎の優等生であることにＫさん自身はそれほどの居心地の悪さを感じていないように、ぼくには見えました。

　Ｋさんと話しながら、ぼくは、きっとこのひとは誰からも好かれるんだろうな、と何となく考えていました。
　話が上手で、初対面の相手にも気まずい思いをさせない。あけっぴろげに自己開示できて、ひとの警戒心を簡単に解いてしまう。それでいて、押しつけがましいところがない……。どれもそのときのぼくにはかけている要素でした（今もですが）。
　彼女はぼくにとって、自分もこんなふうになりたかった、と思わせるような人間でした。彼女はぼくに、大学でひとの輪の中心にいたひとたちを思い出させました。そして彼らに対して感じたのと同じあこがれと疎ましさを彼女にも感じました。
「ぼくもあなたのようになりたかった」けれど「ぼくはあなたのようには絶対になれない」だから「早くぼくの目の前から消えてくれ / 早く彼女の目の前から消え去りたい」という思いを。

　気がつけば２時間ほどもＫさんと話をしていました。そんなふうにひとといっしょにいる時間がごく自然に過ぎ去っていくのは、ぼくにとっては新鮮なことでした。
　また会おうね、とメールアドレスを交換して、その日はおわかれしました。彼女は在籍している大学院のある東京に帰っていきました。

　大学にはいってまだ活動的だったころ、周囲のひとたちの行動で奇妙に感じたことがありました。サークルの新歓や飲み会が終わったあと、必ずと言っていいほど、みんなで集まってメールアドレスを交換し合うのです。場合によってはほとんど口もきいたことのないような相手とさえ、場の勢いとノリでアドレス交換していたように思います。
　プライバシーそのものといってもいいような情報なのに、たいして知りもしない相手とよくホイホイと交換できるなぁ、と思いつつ、これは友だちをつくるいいチャンスかも、とぼくも積極的にその流れに乗っていきました。
　ぼくの携帯の電話帳にはそのときに交換したアドレスが今でもたくさん入っています。でも、そのうち一度でもメールのやり取りをした相手は、たぶん片手でも足りるていどの人数だと思います。
　メアド交換したくらいで「友だち」になれるわけじゃないんだ、というのがぼくがそのことから得た教訓でした。

「また会おうね」、そのことばだけでじゅうぶんだ、そう思いました。たとえもう二度と会うことがなかったとしても、そのことばにこめられた気持ちは嘘じゃない、だから彼女に対してそれ以上のものを求めてはいけない、「友だち」になろうなどと、望んではいけない…。

そのころのぼくは、ひととのつながりに関しては無駄に禁欲的だったと思います。ぼくが自分からＫさんに連絡を取ることはありませんでした。

彼女と再び会うことになったのは、その１カ月後のことでした。

ある日、Ｋさんからメールが届きました。

「今度また三重県に行くことになったんで、せっかくだからきみにも会いたいなと思ってメールしました。晩ご飯をごいっしょしませんか？　できれば、お酒でも飲みながら」

とのことでした。

メールありがとうございます。お食事、ぜひごいっしょしましょう。楽しみにしています。

そんな文面のメールを返信しながら、こんなやりとりはずいぶん久しぶりだ、と感じていました。

二度目にＫさんにあったのは、たしか、12 月の初めごろのことでした。

前にもいっしょに歩いた駅前が待ち合わせの場所でした。予定の時間を過ぎても彼女がなかなかやってこないので、どうしたのかなとあたりを見まわしていると、小柄な女性がこちらにかけよってきました。

ぼくは最初それがＫさんだとわかりませんでした。彼女は、小さい子どもがよくかぶっているような両側のもみあげのところにひもが垂れている毛糸の帽子（名前がわかりません）をかぶって、ふわふわして暖かそうなポンチョを着ていました。ちょっとおしゃれな雪国の子ども、といった感じでした。

前に会ったときは、カジュアルながらも仕事場にも着ていけそうなファッションだったので、何か不意をつかれたような、そんな気になりました。その雪国の子どもが寒さで頬を紅くしてこちらにかけよってくる光景は、変なはなしですがぼくを少し動揺させました。

あぁ、このひと、かわいいな。そう感じたのをよく覚えています。

Ｋさんはぼくよりいくつか年上のひとでした。そんなひとに対して、かわいいと感じるのはどこか失礼なような気がしました。

遅れちゃってごめんなさい、と彼女が謝ると、わずかな心の揺らぎはすぐに消え去りました。

ぼくも寒かったんで駅ビルの中に入ったりしてたから、わかりにくかったかもしれないですね、そう答えて、とりあえず近くの居酒屋に入ることにしました。

そこは駅ビルの近くにある薄暗い居酒屋で、６時過ぎという時間もあって、客の大半は仕事帰りのサラリーマンでした。

じゃあとりあえずカンパイ、と運ばれてきたビールを飲みながら、彼女は話し始めました。

「この間は、わたしが一方的に話してたみたいで、悪かったなぁってずっと思ってて。今日はきみのはなしもきかせてほしいな」

ぼくの話って、不登校の経験の話ですか、と聞くと、不登校っていうか、きみに興味があるの、と彼女はいいました。

「あ、でも誤解しないでね。わたしだって誰彼かまわずこんなこと言ってるわけじゃないの。ただ、きみのことをもっとよく知りたいというか、きみと友だちになりたいと思ったんだ。

……って、きみ、もしかして緊張してる？」

たしかにぼくは緊張していました。 きみに興味がある、と言われて、自分の持っていた微妙な下心が見透かされていたような気になりました。それは、もちろん気持ちのいいことではありませんでした。

ただ、彼女の口調に嘲りのニュアンスはありませんでした。このひとを相手に虚勢を張っても無駄だし、その必要もない、そう思いました。

ええ、少し。こういうの、あんまり慣れてないんで。ぼくがそう言うと、Ｋさんは、別に無理に話さなくていいよ、と笑いました。

あなたの話を聞きたい、あなたと友だちになりたい、そんなことを言われたのは、何年ぶりだろう、そう思いました。

不登校になって以来、同年代のひととのかかわりがほとんどなく、友だちや、胸の裡を語り合うような相手もいませんでした。でも正直に言うと、そのことをたいして苦しいことだとは感じませんでした。そういうものなのだ、とただ漠然と思って生きていました。

話を聞かせて、と言われて、そうか、自分の考えや想いをひとに話してもいいんだ、という当たり前のことに思い至りました。Ｋさんの言う「友だち」は、

大学で追い求めた「友だち」とは少し響きが違うようでした。
　すごく久しぶりに、懐かしい暖かい部屋に戻ってきたような、そんな気がしました。
　ぼくとＫさんは、結局は「友だち」にはならなかったけれど、この二つのことばは今でもよく思い出します。

　ぼくは、自分が不登校になった当初のことについて、彼女に話し始めました。
　ただ、そのとき自分がどんなことを話したのか、はっきりとは覚えていません。
　おそらくそのときのぼくにとって、「不登校をした自分」は遠い過去のものになっていて、すでに表出に痛みを伴うような経験ではなくなっていたのだろうと思います。
　だから、なにか自分以外の誰かの経験について話しているような気安さと手応えのなさを感じました。
　せっかくぼくの話に関心をもってくれたのに、こんな感じでいいんだろうか？
　ぼくのそんな気後れをよそに、Ｋさんは言葉少なに話を聞いていました。

「話してくれて、ありがとうね」
　ぼくが話し終わると、彼女はまずそう言ってくれました。
「きっとわたしにはよくわからない部分もあったと思うんだけど、それでも話してくれてうれしい」
　そんな感謝してもらえるような話じゃないですよ、と僕は言いました。謙遜ではなく、本当にそう思っていました。
「きみが自分の大事なはなしをしてくれたから、わたしもお返しになにか話さなきゃね」
　そう言って彼女は話し始めました。

「不登校とはちょっと種類が違うけれど、わたしも子どものころの経験で長い間ひとに話せなかったことがあるんだ。
　小学５年生のときに、友だちのおじいさんにからだを触られたのね。
　触られたって、意味わかるよね？」
　ぼくは黙って頷きました。
「その女の子はわたしの親友で、そのおじいさんも顔見知りのひとだった。

　そりゃあショックだったよ。まさか知ってるひとからそんなことされるなんて。
　誰にも言えなかった。親にも、先生にも。
　そのことがあって、その親友だった子とはギクシャクしてきちゃって。その子はたぶん何も知らなかったと思う。でもわたしは、どうしても今まで通りに彼女と関わることができなくなってた。
　その子は何にも悪くないのにね。で、中学で別々になって、ずいぶん長い間、彼女とは会わなかった。
　わたしは地元にいるのがどうしても嫌になって、大学に入ったのをきっかけにして別の県で一人暮らしを始めた。
　好きなひとができて、性的な関係をもつようになっても、最初のうちはすごく怖かった。べつに乱暴なことをされたりするわけじゃないんだけど、どうしても体が強張ってしまって。
　わたしよりずっとひどい目にあうひともいるんだし、あの体験を思いっきり引きずってるわけじゃなかったけど、人間関係がうまくいかなくなるたびに、アレが原因かなぁ、と思ったりした。
　数年前に小学校の同窓会があって、わたしは思いきって参加してみることにした。あの親友だった女の子も来ていて、わたしたちはすごく久しぶりにふつうの友だちがするみたいなごくありふれた会話をした。
　わたしはあのときあったことを彼女に言わなかったし、彼女もなぜわたしの態度が急に変わってしまったのか、聞いたりしなかった。ただそのとき、ふたりで笑って話ができる、それでじゅうぶんだったんだよ」
　話はそれで終わりのようでした。ぼくは何と言っていいのかわからず、しばらく黙っていました。

　Ｋさんがどうしてぼくにこんな話をしたのかは、よくわかりません。Ｋさんの語り口は淡々としたものでした。しかし、その経験が彼女にとってどれほど重く厭わしいものだったのか、ということはひしひしと伝わってきました。子どものころの彼女が感じた痛みや苦しみは、男性であるぼくには立ち入ることのできない領域にあるように感じました。安易な共感や理解はできませんでした。
　自分が理不尽に受けてしまった傷を、それでも彼女は手放さなかったのだろう。今では、そう思っています。
　ぼくがその話に対して、なにか感想めいたことでも言ったのか、それともな

にも言わず黙っていたのかはよく覚えていません。

「もう夜も遅いし、帰ろうか」
そう言われて時計を確認してみて、もう 10 時近くなっていることにはじめて気が付きました。
３時間以上飲み屋にいたので、代金はけっこうな金額になっていました。
それを見てＫさんが、ここはおねーさんが払ってあげよう、と言って財布を取り出しました。
ぼくが躊躇していると、いいから甘えときなって、とひとりで会計を済ませてしまいました。
店を出てお礼を言うと、彼女は、こういうときに素直に甘えられるひとが出世するんだよ、と笑いました。
「きみ、もっとひとに頼りなさい」
今考えれば、さすがに彼女も少し酔っていたのかもしれません。

彼女と会ったのは、それが最後でした。
こんな魅力的なひとと出会えるのなら、もっと積極的にひととかかわってみてもいいかもしれない、ぼくはそう思うようになりました。
その後、関西を中心にいろいろなフリースクール、居場所を見てまわって、そんななかでフォロとも深いかかわりを持つようになったので、結果としてはＫさんはぼくの人生の方向を大きく変えたひと、ということになります。
しかし最初のうちは、Ｋさんとの出会いを特別なものだったとは考えていませんでした。ひととのかかわりの中で生きていれば、彼女のようなひとたちとも自然と出会えるものなのだろう、とそのときは思っていました。
案外そうでもない、と気付いたのはしばらくしてからのことでした。

多くのひとたちとかかわるなかで、ぼくにとって共感や理解がどうしても及ばない「他者」と出会うことも、何度かありました。
彼ら／彼女らは、ぼくにはよく理解できないような理由で、平気でひとを傷つけたりしていました。逆に、耐える必要のない（むしろ耐えてはいけない）理不尽な暴力にさらされても声を挙げず、ただ黙って耐えている（ように見える）ひともいました。
そんなひとたちと出会うたびにぼくは戸惑いました。なぜ彼ら／彼女らは自分の抱えている「痛み」とちゃんと向き合おうとしないのだろう。それが暴力

の連鎖に巻き込まれないための唯一の道なのに……。それは、どれだけ考えても答えの出ない問いでした。
ひととのかかわりが深く濃密なものになっていくに連れて、気がつけばぼく自身も傷つけたり傷つけられたりという連鎖のなかにいました。
そのころのぼくは、不登校だったころとは別の意味でひととかかわることが堪らなく憂鬱でした。
あのころは、嫌なひとや場所とはただ距離を取ればよかった。でもいまは違う。息苦しく、厭わしいつながりが同時に救いにもなっている……。そんな矛盾にぼくは大きく揺らぎました。
「痛み」を自分で引き受けようとせず、周囲に災いを撒き散らすひとたちに対する怒りと憎しみは、いまでも生々しく想い起こすことができます。心がどす黒く変色していくのがわかるようでした。
ぼく自身も、もしかしたら彼ら／彼女らと同じように、自分勝手な欲望でたいせつなひとたちを傷つけているのかもしれない。だとしたら、ぼくがどれだけひととのつながりについて想いを巡らしたところで、何の価値もない。それでも、ひととのつながりを諦めることはできない……。そんな思考の堂々巡りが１年以上は続いたと思います。

Ｋさんのことをよく思い出すようになったのはそのころです。
彼女は自らが受けた理不尽な暴力を、それでも自身の痛みとして引き受けることができた。なぜぼくは彼女のようになれないのだろう、彼女のように強くなりたい。そのときは、そんなふうに考えていました。Ｋさんは、ぼくにとって強さの象徴のような存在になっていました。
自分のなかの痛みがあまりに激しくなったときには、心のなかで彼女に問いかけたりもしました。
自分も、周囲の人間も、皆滅んでしまえと呪詛のことばを撒き散らしたことが、あなたにもあったのか。
記憶のなかのＫさんは問いかけには答えてくれませんでした。ただ、彼女が自分の体験を話すときの淡々とした口調を思い出すだけで、少しだけ、痛みが和らぐような気がしました。
そうやってぼくは、かろうじて自分を保っていくことができました。
ぼくが自分の傷と向き合うには、長い時間が必要でした。

いつからか、彼女のことを思い出すことも稀になりました。

時間が物事を解決してくれる、というのは半分くらいは正しいのかもしれません。日常の繰り返しの中で、あれほど激しかった「痛み」も自分から切り離して客観視できるほどに小さく、弱くなりました。それに連れて、強さの象徴としてのＫさんにすがる必要もなくなりました。

あるとき、ふと思いました。彼女は、本当にぼくが考えていたような強いひとだったのか、と。

ぼくの心のなかのＫさんは現実の彼女をもとにして作り上げた偶像のようなものだ、という自覚はありました。強さを追い求めるために必要とされた偶像……。でもそれは、彼女に対してすごく失礼なことだったんじゃないのか？その「失礼」の対象が、現実のＫさんなのか、心のなかの彼女の偶像なのか、ぼくにはそのふたつがもう分離できなくなっているので、どちらなのかはわかりませんが…。

「強さ」とは別の物語で彼女を語り直してみたい、そう思いました。

この文章を書きながら、何度か手が止まってしまうことがありました。

当たり前の話ですが、Ｋさんが語ったことは彼女の物語であってぼくの物語ではありません。他者の物語を自分の文脈で語ってしまうことに対する違和感は、書いているあいだ、常にありました。

それでも最後まで書き上げることができたのは、ただこの物語にかたちを与えたい、誰かに話してみたい、という思いが強くあったからかもしれません。

たいせつな宝物をそっとひとに見せるように。

この物語のひとかけらでも、誰かと共有することができればいい、そう思っています。

教育への否定と批判（１）

2012 年 10 月 8 日　マサラ

●はじめに

「高校生が 100 人いるむら」という動画[*1]を youtube で見た。その動画では、高校生が 100 人いたとして、そのうち何人が就職し何人が大学へ進学し……ということを軽快な音楽とともに表現していた。その動画では、高校・大学・専門学校を卒業したあと入った会社で働き続けている人を「ストレーター」と呼び、そのストレーターの生き方を前提とした教育が日本ではなされていると述べている。そしてその動画は、学校を中退した人、卒業しても定職に就かない人、就職しても早期に辞めてしまう人、つまりストレーターではない人たちは 100 人中 56 人おり、「ぼくは忍耐力のないダメなワカモノなんだ」と後ろめたさを感じながらその後の人生を歩んでいると述べ、今の日本の教育に対し「それはあまりにも哀しいと思いませんか」と投げかけ、締めくくっている。

私はいま、大学院で教育社会学の分野で研究をしようとし始めている。教育社会学という学問分野は、教育という事象を社会学のアプローチで研究しようというものだ。先にあげた動画で言うところの、高校卒業後何人が進学し、何人が就職し、というようなことを分析するようなことをしている。

では、「教育」とは何だろうか。ふつう、こういう時には「教育」という言葉がそもそも何を指していて……などといった議論をするのだろうが、ここでは、いま一般的に「教育」が何を指しているのかということに議論を絞りたいと思う。現在、一般的に言われる「教育」とは、「自分より弱い他者を『良く』するための働きかけ」と言えるだろう。親は子どもを教育する。その目的は、その子をより「良い」大人にするためである。国家は国民を教育する。その目的は、より「良い」国民をつくり出すためである。

では、「良い」とは何なのだろうか。それが最初にあげた動画で述べられている「ストレータ ー」としての生き方なのではないだろうか。小学校を卒業し中学を卒業し高校を卒業し大学を卒業し就職し定年まで勤め続ける。そしてその間は途切れることはない。そんな生き方を「良い」生き方としているのではないだろうか。そのような生き方は、経済的に危機を迎える確率も低い、税金を納め国家の繁栄に貢献する。まさに「良い」生き方として考えられている

*1 http://www.youtube.com/watch?v=AhG06EMdiLU

だろう。

そのような「良い」生き方にも疑問を持つ声があがってきている。先にあげた動画の問題提起などもそれだ。また、多様な生き方が模索されはじめてきてもいる。しかし、この「良い」生き方という考えは、まるでお化けのように人々の心の中に巣くい、社会の形成に影響を与えているのではないだろうか。

これまで、教育の抱える問題を考えるとき、いかにその「良い」教育をすべての子どもや国民に提供するかということが議論になってきた。そして今も議論されている。しかし、私は、そもそもその「良い」とされる生き方に疑問を感じ、それを批判的に捉える人にとっての「教育」というものを議論する必要があるのではないかと感じる。それは私が、「良い」とされる生き方やそれを目指す教育を用意されてきたにも関わらず、それを否定して生きてきたと言う経験があるからではないだろうか。そこで、以下、私自身が受けてきた教育を、親とくに母親の観点と私自身の観点から 紐解いて整理していこうと思う。

●幼児・初等教育

私の両親は、ともに大卒である。母親は、地方の私立大学の薬学部を卒業し、薬剤師の資格を持っている。父親は、地方の国立大学の工学部を卒業し、設計士として働いている。つまり、両者とも大学で学んだ専門知識によって専門職に就いている。そんな両者がお見合いで結婚し、一度流産したあと、帝王切開で産まれたのが私である。一人っ子である。父親は男ばかりの３人兄弟の次男、母親は女２人姉妹の長女である。なので親族のつながりは、母方のほうが強かった。父方の祖父母の家庭に行くことはあまりなく、祖父母の顔もハッキリ覚えていないが、それに対し、母方の祖父母とは関わりがよくあった。サザエさんとマスオさんのような関係を想像してもらうとわかりやすいかもしれない。なので家庭内の発言力、とくに私の教育に対する決定権や発言力は圧倒的に母親のほうが強かった。

私は、４歳か５歳ごろから、地方の農村地帯に作られた新興住宅街の一軒屋で、家族３人で暮らし始める。地元の保育所に年中さんから年長さんまで通い、そのまま公立の小学校に入学する。小学校での私の成績は、良いほうだったと思う。先生の言うことは素直に聞く。テストの成績はだいたい 90 点以上。運動が苦手だったと言うこともなく体育も別に苦もなく受けていた。しかし、その裏には母親の力が存在していた。毎日家に帰ると母親は家にいる。そして彼女は私から今日学校であったことを聞き、宿題を確認し、私の横について一緒に宿題をやる。また宿題だけでなく、予習や復習も母親主導のもと一緒にやる。

教育委員会の言う理想的な家庭の親そのものであった。しかし、学年が上がるにつれて、それはのどかで理想的な教育風景ではなくなっていく。

ある日（たぶん小４ぐらい？）、私が少し疲れて、元気なく家に帰ってきたとき（とくにこれといった理由はない、たんに疲れただけである）、母親はそれを見逃さなかった。私に学校で何があったと聞いてきた。そんなこと聞かれても別に何かあったわけではない、私は「別に」と答えた。しかし母親は それでは収まらなかった。「何もないのにそんなふうになるわけがない」と言い、だんだんと声を荒げてきた。私は、答えるのにめんどくさいのと母親の口調に恐さを感じて適当に返事をしていた。すると母親は、当時のクラスメイトでやんちゃだった子の名前をあげて、「そいつがやったんか」と言い出した。もちろん私は否定した、しかし母親は聞かなかった。怒り狂っていた。私は怖くなって反論できなかった。そしてその後、母親は「うちの子が○○にいじめられている」と学校に告げた。その子は先生に怒られた。私はただ黙って見ていた。

いま思い出すと、そのころから母親の行動はエスカレートしていった。私がしんどそうにしていると、「何があったんや」と強い口調で問いただしてきた。相変わらず「別に何もない」と答えてもいっさい聞きいれてはもらえなかった。小５～６年生の当時、私は、たしかにクラスの一部の子と仲が良くなかった（別に深刻にいじめられてたとかではなかったが）。母親はそれを見逃さなかった。その子の通学路で待ち構え、その子を捕まえては説教をするということをやっていた。

いま思うと、そのころから私は、世界に対して生きにくさを感じてきたのではないかと思う。しかし、そのことによって私がしんどそうにしていると、それがまた母親の異常な行動を引き起こしてい たのではないかと思う。 なぜ母親はそのようなことをしたのだろうか。おそらく、彼女にとって、私に「良い」教育をするということは、私の進路上にある障害物を取り除いて、私がスムーズに人生のトラックを駆け抜けられるようにすることだったのだろうと思う。彼女から見て、学校教育というものは、息子を「良い」大人へと向かわせるトラックだったのだろう。そして、彼女は、そこに何か障害物があり、息子がそれにつまづくことを恐れていたのだろう。なので、私が調子の悪いとき、執拗にその原因を突きとめようし、さらには何か目立つ物が原因であると思い込み、それを消し去ろうと必死になっていたのだろう。

●前期中等教育

そして私は、そのまま地元の公立の中学校に進学する。１年生のときは楽し

かったことを覚えている。これまで小学校であったしがらみみたいなものも薄れ、新しい人間関係ができ、勉強につまずくこともなく、一見順調に過ごしていた。

しかし一方で、母親の教育熱は加熱していた。当時、私が通っていた中学校では、中間・期末テストの成績には学年での自分の順位が記載されていた。もちろん母親はそれを執拗に気にした。わずかな順位の上下に彼女は一喜一憂していた。順位が下がったり、点数が低かったりしたら、母親は激昂し、わめき散らしながら私を叩きまわした。しかし、この時点で、私は、母親の私の成績へのこだわりが異様であるということに気づいていなかった。ただ、成績が低ければまた叩かれると怯え、母親にわめかれ叩かれても泣きながら許しを請うだけだった。だがあるとき、それが異常であるということに気づいた。たしか２年生の１学期の期末テストだったと思う。数学のテストが返されて、私の点数が 85 点くらいだった。母親は数学や英語で 80 点台だと怒り散らすのはわかっていたので、私は教室で涙を浮かべていた。すると隣の席の生徒が私に文句を言ってきた。「そんなに良い点数なのになんで泣いてるんだ」と。そのときに私は気がついた、母親に叩かれる筋合いはないと。その日、テストの点数を見た母親は、怒り、私に暴力をふるってきた。それに対し私は怒鳴り返し、叩き返した。それ以降、わが家では、いわゆる家庭内暴力の状態になっていく。

そして、中学２年生の３学期、私は学校に通わなくなる。理由はハッキリしていない。別にいじめられたわけでもなく、トラブルがあったわけでもない。とにかくいけなくなり、そのまま不登校になった。その後、学校には修学旅行にしか行っていない。それに対し、母親は最初どうしていたのか、よく覚えていない。平常心でいられるはずもなかっただろうが、とくに何かやり合ったという記憶はない。ひょっとしたらすぐに不登校に対する知識を得て、理解のある親を演じていたのかもしれない。またあるいは、そのころは家庭内の暴力が日常的だったので、私の記憶が明確でないのかもしれない。

学校に行かなくなった理由はハッキリしないと書いたが、最近になって一つこうじゃないかなということが見えてきた。それは、私は人生に絶望したということだ。中学生が何でそんなことを思うのかと、親や学校にも恵まれていて絶望なんてするわけがないと思うだろうが、それでも当時の私は、自分の人生に絶望していたと思う。その絶望は、その当時に置かれていた状態への絶望ではなくて、将来への絶望だった。先に述べたように、私の未来は母親の手によって整備されていた。母親からは「あんたは大学行くんや」と言われ続けていた。地元の偏差値トップの進学校である高校の校章を冷蔵庫に貼られて「あんたはここへ行くんや」と言い聞かせられていた。おそらくそのための資金も準備されていたのだろう。つまり、母親の手によって、私の進むべき「良い」人生が、トラックのごとくそこには整備されていた。しかし、私は、その彼女が用意した、そしておそらく世間一般的に「良い」と呼ばれる生き方を生きるということに、なんの喜びや希望も見いだせなかった。使い古された言葉だが「良い高校を出て、良い大学を出て、良い会社に入る」という「良い」生き方を当時の私は否定した。その否定の形として、不登校になったのだと思う。

●まとめ

自分の子どもを「良く」しようと「教育」する母親。しかし、その「良い」生き方に絶望しその「教育」を否定した私。このような図式が、今回のレポートを書いていく上で見えてきた。

これまで、「教育する側」からの教育という議論は語られてきた。それは教育学、教育心理学、教育工学という体系だった学問分野として発展してきた。しかし、「教育される側」からの教育というものは議論されてきただろうか。またそれは、議論になり得るのだろうか。そのためには、「教育」に対する「否定」から「批判」へと議論を進めていく必要があるのではないだろうか。そのために私は何をするべきなのかを考えているのかもしれない。

私はその後、家にひきこもり、そしてフリースクールに通う。そして大学に進学して大学院へと進む。本当はそこまで書きたかった。その部分が、「否定」から「批判」へと議論を進める上での重要な事柄になるのだろうとは思う。しかし、時間が間に合わなかったのと、まだ自分のなかで整理がついていないので、今後の課題としたい。

孤 独

2012 年 11 月 12 日 津路（つじ） 鳴烏木（なおき）

今回の自分の生きづらさは「孤独」です。現在、自分は孤独です。学校に行っていないし、仕事もしていないし、恋人もいません。友だちは何人かいますが、友だちと会って何かをしている時も孤独を感じたりします。他の人たちはどうですか？　孤独を感じますか？　まず最初に、孤独になった経緯と現在の自分の気持ちを書こうと思います。

学校に行かなくなって孤独を感じるようになりました。将来の事やお金の事も不安でしたが、ひとりで過ごすのは寂しかったし、張り合いみたいなものもなくなって、ひとりポツンと社会の外側にいるような気持ちになりました。学校に行かなくなった時に感じる何とも言えない喪失感や虚無感、誰からも必要とされていないような疎外感や、学校から逃げ出してしまった罪悪感などは、実際に学校に行かなくなった人にしか分からない感覚だと思います。

単位制の高校に進学しましたが、孤独感がなくなる事はありませんでした。「こんな事なら全日制の高校に進学すれば良かったな」と思いました。高校卒業後、ひきこもり支援団体で寮生活を送るようになり、友だちとカラオケに行ったり麻雀をやったりしているうちに、人間関係が構築されていき、孤独感は次第になくなっていきました。友だちや周囲の人たちと合わせる事によって、孤独感はなくなるのだなと思いました。服装や髪形に気をつかっていたのもこのころでした。

その時、自分は就労支援を受けていて、アルバイトをして大学に進学し、サークル活動をして恋人を作る事が自分自身の目標でした。他の寮生も自分と同じような事を思っていたように思います。ひきこもり支援団体でＡ君という友だちがいました。Ａ君は高校生の時に学校を中退し、大検（高認）を取得して大学に進学しました。東京の有名大学に進学し、現在はサークル活動をしていて恋人もいるようです。Ａ君は自分自身の憧れでした。「自分もあんな大学生活を送ってみたい」という思いがありました。しかし、自分は大学に進学できませんでした。

就労支援に対しても疑問が出てきました。僕の通っているひきこもり支援団体の方針というのが「仕事をする上で１番大事な事は人間関係であって、いくら能力が高い人でも、人間関係が上手くいかない人は仕事ができない。人間関係を上手くやっていくための練習として、ひきこもりの人たちに寮生活をさせている」という方針です。人と人とが関わり合う時に気づかいや礼儀は大事だと思います。しかし、それ自体があまりにも大きくなりすぎると、常に相手の顔色をうかがってしまい、相手に対して意見を合わせるだけのロボットのような状態になってしまいます。ロボットのような状態でも、仕事さえしていたら、学校に通ってさえいれば、ひきこもり支援団体のスタッフや両親、友だちや周囲の人たちは褒めてくれました。

僕自身、ひきこもり支援団体の方針に疑問を抱き反発しました。反発すると、スタッフや両親、友だちからも距離を置かれて再び孤独になりました。孤独になりましたが以前のように人と合わせる事はありませんでした。人は孤独であってもいいと思うのです。

以前はあれだけ大学に進学したい気持ちでいっぱいだったのに、今となってはそんな事はどうでもいいという思いがあります。自分が望んでいた事は、大学を進学した事で得られる「人間関係」や「学歴」であって、孤独を恐れるがゆえに生まれた衝動でした。逆に、大学に進学しなかった事によって自分自身の居場所や社会的な承認を得られない事が怖かったです。

●孤独について自分自身が思う事

孤独にも種類があるように思います。前回のレポート（『づら研やってます。』Vol.01「承認と依存」参照）の繰り返しになってしまいますが、「肉体的な孤独」と「精神的な孤独」です。肉体的な孤独とは、人と会っていない事によって生じる孤独で、精神的な孤独とは、人と会っているにもかかわらず、自分がその輪の中に入っていけない時に生じる孤独です。居場所に行けば孤独でなくなるかと言うと、そんな事はありません。人と交わる事によって生じる「関係」を結べない時、人は孤独です。人と人とが関係を結ぶためには相手と向き合わなければならず、一時のノリやテンションを共有したとしても関係は結べません。

人間関係が豊かで友だちもたくさんいる人のイメージが「陽」なら、孤独のイメージは「陰」となるような気がします。孤独は恐ろしいもので、人は孤独

を恐れます。自分自身の属性が陰である事を受けいれる事は勇気がいる事で、陽になるようにがんばったりもします。自分自身の陰である属性を無理に陽に引っ張っていく事がそんなに大事な事なのでしょうか？　僕は陰であり続ける自分自身が大事だと思います。

●誰とも分かりあえない孤独

本来、人は孤独な生き物だと思う。しかし、ふだん私たちはその事を忘れている。本来、孤独であるはずの自分が怖く、人とつながろうとする。人と群れたり、つながっている時は、自分が孤独であるという感覚が薄れ、自分と他者との境界線があやふやになります。人は他者に理解されたく承認を欲してしまう。一瞬誰かとつながったり共感したりする瞬間もあると思います。しかし、誰であろうと自分の孤独は自分だけのもの。誰とも分かりあえない孤独。

いつだって人は　その心は　孤立している　心は理解されない　伝わらない　誰にも伝わらない　時に伝わったような気になることもあるが　それはただこっちで勝手に相手の心をわかったように想像してるだけで　本当のところは結局わからない　わかりようがない　それは親だろうが　友人教師誰であろうと　例外なく無理なのだ　心は解けない　心はどうにも解けぬ　袋小路　迷路　時にその当の本人ですら迷い込み　出口を失う　迷宮　伏魔殿　他人に解けるはずがない　ゆえに欲している　皆理解を　愛情を求めている　求めて求めて　求め続けて　結局近づけない　ますます遠ざかるようだ　誰も人の心の核心に近づけない　世界に57億の民がいるのなら　57億の孤独があり　そしてその全てが　癒されぬまま死ぬ　孤立のまま消えていく
（『賭博黙示録 カイジ』第８巻 福本伸行）

●孤独な自己の世界

大学生になったＡ君は、学歴や恋人を得た事により「ひきこもる」ことを失ってしまったように思います。ひきこもる事によって得られる事は、３人称の承認（友だちや集団、学歴等の社会的な承認）や、２人称の承認（家族や恋人からの承認）を失う事によって得られる「孤独な自己の世界」にあると思います。「孤独な自己の世界」とは、学歴や社会的地位、常識や法律、承認等から隔絶された世界で、自分自身の頭の中に存在する概念です。自分自身、「孤独な自己の世界」の中で繰り返される自己との対話の中で、自分自身の価値観や考え方、アイデンティティーが形成されてきたように思いました。

ひきこもっている人に対して「支援」をしようという動きがあちこちで起こっています。心療内科ではカウンセリングや投薬治療、就労支援では資格取得やコミュニケーション能力を伸ばす事で、社会参加をさせようというものです。ひきこもっている状態はダメな状態で社会参加をしている状態はいい状態なのでしょうか？　自分はそうは思いません。就労支援や自立支援ではなく、「孤独な自己の世界」の中で、自己との対話ができるような環境を与える事の方が大事なのではないでしょうか？

しかし、現在の就労支援や自立支援は反対の事をやっているように思います。社会の中で働く事や集団の中に適応する事が、生きていく上では大切だと言い続けていて、社会や人に自分を合わせてばかりなような気がします。就労支援や自立支援をしている人も、一度ひきこもってみたらいいと思う。ひきこもってみたら、ひきこもっている人のつらさや自分と社会との関係、働く事についての疑問など、自分が抱えているいろいろな問題が見えてくると思うんです。毎日バリバリ働いている人こそ、「孤独な自己の世界」での自己との対話が必要なんじゃないかなと思う。

●孤独な世界は大事だけれども……

しかし、「孤独な自己の世界」にも危険があります。自分は、３人称の承認や２人称の承認を失ってしまった時に承認欲求が強く働き、無理やり自分自身を承認しようとして、「孤独な自己の世界」を歪めてしまった時がありました。インターネットの掲示板を見ていると、相手の事を批判することによって自分自身を保っているような人が多いようにも思い、自分自身もそうでした。１人称の承認が確立していない状態で、自分自身と向き合う事は危険な面もはらんでいて、相手や自分に対して暴力という形で出てしまう事もあります。

人は孤独な生き物だと思う。しかし、人はひとりでは生きてはいけないとも思う。ネコのように群れを作らない動物もいれば、イヌのように群れを作る動物もいて、「ヒト」は群れを作る動物のように感じる。人は人の中にいないと生きてはいけない動物なのかもしれない。誰とも会わずに家の中でひとりでいると、自意識が過剰になったり喪失しそうになったりして、頭がおかしくなりそうになります。どうやらこの気持ちは自分だけではないようです。

自分が野宿者支援に関わりだした時、野宿者や元野宿者に「野宿をして大変な事は何でしたか？」とよく質問していました。自分は、食べ物がない事や冬の寒さが大変だろうなと思っていましたが、自分が一番よく聞いた答えは孤独でした。「野宿をするようになって今までの人間関係がすべてなくなってしまった」「おれと友だちになってくれ」と話す人もいました。ロビンソン・クルーソーが最も恐れた事も孤独です。人はパンだけでは生きてはいけず、パンを一緒に食べる仲間が必要なのかなと思います。

●孤独な世界を飼いならす

ひきこもる事によって得る孤独な世界があると思う。しかしまた、ひきこもっていると孤独な世界が歪んでしまうとも思う。人は孤独な存在なのかもしれないけれども、永遠に孤独なままでは生きられないようにも思う。Ａ君は今どうしているのだろう？　学歴があれば、恋人がいれば孤独でなくなるのか？　逆に自分自身を見失ってしまわないだろうか？　自分自身はどうだろう？「孤独な自己の世界」は大事なのかもしれないが、孤独の闇に自分自身を見失ってしまうかもしれない。

孤独は怖い。孤独である事を人は恐れ、他者とつながろうとする。自分自身の存在を承認して欲しく、依存的に関係を求めてしまう。自分自身、恋人が欲しい衝動に駆られていたのも、孤独を恐れるがゆえに承認を求めてしまっていたように思う。自分自身の価値や世界を構築するために孤独な世界にひきこもり、他者や他者の意見を認識するために人と接したり関係を結ぶ事が、孤独な世界に生きる孤独な自分の課題だと思う。

●後書き

今回のレポート「孤独」は、前回のレポート「承認と依存」の自分自身への回答として書きました。「承認と依存」のレポートを書いている時に「どうしたら承認を得られるのだろうか？」とか、「依存ではない人間関係の構築の仕方」にばかり目がいっていて、土に足が着いてないような状態でした。承認でも依存でもなく、答えは孤独にあったのかなと思いました。

自分自身、社会の価値観に苦しんでいて、恋人を作ろうとしましたができなくて、自己否定ばかりを繰り返していました。社会の価値観を内面化してしまう所に自分自身の生きづらさがあるのかなと思いました。文章の中に出てくるＡ君について触れてみると、モデルになった人は何人かいますが、Ａ君というのは架空の存在です。Ａ君のように、３人称の承認や２人称の承認を満たしている人を見ると、自信に充ち溢れていて「承認の力は凄いものがあるな」と思ったりもします。

承認もなかなか厄介な代物で、「承認の棺」とでもいいましょうか、承認があまりにも強く働きすぎると、本来、見えるものが見えなくなってしまったり、自分自身の身動きが取れなくなってしまったり、承認され続けるために常にがんばり続けなくてはならなく、失敗する事ができなくなってしまったりします。

人生の宿題の答えは自分の外側にあるのではなく、自分の内側に存在していて、社会の価値観に自分を合わせていくのではなく、自分の中にある答えを一生懸命に引き出せばいいのかなと思います。自分の中にある答えを引き出す作業というのは、お金にならない事がほとんどだと思います。それでも引き出さずにはいられないのが、自分の性分なのかなとも思います。ふだん、こんな事を考えてひきこもっている人間です。意見、感想などありましたらよろしくお願いします。

存在の承認

2013年1月21日　ＨＬ

自分や他人の生きづらさだったり、今社会を包み込んでいる、何かもやもやしているものを考えたとき、キーワードになったのは「居場所」や「自分の存在」だった。もっと言えば「なぜ自分はここにいるんだろう？　自分はここにいていいのかな？　この世界で自分は生きていていいのかな？」といったような問いだった。また僕は過去に４回自殺未遂しているのだが、その理由はどれも「自分はこの世界にいらない。生きていちゃいけない。自分なんてこの世からいなくなってしまった方がいいんだ」と考えたからだった。他の生きづらさを抱えている人の話を聞いても「どうして自分は生きているんだろう」とか、「自分はここにいていいのだろうか」といった声は非常に多いと感じる。この「居場所」だったり「自分はここにいていいのだろうか」といった問いは、現代の生きづらさというものを考えるにあたって非常に重要なものだと考える。今回のレポートでは「居場所」や「自分の存在を受けいれてもらえる」ということに関して、自分の経験を振り返りながら、さまざまな視点から考えてみたいと思う。

●自分の経験

まずはじめに、自分の経験を書きたいと思う。

はじめて「死にたい」と思ったのは、中学３年生の冬だった。友だちやクラスメイトと話しているとき、ふと「俺、ここにいなくてもいいよな」と思った。それまでクラスで浮いていたところはあったし、友だちも少なかったし、つらいこともあったが、「自分はここにいてはいけない。生きていてはいけない」と思うことはなかった。それと同時に、友だちと仲良くやっているクラスメイトがすごくうらやましく見えた。そしてそれがすごく悲しくなってきて、「どうして自分は生きているのだろう？」と考えるようになった。

高校２年生の６月だった。当時自分の取り柄でもあった、勉強と部活が上手くいかなくなっていた。さらに「勉強できても、部活ができても、友だちや恋人、幸せな生活は手に入らない。リア充（彼女がいたり友だちがいっぱいいたりで毎日楽しく過ごしていて、リアル（現実）が充実している人のこと）にはなれない。こんなのに力を入れる意味なんてない」と感じ始めていて、勉強や部活へのモチベーションがなくなっていた。そんなときに、父親がテスト期間中にも関わらずまったく勉強しない僕を見て、おもいっきり叱りつけ、無理やり勉強させた。その時、自分の中で何かが壊れた。頭の中で嫌な記憶や罵声、被害妄想が駆け巡り、自分なんて死んでしまえばいいと思った。勉強も何もできない自分なんて消えてしまえばいいと思った。どうすればいいのかがわからず、頭の中が絶望感でいっぱいになって、ひたすら子どものように泣き叫び、暴れていた。これ以降、月に数回学校を休むようになった。学校の勉強にも集中できなくなった。

８月ごろから、メンタルサイト（精神的にしんどい人が集まるサイト）などにはまって行った。そこで死にたい、しんどいと吐きだしていた。ひたすら居場所や友だちなんかを求めていたのかもしれない。自分の気持ちを受けとめてもらいたかったのかもしれない。

12月、テストが帰ってきた。努力してがんばったのに、結果は最悪だった。こんな自分は駄目だと思った。自分なんて何の価値もないと思った。そしてまた家に帰って泣き叫んで、部屋の中の物、教科書、プリント、部屋にあった物や勉強道具をみんなめちゃくちゃにした。学校も数日休んだ。部活の大事な試合もあったが、それも休んでしまった。あとで部活の友だちに「テスト悪かった程度で休むなよ、自分のやったことわかってるの？」と言われた。その言葉がとても悲しかった。部活でも居場所が、自分の価値がなくなっていったように思った。

１月、今考えれば限界だったんだと思う。自分の価値がわからなかった。勉強も部活もできず、面白くもなくて、人間的な魅力もなく、モテない自分は死んだ方がいいと思った。友だちがたくさんいる人や勉強も部活も人間関係も上手くいっている人に嫉妬し続けていた。正月に初詣に行ったとき、願ったことは「早く死ねますように」だった。

１週間ほどして、部活の試合があった。試合の途中から上手くいかなくて、頭の中がめちゃくちゃになった。みんなに見られているのがすごく怖くて、みんなに下手くそって馬鹿にされている気がした。結果は惨敗だった。本当に自分に価値はない、自分なんていらないと思った。帰りに、もう電車に飛び込もうかと考えた。でも臆病だから、怖くてできなかった。それから、ひきこもるようになって、学校には行かなくなった。

ひきこもって３日後、お父さんとお母さんに無理やり外に連れ出された。学校の正門の前まで連れ出されたが、そのあと観念して学校行くふりして逃げて、コンビニでカッターナイフを買って死のうとした。でも臆病だから傷すらつけることができなかった。

１カ月後、お父さんにものすごく叱られた。いつまで甘えているんだって、

いつまでひきこもっているんだって、ものすごく叱られた。自分はひたすら泣いて、発狂して、何もかもわからなくなっていた。自分はこの世にいらないんだって何度も感じた。その夜、遺書を書いて、家から抜け出して死のうとした。でも結局できなかった。そしてなんでかわからないけど、深夜の散歩が楽しくなってしまって、夜空を見ながら帰った。

それから、ひきこもったり保健室登校をしたり、ネットの世界で別の不登校の友だちをつくったり、おもにインターネット見たりアニメ見たりゲームしたりして過ごしていた。体力があるときは勉強もした。そして友だちや先生に支えられながら１年をすごして、奇跡的に大学に合格することができた。

大学入ってからは期待と不安で胸がいっぱいだった。新しい友だちができるかなとか、もしかしたら彼女できるかな、みたいな期待と、うまくやれるかな、そして自分が元ひきこもりだって知られたらみんな僕のことを嫌うのかな、といった不安もあった。

大学でも人間関係や自分の心の問題でいろいろあり、大学１年目の 10 月に一度自殺未遂してしまった。当時とあるサークルに入っていたのだが、みんなから馬鹿にされている、嫌われている。自分なんていない方がいい。という被害妄想で頭がいっぱいになり、オーバードーズしてしまった。結果入院して、サークルや周りの人に凄い迷惑をかけてしまった。

そして２月、自分が決定的に壊れる出来事が起こった。始まりは、当時付き合っていた、そして依存していた彼女に振られたことだった。その時、頭が後悔や悲しみや彼女への罪悪感でパンクしそうになって狂いそうになった。本当に危ない、自分を傷つけてしまうのかもしれないと感じたので友だちに電話した。すると、「彼女に振られたくらいで電話してくるな、泣くな、一人で解決しろ（まあその通りなのかもしれないが、そっちの方が男らしいし）」とおもいっきり説教された。さらに「もう他人に頼るな、自分で解決しろ」と言われた。すごく悲しかったし、心が痛かった。そんなこともあって体も心も限界だったが、その後バイトがあったのでバイトに行った。その夜、地元の信頼できる友だちとスカイプした。とにかく誰かに慰めてほしかったんだと思う。しかしそのスカイプでも同じように説教された。その時自分の中で何かが壊れた。自分はどうやっても幸せになれないと思った。自分は苦しみ続ける人生を送るしかないのだと思った。何かが壊れて、叫んで、発狂していた。他人に頼らないようにしようと、我慢しようと、押さえつけようとしても無理だった。頭が割れそうなくらい、脳みそが内側から壊されていってるんじゃないかというくらい痛かった。世界が歪んで見えた。大げさかもしれないがそのくらいつらかった。苦しかった。そのあとやってはいけないと思ってはいたが、抑えきれずにその気持ちをＳＮＳで吐きだしてしまった。案の定サークルの先輩からおもいっきり叩かれた。余計しんどくなったし、つらくなった。痛みは増すばかりだった。そして何もできない状態になった。そのためバイトもみんな休んで実家に帰ることになった。１週間ほどして持ちなおったが、またしんどくなった。被害妄想や死にたい気持ちでいっぱいになった。そしてまたオーバードーズしてしまった。それがきっかけで何もできなくなり、信じられなくなり、当時の友だち、サークル、バイト、大学入ってつくりあげたすべての人間関係が切れた。というより自分から切ってしまった。自分はいない方がいい人間なのだと感じた。自分なんて他人と関わらない方がいいし、みんな自分のことを嫌っているんだと考えていた。それ以来、しばらく感情の起伏もなくなった。ただただ苦しかった。それまで付き合っていた彼女ととても幸せな日々を送れていたことや、いろんなことでうまくいっていたところもあって、死ななくて、生きていてよかったと思える経験もあって、最高に幸せだった分、なおさら天国から地獄へと落とされたようでつらかった。

それから少しして、通っていたクリニックのカウンセラーに話しに行った。するとカウンセラーにすごくつらいことを言われた。それで頭の中がめちゃくちゃになって、気がついたら部屋の中の物をみんなカウンセラーに投げつけていて、医者に取り押さえられていた。そしてクリニックから抜け出して、大通りに出て車にひかれようとして死のうとした。でも臆病だから死ねなかった。その時も頭には、「自分なんていないほうがいい」という言葉が浮かんでいた。

それから２年目の大学が始まったが、もう人と関わらないでおこうと思った。２月の出来事以来人と関わるのがすごく怖くなった。自分には価値がない。自分なんて死んだ方がいい。みんな自分のことを嫌っている。他人に頼っても無駄だ、他人に迷惑をかけるだけだ。自分なんていない方がいいんだ。そんな言葉が頭の中にずっと浮かんでいた。

●普通の人を観察していて

大学にいる普通の人たちはなんであんなに楽しそうなのだろう？　ふとそう感じた。彼らはどうしてあんなに大声で話せて、周りを気にしないでいられるんだろう？　自分をだしていけているんだろう？　友だちをつくっていけるのだろう？　と疑問に思った。自分なんていつも人が怖くて、いつも周りを気にしているのに。

そこであることに気がついた。彼らは「自分がここにいることが当たり前。

自分が受けいれられていることが当たり前」だと感じているのではないか？　一方自分や、自分と同じような人たちはいつも「嫌われていないかな」「自分はここにいていいのかな」ということをチェックしながら生きている。いつも不安なのだ。「自分がここにいていいという実感」や、そういう実感を持てる居場所というものが、とても重要ではないかと感じた。

実際、自分にはそういうものがなかった。だから必死に勉強したり部活の練習をしたりして能力を高めることによって自分の居場所を守ろうとした。周りから認められようとした。しかしそれはとてもつらかった。すればするほど、自分がみじめになっていく感じがした。こんなことをしても居場所を手に入れることはできないと、心の底で気がついていた。

僕より勉強ができなくても、部活の成績が良くなくても、社会、人々に受けいれられる人は受けいれられている。この差はなんなのだろう？　どうして僕は受けいれられていなくて、彼らは受けいれられているのだろうか？　またはそう感じるのだろうか？

●能力主義？

今の社会、とくに学校などでは、能力や学力があった方がえらい、すごい、幸せになれる、といった見方をされていると感じる。このような考え方が浸透した原因のひとつには、本人の学力を使って大学に入り、優れた学歴を手に入れ、その学歴を使っていい企業に就職するというある種のレールが敷かれていることにあるのだろう。（現在ではその傾向は弱まっているが）そのため、学力や偏差値が高ければ高いほど、すごい、優れている、といった目で見られると考える人もいるだろうし、自分は本気でそう考えていた。学力や能力のある人間にならないといけないと必死に思っていたしがんばっていた。勉強すれば、高い能力があれば幸せになれると信じていた。しかし、だからといって偏差値が高い人、学力が高い人が必ずしも幸せになれるわけではなかった。大卒も、高卒も、一応にみんな幸せな人は幸せそうだった。反対に大卒でも高卒でも、幸せじゃなさそうな人は幸せじゃなかった。学力や運動能力などの能力が高かろうが低かろうが、その人が幸せそうかどうかには対して関係がないように思えた。すると何が重要なのだろうか？　僕はここでも、「ありのままの自分を受けいれてくれる居場所があるかどうか」が重要だと考える。

彼らには、というより、ほとんどすべての人なのだろうが、自分を受けいれてくれる人や居場所があった。ダメな自分、勉強ができない自分、そんな自分でも受けいれられていたのだ。だから安心して自分を見せることができるのではないか。一方自分には、「優秀な自分を受けいれてくれる居場所」しかないと感じていた。だから、優秀じゃない自分は受けいれられないと感じていた。優秀じゃなくなったら自分に価値がなくなるし、誰も自分のことを見てくれないと感じた。だから苦しくても苦しくても、努力することを止めなかった。こんなことに価値がないと薄々わかっていても、止めなかった。自分を出すこともやめて、自分の好きなものも隠して、みんなに好かれようと、振り向いてもらおうと必死になっていた。でもそんな生活はすごくしんどかったし、幸せとは程遠かった。

●現実じゃない居場所

ネットサーフィンをしていて「学校にも家にも居場所がないなら、もう自分の内面にひきこもるしかない」という言葉をみつけた。たしかにそうだと思う。現実に居場所がないのなら、もう現実じゃない場所、空想の世界、あるいは自分の内面にひきこもるしかないと思う。自分の内面や空想の世界だけは、どんな自分でも受けいれてくれるし、どんな自分にだってなれるのだから。

もうひとつ、ネットという場所があった。前述したように僕も高校生のとき、ネットの世界で別の不登校の高校生と交流していた。ネットという空間はすべてを受けいれてくれる。死にたい、という言葉も受けいれてもらえる。今日手首切ってしまったんだ、親を殴ってしまった、彼女ができない、彼氏に酷いことをされた、学校に行きたくない、行けない、どんなこともどんな気持ちもあの空間は受けいれてくれた。慰めてもらえた。反対に励ましたり、慰めたこともあった。ネットの世界ではすべてを、自分のどんな気持ちも受けいれてもらえる場所があった。だからすごく居心地がよかったし、心が安らいだ。

●自分を受けいれてくれる場所

現実にも自分を受けいれてくれる場所があった。それは高校の友だちたちだ。彼らと一緒にいる間だけは本来の自分を出せた。彼らはどんな自分でも受けいれてくれた。彼らといるときはすごく楽しかった。彼らといるときと他の人といるときの自分は別の人間といってもよかった。彼らとともに過ごしていると、すごく人生が充実している気がしたし、幸せだった。

ここでふと思った。自分が受けいれられていると感じるときというのは、本来の自分が出せている状態なのではないか、自分らしく生きることができている状態なのではないか、と。自分の好きなもの、自分の価値感、そんなものが

思う存分、安心して出せる、言える状態、環境、それが「受けいれられている」という実感につながるのではないか。

●まとめ

このレポートで主張したかったことは、要するに、生きづらさを抱えている人は、「ありのままの自分を受けいれてくれる居場所や人」や「自分の中の感情を吐きだす、共有する場所や人」がない、もしくはないと感じている人が多いのではないか？　ということだ。そしてそのような場所を見つけることが、生きづらさから脱出するための鍵なのではないだろうか？

僕は、ありのままの自分の存在を受けいれてくれる場所、人が、生きづらさを感じている人、少なくとも僕には必要だと感じるし、その場所、人を広げていく必要があると考える。自分は受けいれられている。自分はここにいていいんだ、自分らしく生きていいんだ、そう確信できる場所にいるときは、とても不安が和らぐし、楽しいからだ。生きていていいと思えて、エネルギーが湧いてきて、そして自分を出せて、自分を表現できるからだ。そしてそのような生き方は、とても気持ちいいと思うからだ。

●あとがき

このレポートを書いて半年？　かそれ以上の時間が経過し、僕のレポートがづら研の冊子に掲載されることになりました。そこで、この半年間で新たに気がついたことをここに書いておこうと思います。

まず僕の現状ですが、精神的な病気を患っているため、今は大学を休学し、療養に集中しています。そして半年間、また自殺未遂したり病院に入院したり人間関係でいろいろあったりしましたが、半年前と比べてかなり元気に過ごしていると感じています。

なぜそのように過ごせるようになったかというと、あることに気がついたからです。それは、

「もっとも、ありのままの自分を受けいれていない、自分に価値がないと感じている、自分は生きていてはいけないと考えている、自分を縛っている、自分を苦しめているのは自分自身である」

ということです。他人でもなく、環境でもなく、一番自分を否定していて、受けいれていなかったのは自分自身でした。自分が自分を否定するから、相手も

自分を否定しているように見えていたのかもしれません。自分が自分を受けいれていないから、相手が受けいれてくれているのにもかかわらず、受けいれてくれていないように感じていたのかもしれません。自分が自分を否定するから、自信がなくて、能力や友だちの多さなど、そんなもので自信を得ようとしていたのかもしれません。結局、自分で自分を苦しめ、縛っていたのかもしれません。案外みんな、自分のことなんか気にもしてないし、嫌ってもなかったのかもしれません。そのことに気づいてから、かなり楽になりました。そして、まずは自分自身を受けいれよう、自分自身、この世にたったひとりしかいない自分や自分の世界を大切にしよう、と考えるようになりました。もしかすると、環境や人間関係などの外部ではなく、自分自身の中身にこそ、生きづらさと向き合うヒントがあるのかもしれません。文中に出ていた「普通の人たち」も、環境や人間関係に受けいれられているのではなく、自分自身を受けいれることができているから、毎日楽しく、自分を出してやっていけているのかもしれません。

もちろん、完璧に自分の中の生きづらさがなくなったわけではありません。自分の中で解決していない問題や悩みがあるし、まだまだ人は怖いなって思うところはあるし、将来のこと考えるととても不安になるし、サークルの人や家族、友人いろんな人に迷惑をかけてしまったなと感じることもあるし、できることなら謝りたいなとも思うこともあるし、なんか生きるのに疲れたなって思うこともあるし、それでしんどくなることもあります。

でも、以前よりはうまく問題や生きづらさと付き合っていける気がします。嫌なことがあったらノートにみんな書く、すぐに休む、といったストレスとの付き合い方もうまくなりましたし、この半年間の入院や自殺未遂、新たな出会いを通して、綺麗事かもしれませんが、自分の価値や存在の意味を決めるのは、自分が生きていていいかどうかを決めるのは、他人ではなく、自分であるとも気づきましたから。そして自分を含め、たとえ他人に嫌われようが、特定の人たちに受けいれられなかろうが、何か問題や生きづらさを抱えていようが、誰もが生きていていい権利を持っているということにも気づきましたから。そして、必ずどこかに自分を受けいれてくれる人、場所があることにも、気が付きましたから。そして何よりも、「こんな自分だけど、まあいいや」って思えるようになったこと、時間や新しい人々、世界との出会いが僕の心の傷を埋めてくれたことが、生きづらさとの付き合いを楽にしてくれたような気がします。

稚拙なレポートでしたが、最後まで読んでいただき、ありがとうございました。（2013 年 7 月ＨＬ）

バカボンのパパになりたくて

2013 年 2 月 18 日　山下耕平

○とりとめもなく、散漫に、流れていく。まとまらない。抑えられない。
肉体までもが流れてしまいそうだ。
溶けてしまいたい。ざらざらと崩れていくのは、耐え難く、心地が悪い。

○ひどく乾いて、カサカサ、パラパラと砂のように崩れていく。
肉体を、一個の塊として維持することができない。
カサカサ、パラパラと、崩れては流れ、砂と化す。砂漠。

○今の状態では、今の状態に見あった言葉しか吐けない。
それ以上の言葉を吐こうとすれば、言葉が先行し、どうしてもウソくさくなる。

○あらゆる防御をはぎとること。
皮膚をはぎ、赤裸々な自分の存在をさらけだすこと。
激痛によって、浄化せよ。

○磁石のおたがいに反発しあうエネルギー。矛盾の反発しあうエネルギー。
これを、自分という器のなかにとらえること。
それを、無限にくりかえすこと。

以上は、たぶん 22 歳ごろに書き留めていたものだ。パソコンというのは、恐ろしいもので、すっかり忘れ去っていたのに、あたかも昨日書いたもののごとく、ハードディスクに保存されていた。いま読むと、多少は面の皮が厚くなってしまった自分の、皮の内側がうずくのを感じる。そうだ、自分にもこんな感覚があったのだった。

当時、たぶん私は激痛を求めていた。自分をおおっている、なまあたたかい包みを裂いて、“ 自分 ” を世界にさらしたかった。女性にはわかりづらくて恐縮だが、ちょうどチンチンの皮がめくれ始めたときの痛みのように（これじゃ、まるでフロイトのチンチン説だけど……）。

これを書き留めていたのは、ちょうど大学を中退してフリースクールのスタッフになる前後のことだったと思う。以来、ずっと不登校だとか、ひきこもりだとか、そのあたりのことに関わり続けている。私は、自分が当事者だというわけでもないのに、しかも支援者というつもりもなく、約 20 年も関わってきた。なぜだろう、と自分でも思う。それは、たとえば幼稚園のころから周囲についていけなかったこととか（小学校低学年のときには教室でオシッコやウンコを漏らしたし）、中学のときに受けていた暴力とか、いわゆる浪人時代に人と口をきけなくなったこととか、自分の経験上の動機もあるだろう。しかし、それ以上に、その裂け目から触れてきた “ 何か ” に、私は共鳴してきたのだと思う。

●私が “ 学校 ” の外に出られたのは

大学を中退してフリースクールのスタッフになったとき、私は自分の着ていた服を脱いでしまったような、さっぱりした快感を覚えた。私は “ 学校 ” を捨てて痛みとともに “ 自分 ” を世界に投げ込んだように思っていた。同時に、それは “ 親殺し ” を含むプロセスでもあっただろう。それはしかし、そういう青くさい “ 自分 ” を受けとめてくれた（しかも給料を払って）世界があったということでもある。受けとめてくれる側がいなくて、私は “ 学校 ” を捨てられただろうか？　あるいは、“ 学校 ” の外に出られただろうか？　私は “ 学校 ” にはじかれた、あるいは入ろうとしても入れない不登校の当事者ではない。ただ、みずからを “ 学校 ” の内側に置いて、“ 学校 ” の外に出た子どもたちを導くような無礼なマネはできなかった。

●ぜんぶが仮面？

国立民族学博物館で山下撮影

いま、多くの子ども・若者が苦しんでいるのは、“ 自分 ” を受けとめてくれる世界がない、ということだろう。“ 学校 ” の外に世界がないのはもちろん、“ 学校 ”（の先にある社会）も流動性が高く、“ 自分 ” を投げ出したところで、ややもすれば労働力だけを吸い取られて使い捨てられてしまう。子ども・若者は少しでも自分を高く買ってもらうために、自分の外面ばかりを厚くして、気づけば外面ばかりを生きているようなことになってしまう。それは学歴など業績の外面だけではない。よく言われるように、友だち関係もキャラを演じ続ける関係になっていて、“ 自分 ” をぶつけることはできなくなっている。「ありのままの自分なんてどこにもない、ぜんぶが仮面」といった乾いたあきらめの声を聞くと、そこにどんな言葉が届くのかと、砂を噛むような思いがする。“ 自

分”を投げ出せる世界がなかったら、“親殺し”だって難しい。“自分”を確立していくとしたら、それは、その先のことだろう。

この液状化したとも言われる社会のなかで、“自分”を確立することなんて、できるのだろうか。「大人が子どもっぽくなった」とか「動物化している」とかいうのは、それはその通りなんだろう。でも、上に向かって“自分”を確立することが難しくても、根のほうに向かってダイビングすることはできるのではないだろうか。

●支援なんかできません。

私には「支援者」という自覚はない。支援って、いったいどこに向かって支援するというのか？　“学校”へ向かってでもなく、“学校”外のサクセス・ストーリーに向かってでもない。私が心がけてきたことと言えば、自分の外面をむいて、“学校”の外にいる子ども・若者の“いま・ここ”に、ともにあるということ。“自分”を投げ出せる場を醸成するということだ。ただ、それにはていねいな手つきが必要だ。“自分”を融解させてしまうカルトな場であってもいけないし、“学校”とは別のストーリーを固める場でもない。

あらゆる語りは陳腐化する。“自分”のことを誠実に語っているつもりでも、それは、何かの文脈から自由ではない。気づけば、言葉が乾いてしまっている。不登校・ひきこもりの当事者の語りも例外ではない。貴戸理恵さんは、「(不登校の当事者は、治療者や支援者などの―引用者注）既存の物語のなかではみずからにとっての不登校を語りえない」と指摘したが[*1]、もっと言えば、あらゆる語りは“自分”とズレてしまうものだ。語りえない“自分”は沈黙している。

“自分”は、外面を脱いで入れるお風呂のような、語る以前の源泉の湧き出すような（しかし融解させるのではない）“場”を必要としているのではないだろうか。それを、家族や恋人だけに求めても破綻してしまうし、どんなに外面を厚くしても、その欠如を埋めることはできない。“場”の欠如は、さまざまな依存症を招いてもいるだろう。

●森の入口で

「不登校は文化の森の入口」と渡辺位[*2]さんは語っていた。それは、不登校が文化だということとはちがう。不登校は、あくまできっかけ、入口でしかない。

*1 貴戸理恵『不登校は終わらない』（新曜社 2004）

*2 児童精神科医。フリースクール・フォロ 1 周年講演で「不登校は文化の森の入口」という演題で話していただいた。右記に講演録。 http://www.foro.jp/pdf/watanabe.pdf

では、その森には何があるというのだろう？　たぶん、それは無分別智[*3]の森だ。

不登校というのは、その森をのぞいてしまうことだ。私の場合は不登校を経験したわけではなかったが、自分の経験上の裂け目から、その森をのぞいてきた。分別の世界に開いてしまった穴をふさぐのではなく、そこから遠ざかることをよしとするのでもなく、穴をのぞき、森からの風を受け、そこに立ち続け、分別の世界との矛盾を抱えつづけること。私が大事にしたいのは、そういう“場”だ（それを「コムニタス」とも言う、たぶん）。

わかりにくいかもしれない。だけど、実際にはそんな難しいことを言っているわけではない。意味とか、役割とか、社会的地位とか、将来の心配とか、そういう分別ではなく、“いま・ここ”を生きるということ、それだけのことだ。それは分別の世界の単純な否定ではない。私たちは分別の世界だけを生きているのはないということだ。いまの社会が薄っぺらくてフラットで息苦しいのは、あたかも分別の世界だけが世界かのようになっていて、かつてはあちこちに開いていた穴がふさがれてしまっているからなのだろう。「不登校は文化の森の入口」というのは、不登校によって、そのフラットな“壁”に穴がうがたれたということだ。この資本主義世界のなかで、またたくまに、不登校はひとつの分別世界に組み込まれてしまったけれども、穴がふさがったわけではない。

●０人称の承認

穴からは、分別を解体してしまうような風が吹いている。それはでも、やさしい風でもある（まるで菌の働きみたいに！）。私はそれを「０人称の承認」と言ってみたい。津路鳴烏木さんが以前のレポート「承認と依存」[*4]で提示した「１人称、２人称、３人称の承認」は、いずれも人間関係における承認だと言えるだろう。不登校やひきこもりでよく問題になるのは、業績承認（３人称の承認）であったり、存在承認（２人称の承認）であるが、それに対して、津路さんは続くレポートで孤独（１人称の承認）を提示した（本誌 34p-39p）。

私がここで言う０人称の承認は、人からの承認ではない。ややもすると私たちは人間関係ばかりに頭がいって、感覚を狭めてしまっている。しかし、あたりまえのことだが、人は人間関係だけを生きているわけではない。生き物として、あらゆる関係の網の目のなかに生きている。それを自然からの承認といってもよいが、それだけだと、どこか説教くさいナチュラリストの物言いにしか

*3 仏教用語。「主体と客体との区別を超え、対象を言葉や概念によって把握しようとしないこと」（広辞苑第５版）

*4『づら研やってます。』（ＮＰＯ法人フォロ 2012）26p-33p

ならないだろう。私が０人称の承認と言うのは、無分別の森からの承認だ。それを仏教者なら「慈悲」、老子なら「タオ」、キリスト教者なら「愛」というのだろう。

●敗北はするかもしれないけれど

ただ、困ったことに、私が大事にしたいと思うことを大事にすればするほど、どんどんおカネは稼げなくなってしまっている。人は固まった外面（化けの皮！）に対してはおカネを払うし、幻想を抱く。外面を得ることには血道をあげるし、それを手助けすることが支援と呼ばれる。そこではじかれた人は、森をのぞくチャンスを得るが、かえって強固に外面にしがみついてしまうことも多い。それは、やむを得ないことでもあるだろう。でも、私は、しがみつく苦しみを利用してカネを得るようなことは、どうしてもする気になれない。それは、倫理以前の問題として、たぶん、私はしがみつく苦しみには共感できないのだ。ただ、不器用な人ほどはじかれやすく、傷つけられ、こわばってしまっていること、その痛みや葛藤には深く共鳴する。それは、きっと自分のなかの“子ども”が共鳴しているのだ。

私には、不登校を別のストーリーに仕立てあげることもできないし、認知療法やセラピーや、無意識に分け入って精神分析するようなマネも、もちろんできない。私は、人を導いたり、操作したりしたくないのだ。だから、おカネは落としてもらいにくい。

そうはいっても、「彼らをどうするつもりなのか」「現実問題、生活はどうするのか」「そんなことを言える人は強い人だけだ」「元気なうちはいいけど」……そういった批判や反論をどれほど聞いてきたことだろう（“そうはいっても症候群”と呼んでおこう）。私はそういう批判に応える言葉を持たない。応えるとしたら、沈黙をもって応えるしかないだろう。ただ、ひとつ言うとするならば、そういう意味での敗北はするかもしれない、ということだ（だって、世の中、うんざりするほど外面ばかりで動いているのだ）。でも、なぜだか私に不安はあまりない。それはきっと、０人称の承認が底にあるからだろう。０人称の承認が底にあれば、融通無碍に生きていける。そんなふうに思う。２人称や３人称の承認をガツガツ求めるのでもなく、呪うのでもなく、潔癖に拒否するのでもなく……。きっと、０人称の承認は、人が生きるさまざまな層のいちばんベースにあるものだ。

●お化けさん、こんにちは。

でも、それは私の勝手なスタンスであって、“場”に関わる人は、同じようである必要はない。一時的に立ち寄って、風呂につかって出ていくように“場”を利用すればいい。じゅうぶん浸かったと思えばあがればよいし、別に自分の“場”を広げてもいい。否定することでジャンプすることもあるだろうし、湯あたりしてしまうこともあるかもしれない。分別の世界がゆるむと、“お化け”みたいなのが出てきて暴れることもある。でも、それを退治するのではなく、“お化け”には出てきてもらって成仏していただきたい。

もちろん、私のいたらなさゆえに、傷ついたり苦しんだ人もたくさんいることだろう。それはもう、頭を下げてあやまるほかない。私がいちばん苦しいのは、そこで関係の途絶えてしまった人のことだ。でも、たぶん、ほんとうには関係というのは切れていないのだと思う。現象的には切れていても「なかったこと」にはならないのだから。私にできることは、それを自分を正当化する文脈に置くのではなく、虚心に受けとめ祈ることしかない。

●バカボンのパパになりたい。

以上のような道筋は、当初から自分の意志で歩んできたものではない。不登校に関わり、“学校”の外にいる子ども・若者と出会うなかで、自分の薄っぺらい外面をつつかれ、こちらの浅はかな意図がくじかれ、ときに嵐のような暴風にさらされるなかで、だんだんに力が脱けてきた、ということだろう。私のほうが導かれてきたのだ。

水木しげる像（境港で山下撮影）

何かの折に「尊敬する人は？」と聞かれると、私はいつも「バカボンのパパ」と答えてきた。それは「デクノボー」（宮沢賢治）でも「イワンのバカ」（トルストイ）でも「白痴」（ドストエフスキー）でも「妙好人」（浄土真宗）でも「なまけ者」（水木しげる）でもいいのだけれど。私も、もうすぐ 40 歳、バカボンのパパの年齢（41 歳）にだいぶ近づいた。そのわりには、相変わらずの凡夫で、まだまだバカボンのパパにはほど遠く、こざかしく饒舌な自分がイヤになるときも多々ある。

でも、きっと、これでいいのだ。

●補足

このレポートを書いたあと、補足として下記の文章をブログに書いた。

バカボンのパパには名前がない。バカボンのパパという関係で名指されるだけで、41 歳で無職（アニメ版では植木職人だが、赤塚不二夫の本意ではなかったらしい）、社会的な位置づけもない。バカボンのパパは、名なしのままを生きている。

不登校というのは、いわば名前のない状態になることだろう。世間は、名前のないものをそのままにはしておかない。○○障害、○○病、○○症などなど、何かと名前をつけては治療なり矯正なり教育なり支援なりしようと、とにかく放っておいてはくれない。カフカはそれを“虫”と表現したが、“虫”は家族に殺されてしまう。不登校でも家族に殺されてしまう場合があるが、殺されないまでも、世間の名づけと“自分”にはズレがあり、非対称な力関係がある。

べてるの家の当事者研究のように、その名づけを逆手にとって、自分で自分に病名をつけてしまうというのも、ひとつの戦略だろう。それでも、たぶん名づけたとたんにズレてしまうもの、はみ出してしまうものはあるにちがいない。

バカボンのパパがすごいのは、下世話な欲望を抱えたまま、名なしのままをひょうひょうと生きていることだ。学歴とか肩書きとかに縛られている世間を、バカボンのパパはアナーキーに笑いとばしている。だから、あこがれてしまうんだな、きっと。

生きづらさの連鎖

2013 年 4 月 8 日　イワサキ

生きづらさは感じている。だけど、書きにくい。というか、できれば書きたくない。書きたくないというのは、書いていると、どうしても、本来の自分は、そんなもの感じないで生きていたこと（過去）を思い出して、悲しくなってしまうからだ。

俺はもともと、文章は苦手なのだ。活字を読むのが大きらいで、学生のころ、感想文など、何を書いてイイかわからなかった。友だちから、「本の最後に書いている“あとがき”を写してる。」と聞いてから、「良いことを教わった。しめしめ」と、多少、文章を変えながら転写したものだ。

こんなことを書くと、レポートを書かせて申し訳ないと思われそうだけど、自分が言いたいのはレポートにする必要のない「平凡な人生だったら良かったのに」と、いうことだ。残念ながら、現実は、そうではないし、こういう機会をもらえてありがたいと思っている。

子ども時代の私は、どちらかというと、“やんちゃ”なタイプだった。一人でいると、比較的おとなしかったが、友だちや従兄など、誰かと一緒になると、ワイワイと遊ぶタイプだった。

小学生の時も、相変わらずそんな感じで、ちょっとませたクラスメートと一緒に、買い食いをしたり、みんなで集まって悪さをしていた。好きな女子をからかって、泣かせてしまったこともあった。そして、それを授業の最後の反省会で、まわりに発表されて、先生によく怒られていた。その場は反省しながらも、次の日になると、悪友と一緒に、また悪さをするのだった。

「うるさいわ〜！　ぼけ〜！」
「なんでやねん !!」
「うわ！最悪や！」
「それ、めっちゃすごいやん！」
「それ俺にもさせてよ！」

どんなふうに会話していたのかは、忘れてしまったが、男子にも、女子にも、先生にも。思ったこと・感じたことをそのままに口に出して会話していた。ひどい言葉を言ったこともあるし、言われたこともあったと思う。しかし、何を

言われても、何をしても、すぐに忘れていた。物事を難しく考えることもなく、感じたままに行動・発言していた。勉強・運動・遊び……etc

もちろん、苦手な感想文や、マラソン大会、友だちとのケンカ、先生からの体罰など、イヤなこともあった。が、話のネタになるくらいのもので、すぐに忘れて、友だちと楽しく遊んでいた。

本当に、どこにでもいる。友だちと無邪気に遊び、大声で笑ったり、楽しんだりする。そんなふつうの子どもだった。

そう……『毎日が楽しかった』

●他人との違和感

高校生くらいからだろうか。他人と接する中で“違和感”を感じずにいられなかった。まわりの人間が、なんの心配もなく、気楽に生きているように見えた。

もちろん、その人なりに、心配事（苦労）はあったかもしれないが、それが自分の人生を脅かすような。それが生死を分けるような。「明日、死ぬかもしれない」と、そこまでの心配や危機感を持って生活しているようには思えなかった。

なぜ、そんな手放しで喜べるの？　この瞬間にも、危険が迫ってるかもしれないのに。もちろん、ふつうの学生が、日常でそんな“危険”を常に意識しながら生活しているはずもない。なのに、自分は、常にその“危険”がいつくるかと、心配で不安だった。そこに、私は、他人との明らかな“違い”を感じで生きていた。

●ウソがつけない苦しさ

ここで言うウソとは、自分が他人と会話したり、接している中で、どうしても出てきてしまう“違和感”に対して、自然に振る舞えないということだ。

とくに、それで悩んだのは、20代の半ばごろだろう。

どうしても「うち（自分が育った家庭）は違う」と言いたくなってしまうのだ。もちろん、人それぞれ育った環境は違うだろうし、その人なりの苦労やつらさがあるのもわかっている。ただ、それでも感じてしまう“違和感”が、人と接すれば、接するほど、心の中で大きくなり、自分の力ではどうすることもできなくなるのだ。

●あまのじゃくな私

最近でも時折、そのクセが出てくる。ワザと相手に悪い印象を与えようとしてしまうのだ。口が悪いというか、思っていることと、まったく逆のことが、口をついて出てしまう。言った後で、しまった！　とは思うものの、言い訳するのも変だし「まあ、いいか」と流してしまう。それで人間関係、損しているなぁとは思っている。

「本音を言えば負けだ」
「相手に感情を悟られてはいけない」

いつのころからか、そう固く決心し、自分の考えや、感情を何重もの衣で、覆い隠してきた。今では、それが自分でもコントロールできず、本音や、本心がわからなくなってしまった。

自分のやりたいことがわからない。自分の欲しいものがわからない。

つらいのか・楽しいのかわからない。悲しいのか・うれしいのかわからない。

20代の後半から訓練して、最近では、早ければ数時間後にわかるようになったが、ひどい時期は、「3年後に気づく」など、年単位で、遅れてわかることもあった。自分の感情がわからないというのは、けっこう厄介なことがある。たとえば、自分がふだん、何気に話す内容に関して、相手が悲しくなったりだとか、時には怒り出すこともある。

自分は、それで驚いてしまう。相手の反応を、いちいち気にして疲れてしまうのも、“生きづらさ”なのだが、何せ、自分としては、楽しく会話しようと努めているものだから、それとは真逆の反応が返ってくると余計にあせる。それが短期間に何度も続くと、そのことで頭の中がいっぱいになり、何を話していいのかわからなくなったりする。

そもそも、自分がひきこもる原因は、こういったところからきている。自分さえいなければ、みんなは、楽しく会話できるのだと、身を引いてしまう。自分の存在が、他人の負担や、重荷になっている気がする。厄介だったのは、相手の“優しさ”や“気遣い”など、本来は喜ぶべきところで、落ち込んでしまうことだ。

「人に心配されるなんて、自分はなんてダメで情けない人間なんだ」
「心配されるような欠点（短所）があるからいけないんだ」

存在そのものに罪悪感が生じ、生きていることが申し訳なく感じた。「罪人は、罰を受けなければいけない」そんな言葉から、自らの腕を傷つけたこともあった。

●本音を隠す心理

それは、“ 本当の自分 ” に気づいてほしいという、願望だろう。

まるで、必死になって “ かくれんぼ ” をしている子ども。時間がたって、日が暮れても誰にも（母親に）見つけてもらえず、徐々に不安になってきている子どものようなものだ。

私には、そんな幼い姿をした子どもの自分が、存在している。

過去に「本当はこうなんだよね」「あなたは本当は、そんな人じゃないよ」などと言われて、ものすごく『理解された感』があって、うれしかった記憶がある。

しかし、「相手に本音を悟られてはいけない」とも思う自分は、そんな心ある理解者から、無理に離れて行った。

理解者を求めているのに、それが見つかると、理解者から離れようとし、さらに自分自身を覆い隠し、より見つかりにくくしていった。

そして、人に優しくされたり、心配されることはダメなことだと思っていた自分。

そんな私のまわりには、否定的であったり、厳しい言葉で溢れかえっていた。

●自分らしさを認める

『自分をより生きづらくさせていたのは、自分自身だった』

そのことに気づいてからは、いろいろと変化があった。

まず、自分のことを、何よりも・誰よりも、理解してやるべき・認めてやるべきは、自分自身なのだと思うようになった。

人の優しさに触れ、感謝したり涙することが増えた。ダメな部分があっても、それはそれで良いと、自分にＯＫのサインが出せるようになった。

もちろん、今でも昔のクセが抜けきっていない部分はある。けれど、そんな不完全さもまた自分らしさ (人間らしさ) なのだと、ずいぶんと受けいれられるようになった。

もともと、自分は理屈で動いてきた人間ではない。気持ちのまま、欲求のままに行動していたのだ。そんな本来の “ 自分らしさ ” を取り戻すために、私は “ 今 ” を生きている。

未　生　～生きづらい女性はどこにいる？～

2013 年 7 月　P.N. 野草（冊子に書き下ろし）

●はじめに

づら研が発足して丸２年。こうして冊子も第２弾を発行する運びになり、参加者として自由に感じたことを書く機会 (と〆切) に恵まれた今、自分の内側から自然に発生した問いを、問いかけという形で外側へ発信したいと思いました。

とはいえ自分の書こうとしているものが、感想なのかレポートなのかはたまた問題提起なのか、あるいはその全てであるのか。自分でもよく分からないまま、分からない全てに「未生」という名前を付けて筆を進めていこうと思います。

づら研が発足した当初、つまり私自身が当事者研究を始めた最初のころ、研究には答えがあると私はなんとなく思っていた。レポートを書き始め、それを仕上げ、発表し議論することで、明日からは答えのある自分になって歩いていけるのだと。当事者研究はそんな都合のよいものではないと重々承知しながら、やっぱりどこかでそんな期待もしていた。研究を始めて２年経った今、問いは深まり、ひろがっていくばかりだと感じる。そうしてできれば、つながっていくものであればよいと。

何が正しいとも、どこにあるとも知れない答えを探すより、そちらの方がずっと難解で、だからこそ尊いものだと、そう実感している。

そう、きっとそれぞれにやり方や作法はちがっているのだろうけど、私の当事者研究の進め方、その前提は、そもそもが完結しないのだ、という一言に尽きる。研究といえばふつう、仮定があり検証があり反証その他諸々があり、最後にはちゃんと結論がある（あまり研究の世界のこと、よく知らないけれど）。けれど生きづらさなんて、ただでさえ掴みにくいものを、自身の問題として掘り下げ、他者とつながっていこうと思ったら、結論なんてどこにも見当たらない、というのが今のところ私の唯一結論らしい結論だ。

今まで仕上げてきたレポートは、やっぱり研究なんだからきちんと結論を持ってこないと、この問題を完結させてあげないと、そう思って書いてきた部分がある。けれど今から書こうとしている私の「研究」には、結論も答えも存在しない。自分の納得のいくまで、自由に深まり、ひろがってゆけばよいと思っている。そういう気持ちでレポートを書くのは、はじめての試みだ。２年経って、今だからこそできる「はじめて」がある。何だかちょっと、感慨深い。

●女性はどこに？

コムニタス・フォロという若者の居場所 (40 代の方もいるけど) に 6 年通い、づら研という当事者研究の会に 2 年参加して、しみじみと思ったことがあります。

それは、女性の参加者がとても少ない、ということです。

居場所にしろ当事者の会にしろ､その輪は少しずつ広がっていると感じます。けれども、そういった集まりに参加しているのは、圧倒的に男性の方が多いというのが私自身の実感です。

それじゃあ、生きづらい女性はどこへ行けばいいんだろう。

あるいは、どこに居るんだろう。

いつのころからか、頭のどこかで気になっていました。

家庭で、学校で、職場で、それぞれのコミニティーの中で息をするのもつらい時がある女の人たちは、どこへ行けばいいのだろうか。

安心して、深呼吸できる場所はあるのだろうか。

づら研に参加することで見えてきたのは、そんな「見えない」彼女たちの存在でした。

私はづら研に参加するとき、何気ない日常の一幕で生きづらさを感じるとき、同時に彼女たちの影を見つける。

その存在を思う。

そう。いま私は他の場所で、同じような思いをしているかもしれない女性のことを考えている。

さまざまな生きづらさを抱えながらも、当時者の集まりに足を向けることをためらっている女性や、同じような問題意識を抱えていて、既にそれを何らかのかたちで表明している人 (この場合は女性に限りませんね) に向けて、この文章を届けたいと思っています。

ここにもひとり、あくまでちっぽけな私自身の経験や枠を超えずに、けれどけっして自分だけの問題ではない問いを抱えて立っている人間がいるのだということを、発信したいのです。

見えない彼女たちをひっぱりだすのではなく、何が彼女たちを見えづらくしているのか、あるいは隠してしまっているのかを、一緒に考えるつながりがほしいのです。

問いを共有することの第一歩は、自身の問いを問いかけとしてひらくことだと、まとまらない頭を抱えながら、あらためて思うのです。

●「言語化」は男性的？

つながりを持ちたい。そう考える私から、差し出せるものはあるだろうか。

差し出せる手は、あるだろうか。

そもそも私は、居場所や当時者の集まりに、もっと女性が集いやすいようになればいいと思っているのか。それともづら研をもっと女性とも一緒にやりたいと考えているのか？

おそらく、両方共そう考えている。そうであればいいのにと思っている。

今回はづら研のレポートということもあって、当事者研究を行っている私、という立場から、ひとつの疑問のような、提案のようなものを差し出せたらと思う。

そもそもレポートがなくては、議論がなくては、当事者研究は出来ないのだろうか？

語られる言葉は、もっと柔らかいものであってもよいのではないか？

づら研に参加していて、ふと思ったのだ。

づら研の参加者は、月によって 8 ～ 15 人ほどと幅があり、仮に全体を 10 とすればだいたい 8 ：2 から 7 ：3、多い時でも 6 ：4 くらいの男女比だったと思う。

数の多少は、どうしても場にパワーバランスというものを働かせる。

また声の大小という視点で見ると、発言の多い人の声ほど、どうしたって大きなものになってしまうだろう。その点で見れば、私は大抵の場合「声の大きな人」だ。男女比のパワーバランスの話をするならば、少しの自戒を込めてこの点は明記しておく（パワーバランスは何も男女比の場合だけでもなく存在することも）。

ただ、ちょっと思うのだ。

「研究」とか「言語化」といった作業は、比較すれば男性的なものとして捉えられてきたのではないかって。実際にそれらは男性がするものだと多くの人が思っているのではないだろうか。

女性が研究していれば、ちょっとめずらしがられるだろうし、女性の言語化は「おしゃべり」や「愚痴」、「感情論」など、どうにも一段低いところから見られているような……。女性の語る言葉が、「それは語りとして適当ではない」と見なされたり、「もっと明確に言語化してほしい」と言われたり。女性たち自身も「言語化は男性の分野だ」という認識を内面化してしまっていたり。

そうしたすれちがいが何度も起こってきたし、今も起こっているのではないだろうか。
そうだとしたら、とってももったいない。
そもそも私は、言葉にする、という作業に対して、強いこだわりがあると思う（言葉それ自体をテーマに、レポートが一本書けそうだ）。大体今まで散々使ってきておいてなんだが、そもそも「言語化」という言葉それ自体が何だかちょっと硬すぎると思うのだ。
まるでぶつかったらぽっきり折れてしまいそうな面構えではないか。
私がこだわっているのは、大切にしていきたいと思っているのは、もっと柔らかいかたちをしている。
私が信じているもの、丁重に扱われてしかるべきだと信じるそれは「言葉をつむぐ」作業。それくらいの柔らかさで、ちょうどいい。
人には得手不得手があり、男女差も、もちろんそこには存在しているだろう。
私は「言語化する男性」を否定したいわけではない。
そこを誤解されたらとっても困るし、かなしい。
ただ、私は言葉がもつ可能性を信じているし、そこにはまだ見ぬ広がりやつながりが、たくさんたくさん、あると思う。
生きづらさや、そこから始まる当事者研究にも、それは当てはまると思うのだ。
言葉に対して、できるだけ柔らかいスタンスをとる。
言葉にするという作業は、固まらない、掴みがたい感情やら現象やらを固定してしまうものであり、そうすることでこぼれ落ちていくものも、当然あると思う。固定する作業に対して柔らかいスタンス、だなんて最初からちょっと矛盾してる。
言葉は冷たいナイフにもなるし、傷を包む包帯にもなる。
万能である必要はないのだ。
ただ、言葉がもう少し、柔らかいものであったなら。
それをつむぐことで、つながっていける人たちもいるのではないか。
その可能性を、私はここに提示したい。

●終わりに

提示したい、なんて偉そうなことを言いながら、硬いだの柔らかいだの、そもそもがとても抽象論だ。それこそ「もう少し論理的に言ってくれ」と思う人もいるだろう。当然だと思う。

私自身も、自分がふだん選択しない、「硬い言葉」に出会った時は、どのように消化すればいいのか大いに悩む。すぐには受け入れられない時も、もちろんある。
また、わりと「女性、女性」と連呼しているけれど、何も女性だけに向けて、問いが発生しているわけではない。
それじゃあセクシャルマイノリティの人はどこへ行けばいいのか？　在日外国人の人は？　もちろん男性だって、その他すべての「隠されて」しまっている人が、繰り返しになるが、ひっぱりだされるのではなく、自ら足を運び、生きづらさを語れる場所が、反対に何も言わなくていい場所が、まだまだ絶対的に不足していると感じるし、かと言って属性で固まれば上手くいく、というものでもないと思う。
考えれば考えるほど、生きづらい、という言葉はちょうどいいと、私は思う。
貴戸さんの言葉ではないが、属性を超えてつながっていける可能性が、その言葉には詰まっている。
最後になったが、今回あえて「女性」という属性を主体に持ってきたのは、私自身が、自分が女性であるということに上手く納得できずにいるからにほかならない。男性であればいいという話ではない。
「私」という個の「いれもの」が女性のカタチをしているということそれ自体に、いまだ承服いたしかねる、というありさまなのだ。
自分が女性であることをどのように受けとめているのか、他の女性にも聞いてみたい。始まりの気持ちはそこにあった。
そこからここまで問いがひろがってきたことを、面倒だなぁと思いながらも、悩みがいがあるとも思っている。
ここからどのようにつながっていけるのか。
焦らない、あせらないと自分に言い聞かせながら、「未生」の筆を置きたいと思う。

……ちなみに文中「女性はどこに？」の部分だけが「です・ます」口調なのは、顔は見えないけれど誰かに向かって語りかけようと思ったら、自然とそんな文体になったから、です。

「わらべのごとく！」の自己分析

2012 年 6 月 18 日　かーば

＊「わらべのごとく！」というマンガを描いたあと、自己分析として書かれたレポートです。
　マンガはこの後に収録。

1．描き始めた背景

「わらべのごとく！」を描き始めたのは大学 5 年の春に突入し、そろそろ疲れのかげりが見え始めたころだった。思いつきは単純なところから始まる。聖書、コリント人への手紙第 1 の 13 章 11 節の言葉からだった。

「私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、大人になったときには、子どものことをやめました」

12 節「いま、わたしたちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔とを合わせて見ることになります。いま、わたしは一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります」

この文章の前後にももちろん聖書の言葉があり、キリスト教信者にとってはそちらのほうがよく知られている。信仰にあって、愛をもつことが一番大切だと説いている箇所で、いつかキリストのうちに自分たちは完全なものとなる、ということを語っている。しかしふつうの人間で、なおかつちょっとアニメを見る人間にはこちらの訳のほうが聞き覚えがあるかもしれない。

「童のときは 語ることも童のごとく 思うことも童のごとく 論ずることも童のごとくなりしが 人と成りては童のことを棄てたり」

こっちのほうがかっこよく聞こえる。それもそのはず押井守の映画、「攻殻機動隊」で使われた引用だからだ。そしてこちらの訳のほうが、無駄なエッセンスが入ってなくて分かりやすいと思われる。新改訳の「やめました」と後者の「棄てたり」では大きな差があるように自分は思う。前者は自主的、後者はなんだかいつのまにかなくなっちゃった、的なニュアンスがある。そしてわたしは後者の「いつのまにか子ども心を失っちゃった」ということをテーマにストーリーを考えた。大まかなプロット、始めから終わりまでのストーリーラインはある授業の 1 時間でできあがった。次の 1 時間で主人公たちの容姿と簡単なプロフィールを書いて、数日後漫画を描き始めた。

主人公と、異界からの少女と、そのわきに主人公と同年代の女性。わたしはよくそういうストーリーを妄想する。実際に以前には「みぃ」という人間になって恩返ししに来た猫の漫画を描いた。読みきりのプロトタイプ、シリアスな展開の数話、そしてギャグ路線での数話、３種類描いた。謎の少女がやってくる漫画や小説はたくさんある。でも私の場合、主人公は大抵その少女とくっついたりはしない。わきにいる同年代の女性とくっつく。それはわたしの頑固な脳に妄想の限界が生じるからだ。絶対に謎の少女は「良い」だけの存在ではない、という要素が妄想に入り込んでくる。それは避けきれない。たしかに謎の少女は魅力的なのだが、必ず何かしらの問題を抱えてこの世に来ている。その問題のマイナスに対してプラスに働こうとする存在が、同年代の女性ということになる。まあしかしこれも中途半端にシリアスで中途半端にコメディチックなラブストーリーを描く人間には少なからずある問題なのかもしれない。水無月すうの「そらのおとしもの」なんかその代表例である。それは置いといて、ともかくそういう妄想をよくする。それも超絶につらいときにそういう妄想にはいっていく。大してつらくないときは発明品とかの妄想をしているものだ。「みぃ」を描いていたときも自殺未遂の大安セールの時期だったから、いま思い返せば「わらべのごとく！」を妄想し、書き始めた時点で相当に追い詰められていたことがわかる。

しかし「みぃ」との違いは「みぃ」は主人公が大学生でストーリーも大学時代の中のみだった。しかし「わらべのごとく！」の主人公は大学もやめてるし、仕事もやめている。なぜその違いが出たのか、多分、わたしはもうその時点で大学を辞めている自分の未来が見えていたのかもしれない。大学を続けている自分の未来が見えなかった。だからなにもかもをやめたときの、自分の考え方として「わらべのごとく！」を描いたのかもしれない。政広はそういう意味でわたしの分身であり、まだ大学を辞めていなかったわたしの代わりにいろいろなことを話してくれた。

2．「わらべのごとく！」の形式

漫画を描く際、わたしは大まかなプロットは数行にしてまとめ、細かいストーリーラインは脳内にのみ収めて置いている。なぜかというと、実際にペンをとって漫画を書けば、キャラクターはそのキャラクター性をもってして勝手に演技をし始めるからである。キャラクターにこうさせよう、こう言わせよう、と考えるのはまったくもって無意味である。なぜなら描いていくうちにキャラクターがそれ以上の行動をしてくれるからである。これは不思議だ。特別具体的に考えているわけでもないのにぽんぽんと次にこいつらが何を言うかが紙の上に浮かんでくるのである。そしてわたしはその瞬間がとても楽しい。紙の上で

演技をする彼らを鑑賞するのが楽しいのだ。細かいストーリーラインをすべて書いちゃって、それにそって完全に描いてしまったら、楽しくない。頭の中でもうすでにできあがってるものをコピーアンドペーストするだけで、しかも描くというのはコピペのようにそう単純な作業ではないので疲れるだけなのだ。

数行のプロットでもすべてを書ききれる。

「子どもらしさから抜けきれない主人公とその座敷童の話。主人公は田舎のさまざまな人と触れ合いながら成長し希望を見出すが、同時に子どもらしさを失い、座敷童も見えなくなる。彼はそのことに割り切ることができず、悩むところで「持っていていい子ども性」を獲得し、また座敷童との生活を始める」

ある授業の一コマで書いた設定資料（１枚）に書いてある大まかな流れをそのまま描きだした。最後の座敷童とまた生活を始める、以外は本編はそれに沿った内容になったと思っている。しかし今回の「わらべのごとく！」は最初から長編として描く気はなく、「みぃ」と同様、まず「プロトタイプ」から描き始めることを前提としていた。プロトタイプさえできていれば、あとは間にいろいろ話を突っ込むことも薄めることも可能だからだ。とにかく描き終わる、ということを考えた。だから「さまざまな人と触れあいながら」というのもほぼ壱子のみになっている。

３．子どもらしさと大人らしさ

子どもらしさということを考える前に、まず大人らしさから考えたほうが、わたしにとって説明しやすいと思う。

「大人は割り切る」

当時の私の中の大人像にはそのイメージが強烈にあった。母を見て、父を見て、他の大人たちを見て、たくさんの問題を抱えて自分にはとうてい抱えきれない苦しみを抱えて、「割り切って」生きている。それはたぶん、「レール」に乗っかることができたからだ、と自分は考えている。「安定」していて、今はとりあえずそれをやっとけば責められることもなく難しいことも考えないで済むから「割り切って」やっている。それが大人だ、と自分は考えている。と、すると子どもは、というとその反対を言えばいい。「割り切れない人間」だ。何かをやるとき、そこに問題があったら、それを見逃すことはできない。それは「安定」した「レール」には乗っていないからそうなる。世間一般からすれば「何もやっていない」人間になる。だから怖くて問題を抱えたまま、過ごす。「大人」からすれば「うじうじやってないで行動しろ」だ。でもそれができないのが子どもだ。

４．「レール」からの脱落、その結果

主人公の政広は幼少時から「レール」にのった人間だった。言われたことをやって、ほめられて、成長していく。それだけの人生だと見ていた。それは私も同様である。塾に行き、学校でいい成績をもらい、ほめられて、とんとん拍子に人生は進む。そう思っていた。考えるという癖は当時からあったが、それほど深く自分の状況に関して考えることはなかった。座敷童である千代子はそれを承知の上で幼少時の政広に言う。

「自分で歩くことをおぼえんと、こけたときに一人で立ち上がれなくなるぞ」

それは後の政広であり、わたしである。ひょんなことから私は「やりたいこと」をみつけた。絵を描いて生きていくということ。それに関して未来のことは深く考えていなかった。これをやっていれば、絶対成功する。とんとん拍子の人生を送っていた私はそんな考えしか思いつかなかった。それでも最低限現実的には考えた。わたしには早書きの技術しかない。デザインセンスはない。だからアニメーターになろうとした。わたしの知り合いにアニメーターの方がいた。同じ神戸出身で、もう今ではトップ原画家であり、アニメ作画を知る人間には知らないわけにはいかない人だ。私は昔から彼のサイトに通っており、なぜかかわいがってもらい、メッセンジャーや mixi に今でも相互登録させてもらっている。私は彼のようになりたかった。たぐいまれなる３次元把握能力と、その表現力、わたしはそれを手に入れたかった。当時わたしのサイトには１日に 400 人来ていた。2003 年あたりのころのインターネット事情を考えれば、それはけっこうな数で、わたしは注目されていたと思いたい。若かったからだ。私と同年代の人間もみな若いながらの絵画能力で注目され、立ち上がっていった。そのままいけば、私は技術を手に入れていたかもしれない。アニメーターという仕事にも就けていたかもしれない。だが、留学先のハワイにて、それを母に打ち明けたとき、すさまじい拒絶を受けた。政広が壱子に語るシーンで「自分の夢は大学受験の逃げ口上とされた」と言うが、まあ自分の場合もそれとさほど変わりなかっただろうと思われる。もうすでに関西学院大学高等部にはいっており、多額の学費を納め、大学への切符を手に入れているのに、なぜそこでアニメーターなのか。母はそう思ったのだろう。

しかし私は「気が狂った」。

まさに気が狂った状態になっていた。ハワイの日本人観光客渦巻くショッピングモールで、妹に対して、勝手に自分のカメラのフィルムを現像に出した、とキレてわめきたてていたのが頭に残っている。わたしは半年先に帰国した。

しばらくは日本に帰って落ち着いていた。美術部に入り、絵を描き、いいライバルと仲良く切磋琢磨し、彼女ができ、授業で描いた油絵が兵庫県立コンクールに入賞し、日本に帰ってきた母に「これに入賞する子はほぼ美術大学にいくんですがね」という教師の言葉を浴びせることに成功した。しかし大学に入ってしばらくして彼女と別れることになった。大きな原因はわたしの無責任な発言だったが、もっと元を探れば、もうそのころからわたしはまた崩れかけていたのだと思う。友だちはできた。サークルにも入った。授業には積極的に参加した。しかし、寂しかった。当時は女性のようになりたいという気持ちがかなりあった。それは本当に女性になりたいと思っていたわけではなく、自分が自分の理想の女性になって自分を可愛がりたい、という気持ちの表れだったように思う。当時「オトメン」という漫画がはやり、草食系男子から乙女系男子というものが出始める手前のことだったので、それがさらに拍車をかけた。しかし大学では女子と付き合うことなく、秋には体調を崩し、休学した。

そこからが壮絶な闘病生活の始まりだった。考えつく、ありとあらゆる自傷行為と自殺行為を繰り返し、ネットで出会いを探し、女性にすがりついては、親にはたき落される日々を繰り返していた。

5．アイデンティティとしての子供性ないし異常性

まあ、わたしの闘病生活のことはさておき、「政広」はレールからはずれ、地べたに転がる朽ちたジェットコースターの残骸のような、脆い心を持ってそれでもなんとかして生きていた。「割り切らないこと」が彼の唯一のアイデンティティだった。それは生きづらさを抱える人たちにとっては共通していることなんじゃないだろうかと思う。自分の問題、言い換えれば「異常性」に対して真摯に対応する。けっして手放さない。異常性はけっして消えたりなくなったりすることはない。年をとるごとに肥大化していって自分はそれと一生付き合っていかなくてはならない。わたしたちはそう思うことでそれがアイデンティティとなっている。「割り切らないこと」大人の言い方に言い換えれば「行動に移さないこと」その言い訳がなくなっては困る。みもふたもない言い方をしてしまえばこういうことなのかもしれない。

しかし、わたしはそこから始めて人間が持ちえる可能性というものを信じている。人間が進歩するときはいつでも「同じことをずっとやっているとき」じゃなくて「つらい中をなんとかして打開しようとするとき」だ。有名な文豪や作家はそのような人たちであった。壱子は政広の中にその可能性を見出すが、発した言葉は政広を誤解させた。結果、政広は「割り切る」ことに成功する。「割り切り」に必要なものは「安定」である。「安定した人生の未来像」をクリアにもったとき、人は割り切ることができる。政広はきっと壱子と暮らす未来をクリアに想像できていたのかもしれない。しかしその割り切った瞬間、彼は「臓物を根こそぎ取られるような喪失感」を覚える。千代子の消失、すなわち子ども性の喪失、加えて自分の問題「異常性」の放棄、結果としての「アイデンティティクライシス（自己喪失）」。それが彼に起こった。

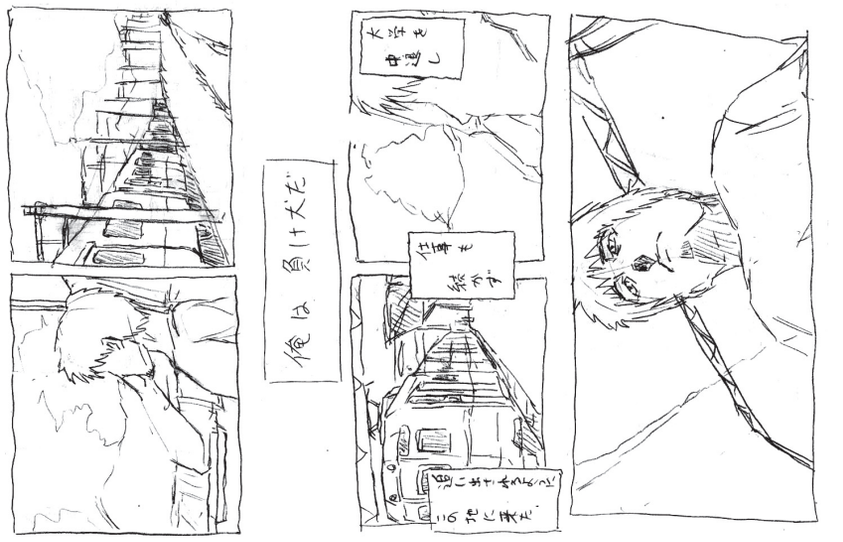
6．子ども性の再獲得

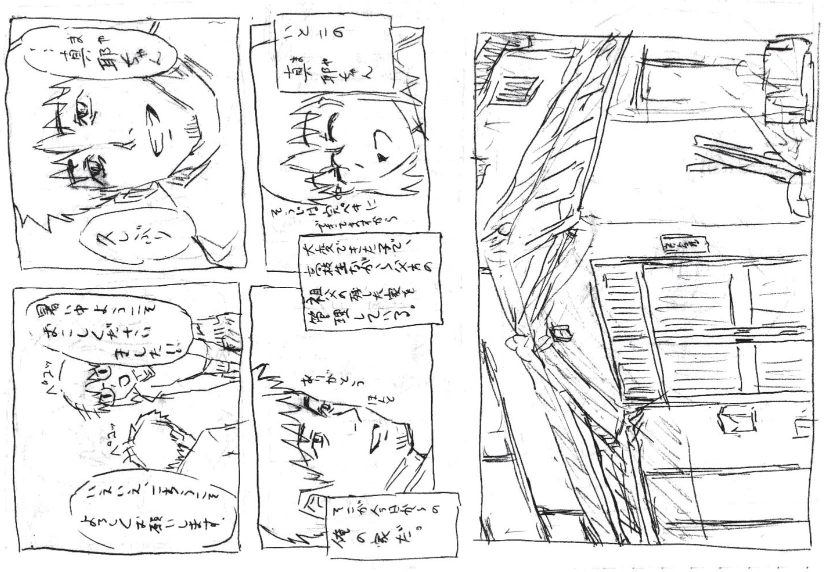
２日間、彼は家に閉じ込められるはめになる。それは描写が足りなかったかもしれないが、千代子の「政広を諦め切れなかった思い」から生じる束縛だ。千代子は政広が帰ってきた際に、そろそろ政広から去らなければならないという思いを抱いていた。浴衣で待っていていたのはその決心からだ。理由は後で語られるが、千代子はさみしさにより故意ではないにしろ過去に子どもや、子ども性を棄てきらなかったものを常世に連れ去っているからだ。千代子は政広を連れ去りたくはなかった。それは政広の祖母との約束でもあったのかもしれない。しかし言おうとした言葉は政広の突然の「割り切り」により中断される。結果、政広は千代子が見えなくなり、千代子は政広に干渉する暇も持たずして未練を抱えることになる。しかし政広はその後の２日間、必死に千代子を、自分の子ども性を再獲得する努力をしていた。自分の何がいけなかったか、見つめなおすことにも成功していた。しかしまだ千代子を見つけることはできなかった。「割り切る」ということはある種の思考の停止を意味する。後戻りすることは自分だけの力では無理かもしれない。そこに壱子が駆けつける。壱子、外からの声は聞こえるが、中の音は外からは聞こえない。結界が張られているからだ。千代子のアイデンティティ、殻のようなものかもしれない。しかし壱子はそこに接続することを許される。彼女の「将来の不安なんてどうでもよくなるくらい、彼との未来を見たくなった」というのは政広が壱子との未来像において抱いた「安定」などといったものからは程遠いもので、どんなに不安定でもわがままを貫き通したい、という壱子の子ども性の表れだった。千代子は壱子の子ども性を媒介にして壱子に憑依し、政広に自分のよりしろを破壊しろ、と伝える。それは政広に改めて自分の「子ども性」と決別しろ、というメッセージであると同時に千代子の子ども性による犠牲を断ち切る、千代子自身の決意の表れであった。（千代子は故意ではないにしろ過去に子どもを常世に連れ去っている。）しかし、それは政広に「子ども性」をあらためて形として再認識させる行為につながった。彼はあえてよりしろを破壊しないことで、言語を超えた理解を子ども性において獲得する。壱子の思いは政広に伝わっており、その

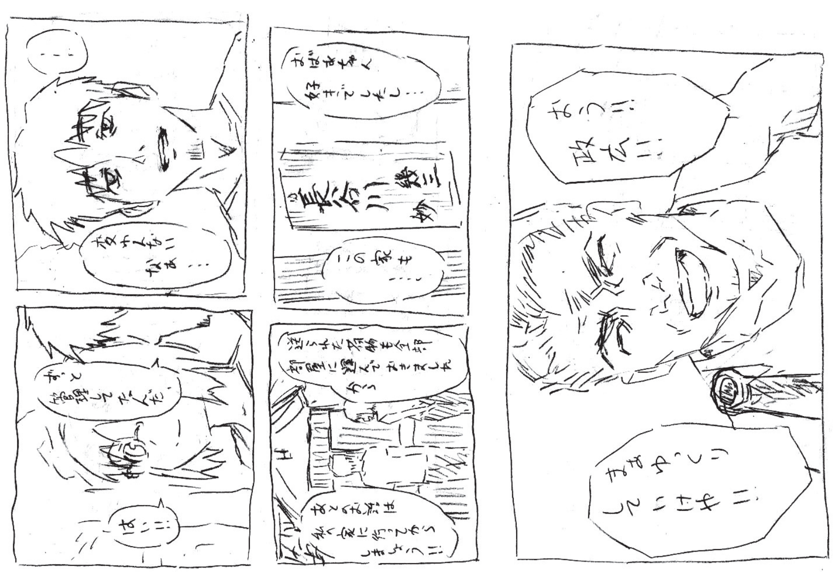
望む未来は千代子ないし子ども性なしでは獲得できないものであると、政広が理解した瞬間だった。

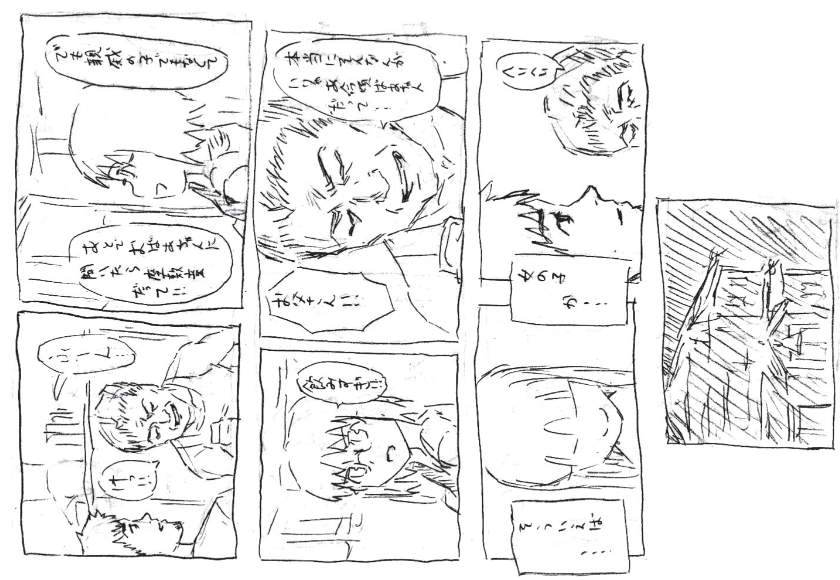
7．さらなる昇華へと

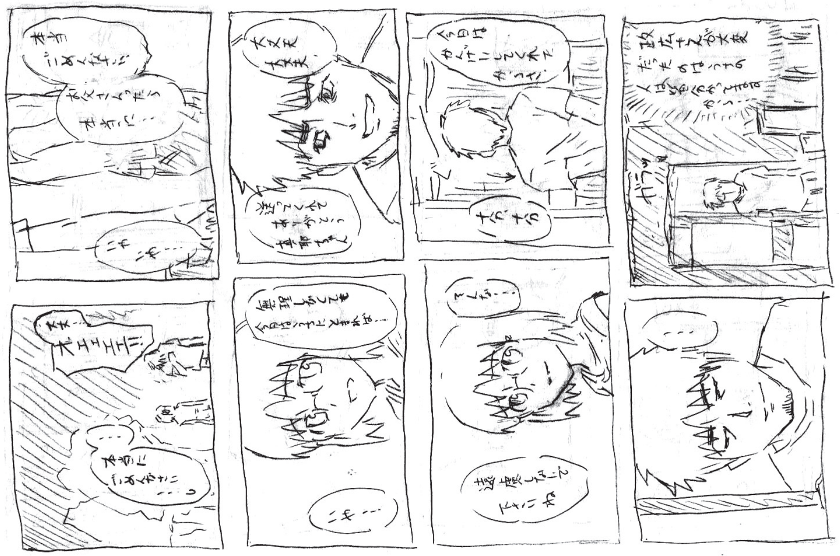
これが現時点での私の子ども性に対する認識だ。きっとこれから変化しうるものであるかもしれないが、この作品を描き切ったことは、少なからずわたしの中の子ども性をある程度可視化させた。それはわたしが考えたことではない。わたしはただ大まかな流れをえがいただけで、それにそってキャラクターたちがキャラクター自身の物語を提示したのだ。考え、形にするということはなににおいてもそれに似たようなものなのかもしれない。キャラクターが演技をする、文字が紙に浮かんでくる、ペンが踊る、そういうふうにして人は新しい可能性を発揮していくのかもしれない

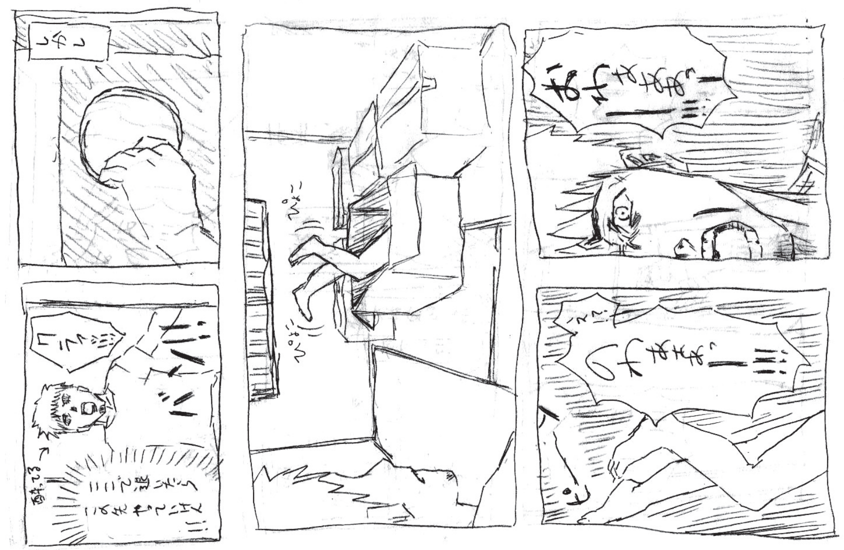


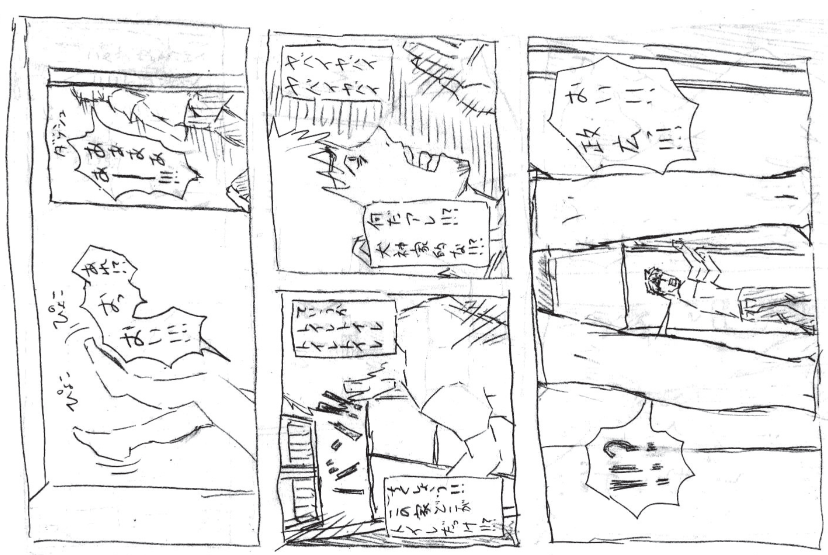


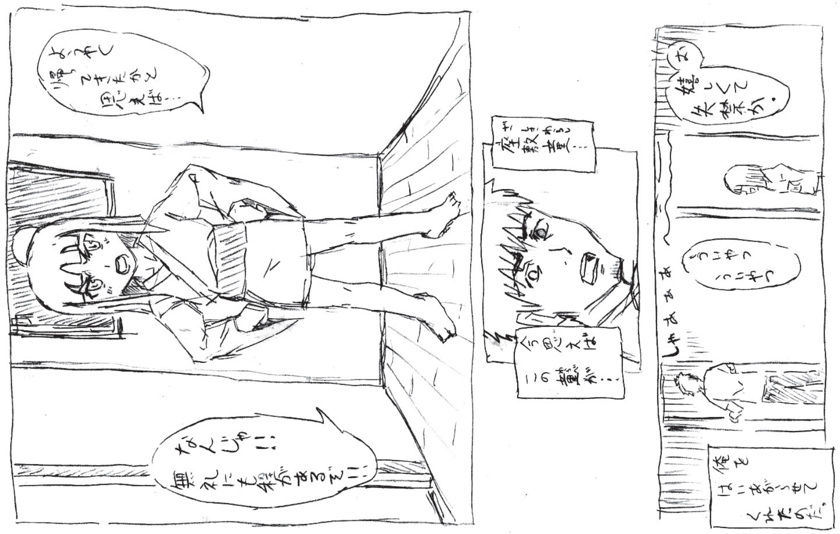


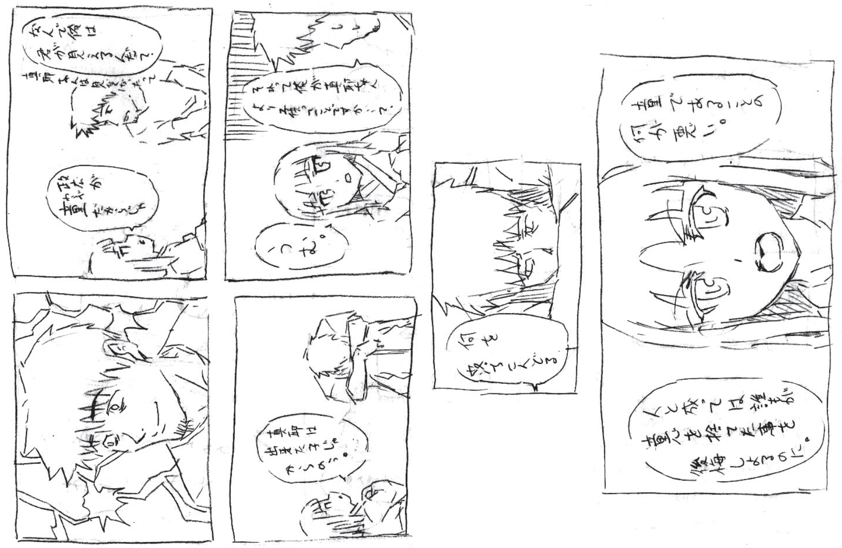


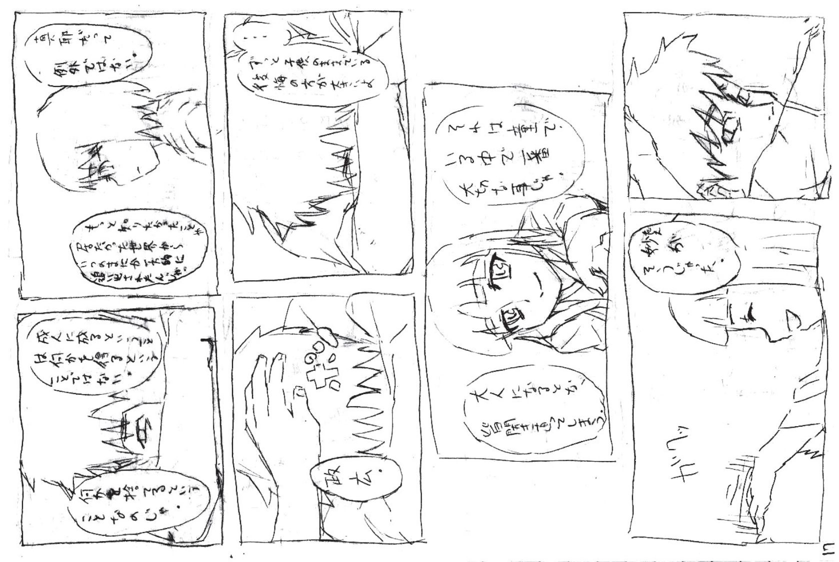


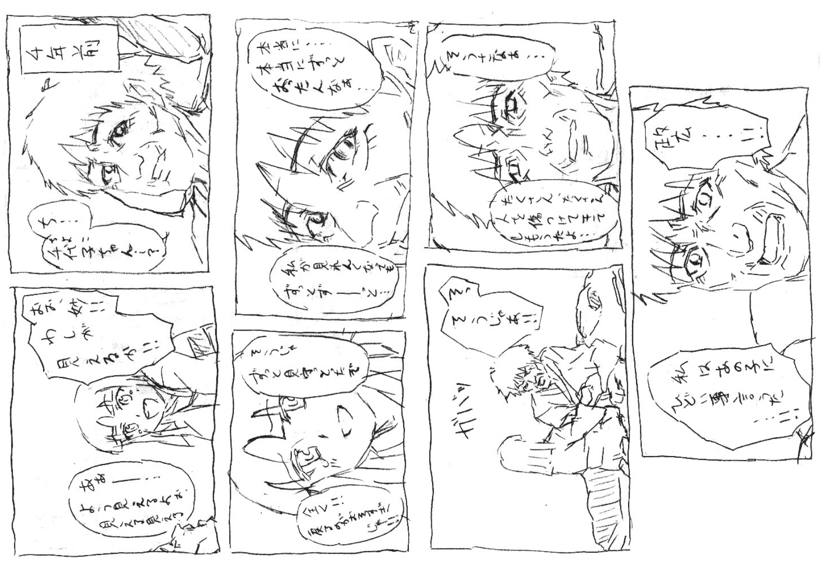


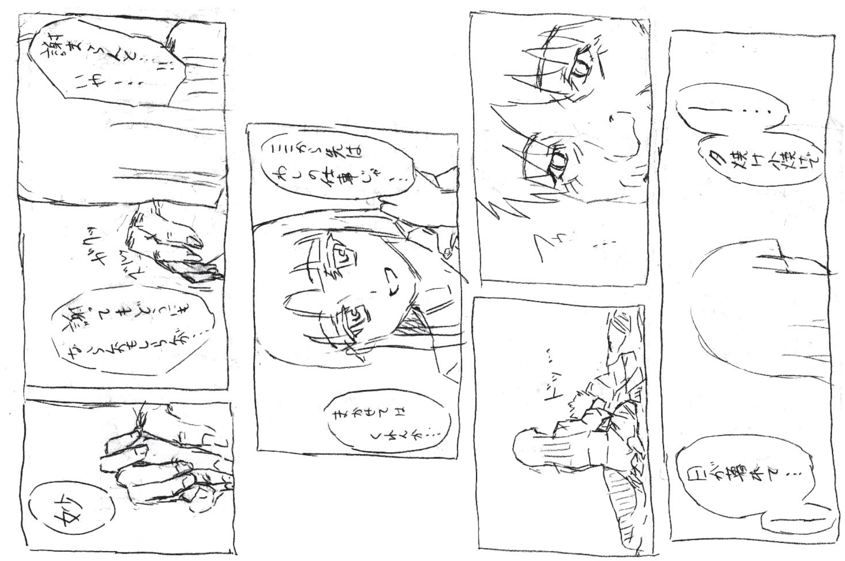


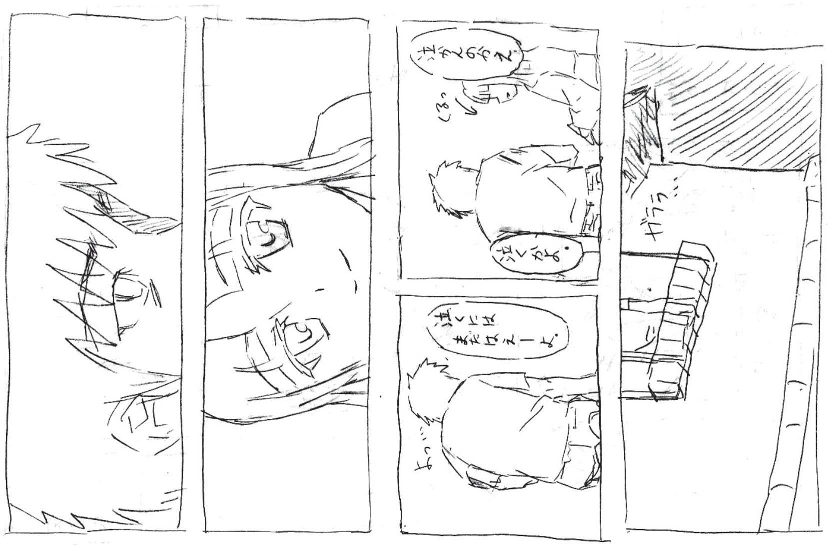


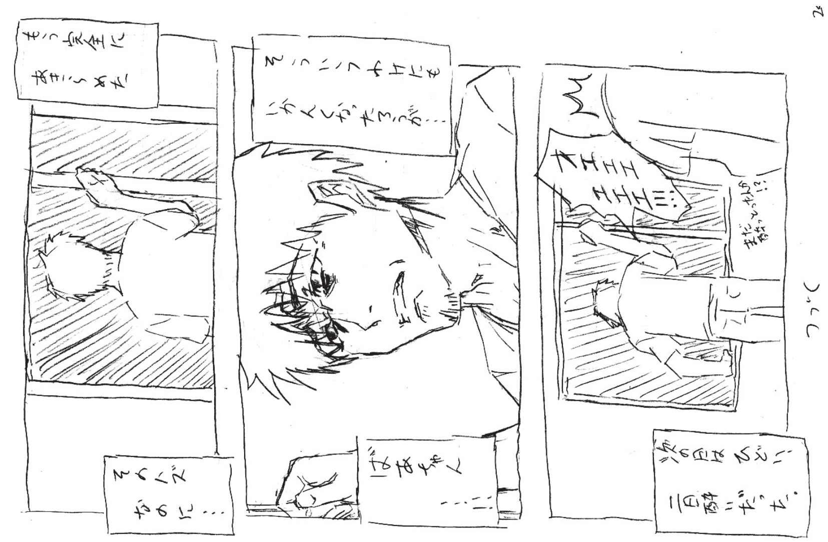


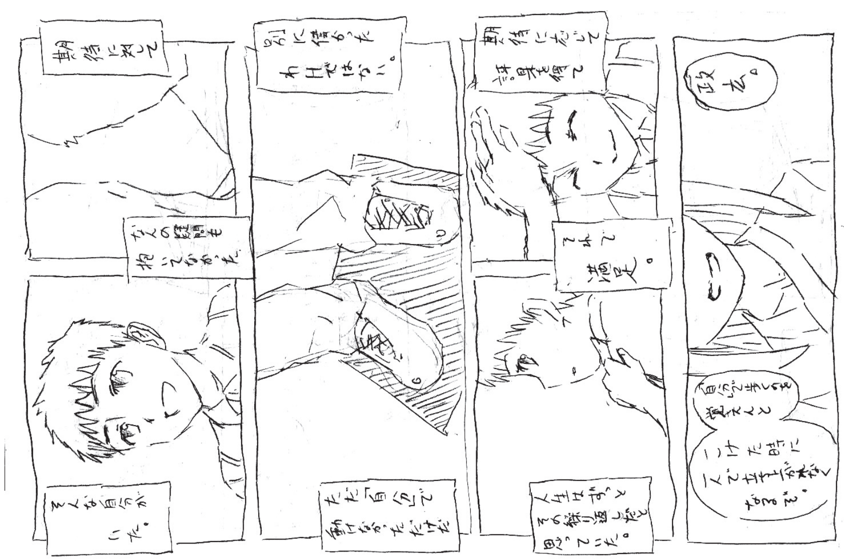


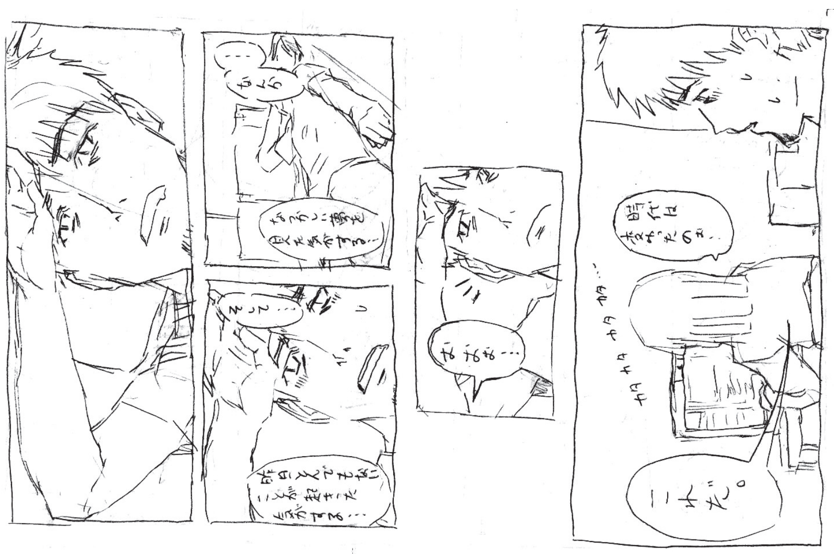


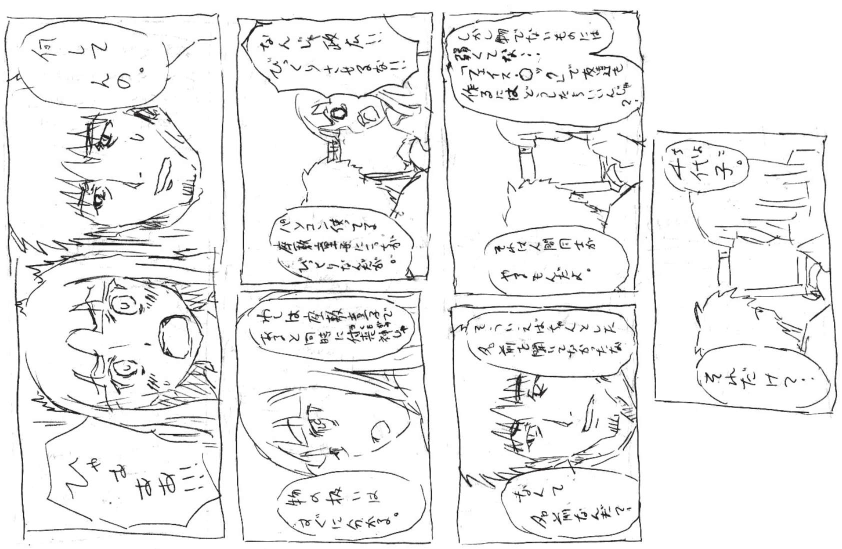


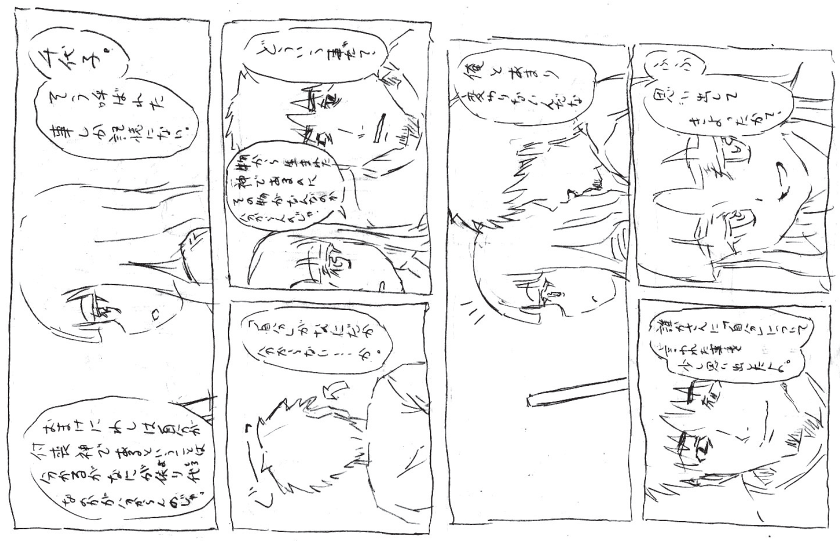


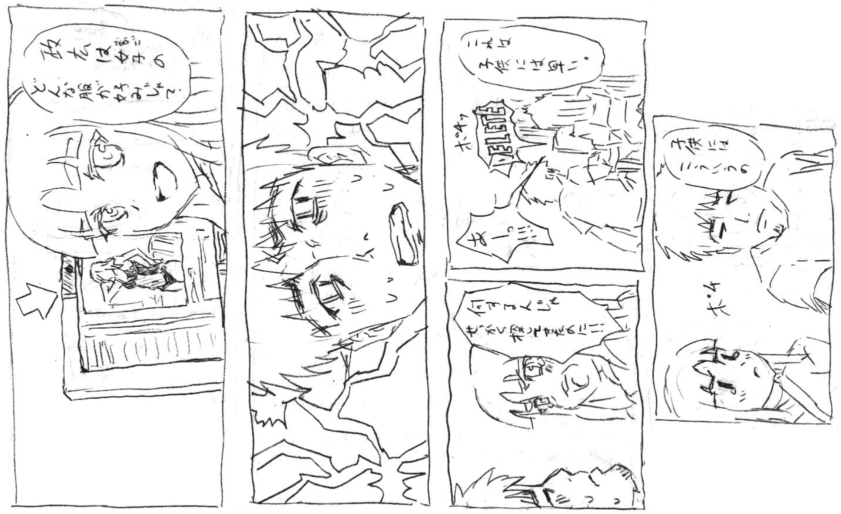


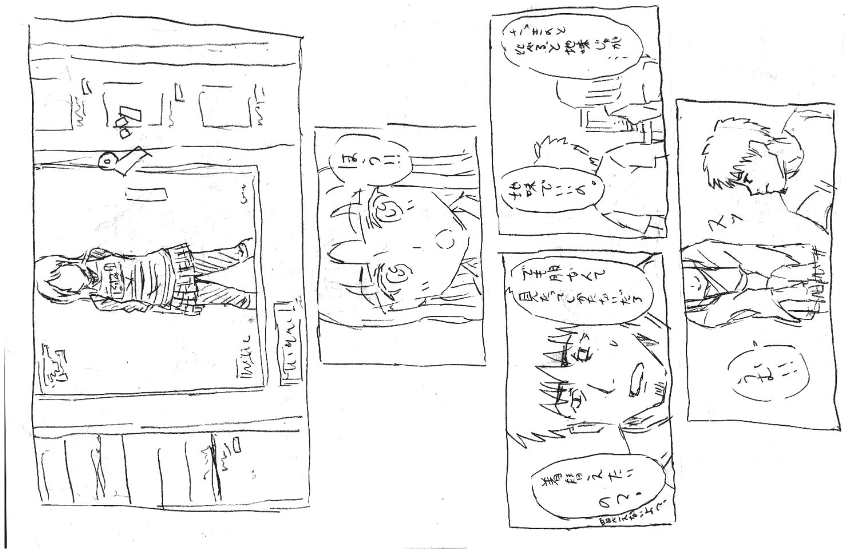


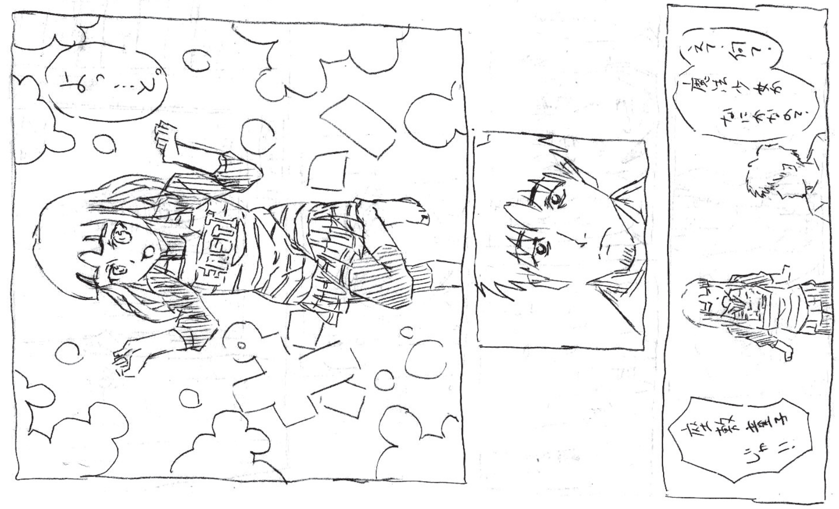


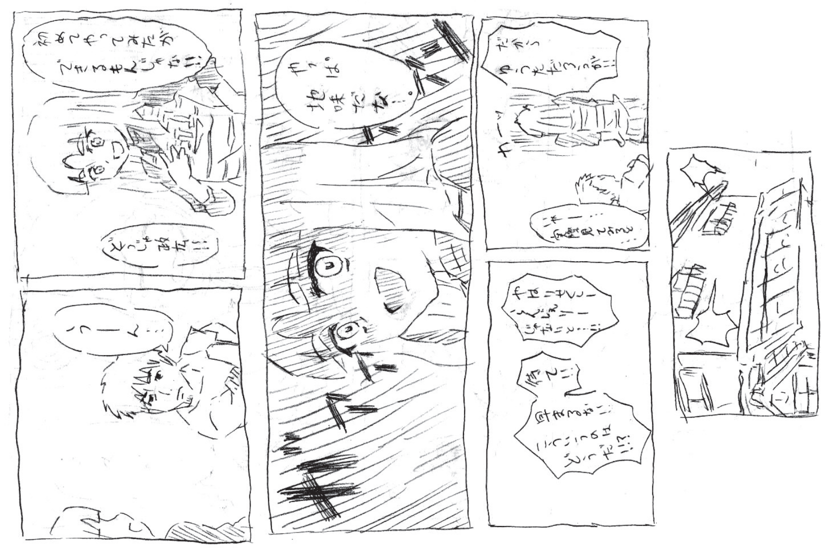


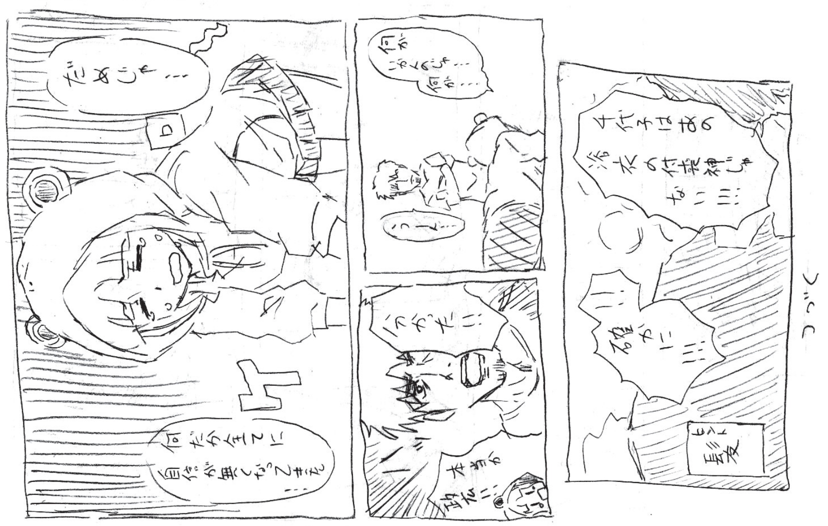


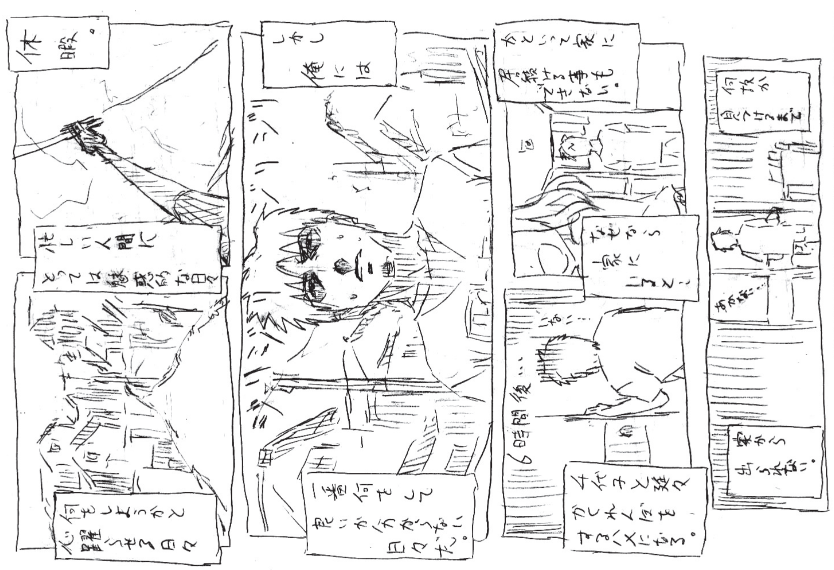


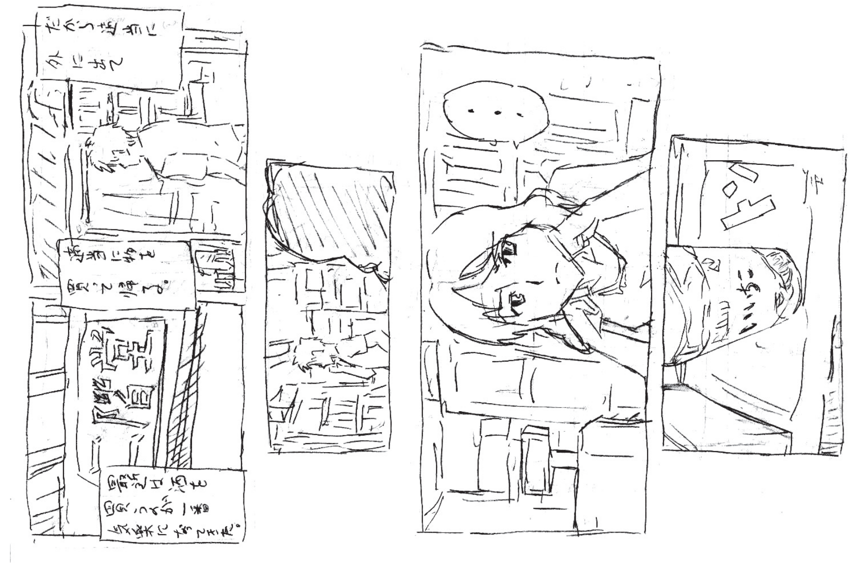


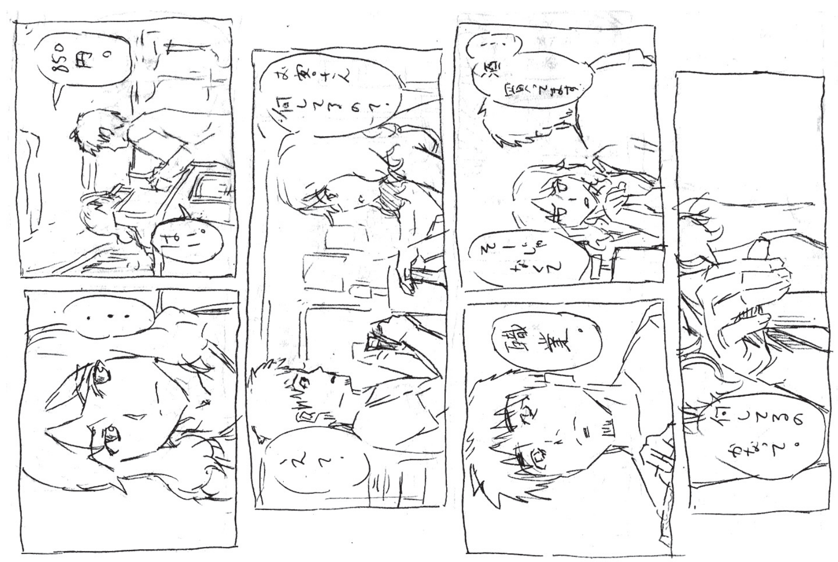












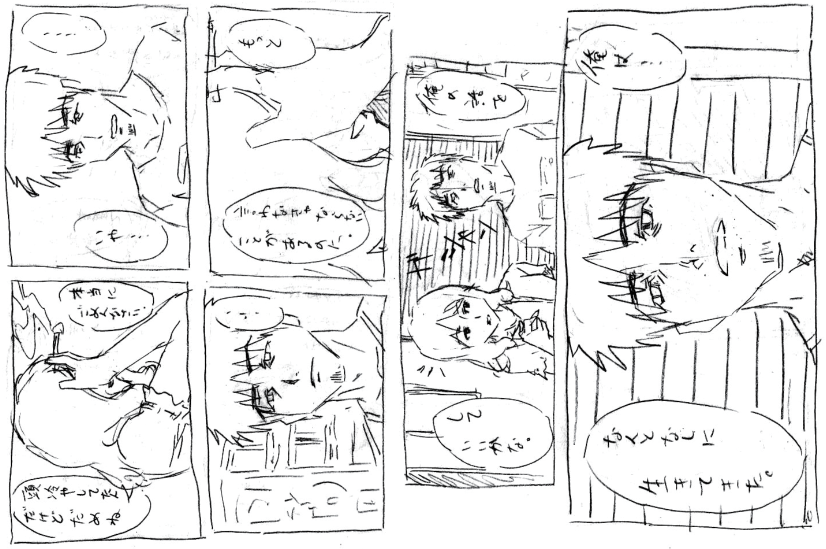
4
ルーク
ここは…
ぼくの部屋
ぼくの部屋にいる
ぼくの部屋にいるこの人は
ぼくの部屋にいるこの人は誰
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！！！
ぼくの部屋にいるこの人は誰なんだ！

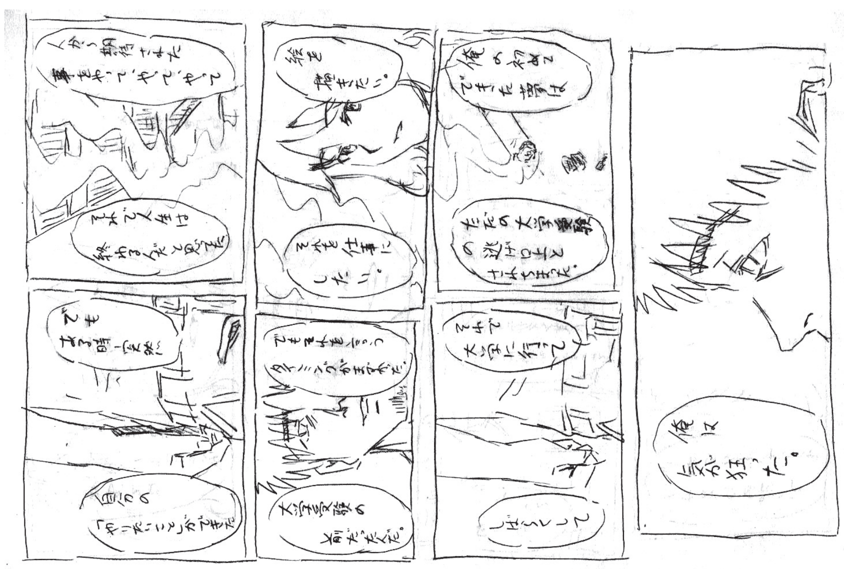
後ろの方で
作っていたケーキ
…
ケーキ屋さんの
お仕事に興味
あるんだ
ふーん…
決めた。
ケーキ屋さんに
行こう。

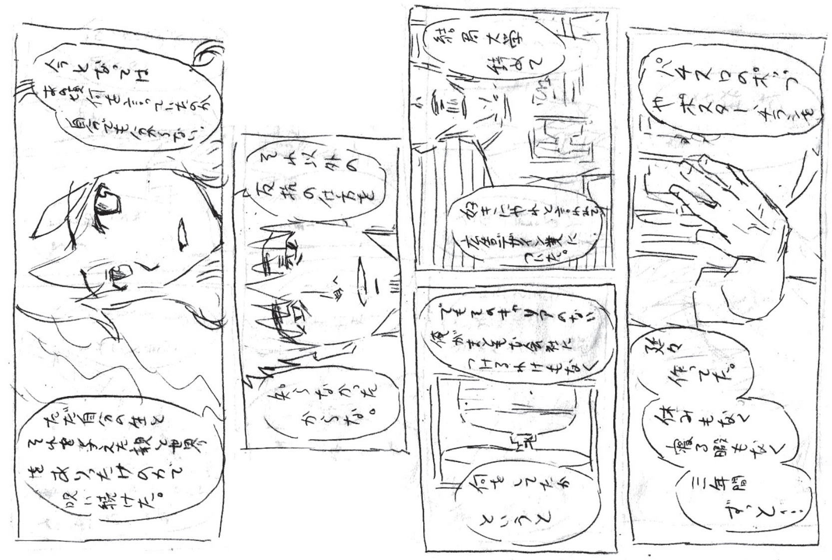
ケーキ屋さんに
行こう
ケーキ屋さんに
行こう
ケーキ屋さんに
行こう
…
ケーキ屋さんに
行こう

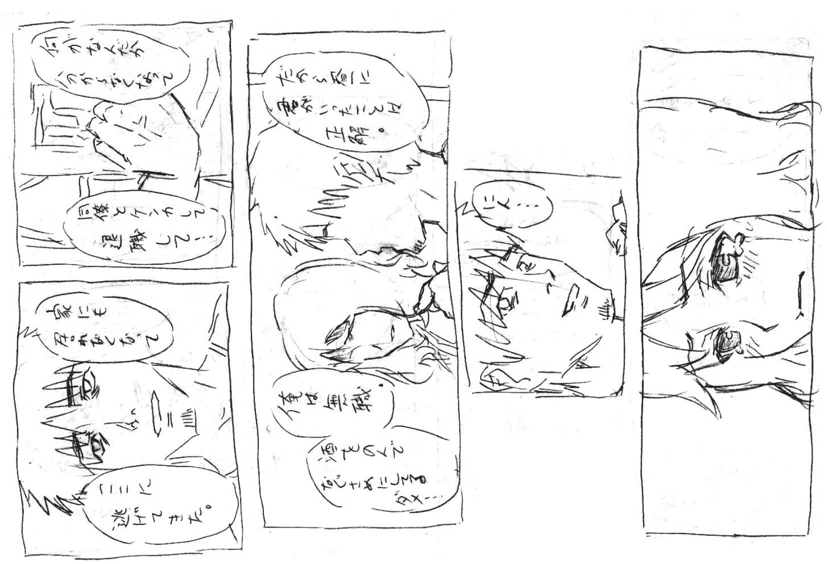
彼は
その夜を
決して
忘れない。
その日全ての
幸福を集めたような
満ち足りた顔で
帰っていった
後悔がない
ケーキなんて
存在しない
不思議だ。
彼女にあげた
自分のケーキが
一番美味しい

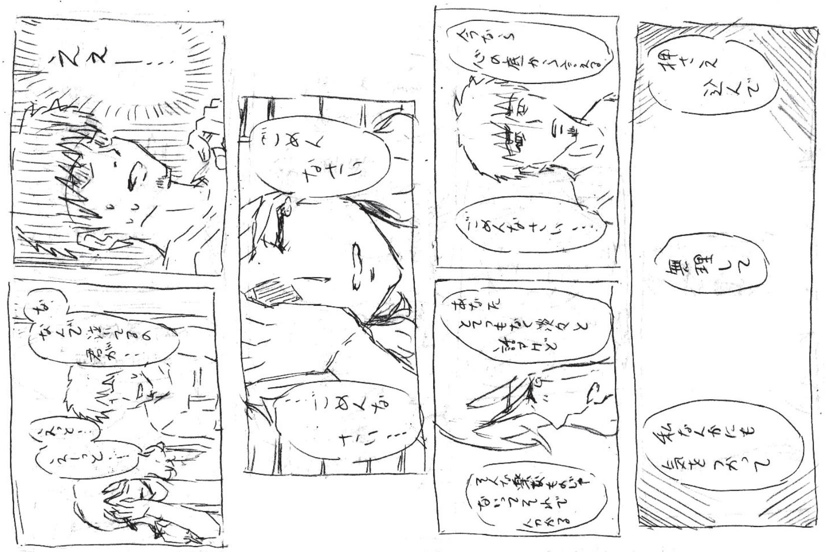
ここはどこ!!
ケーキ屋さんに
行こう
…
ケーキ屋さんに
行こう
ケーキ屋さんに
行こう
ケーキ屋さんに
行こう

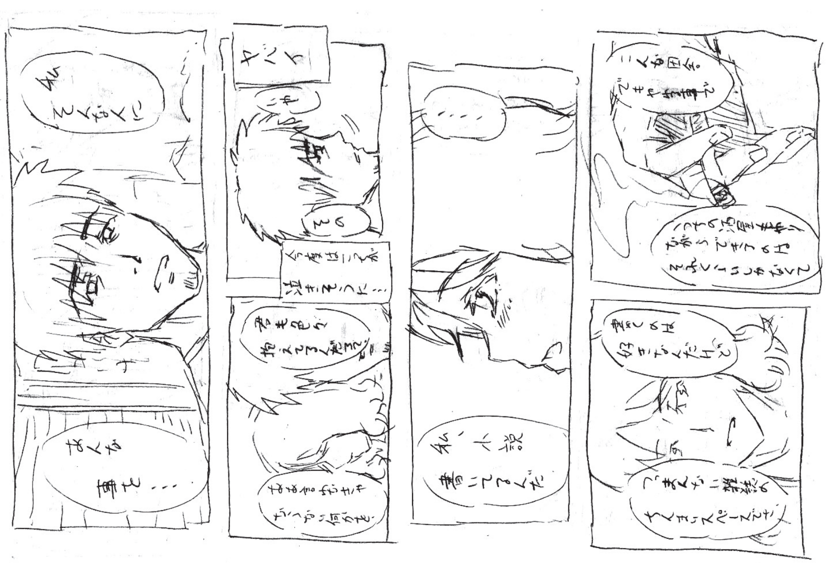


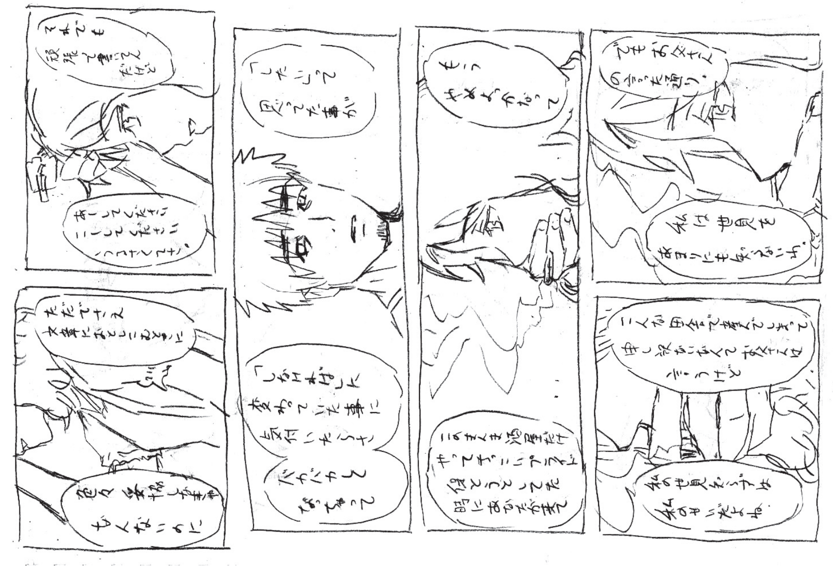


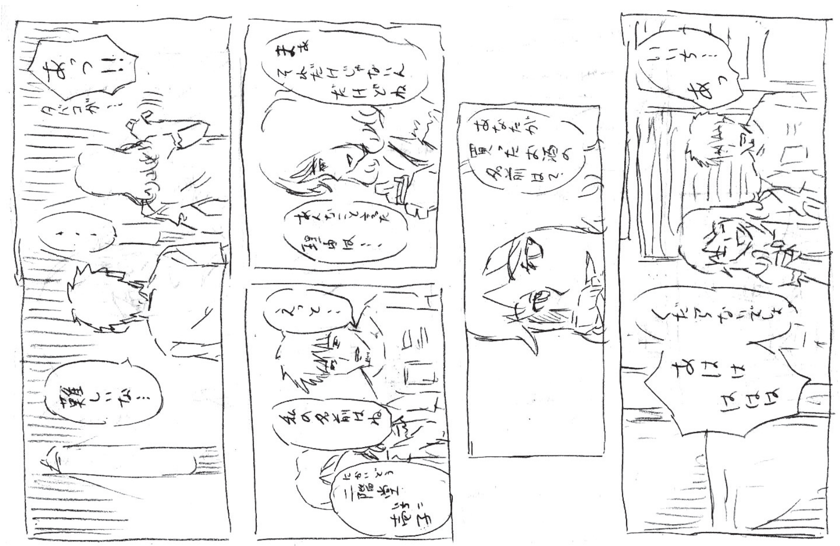


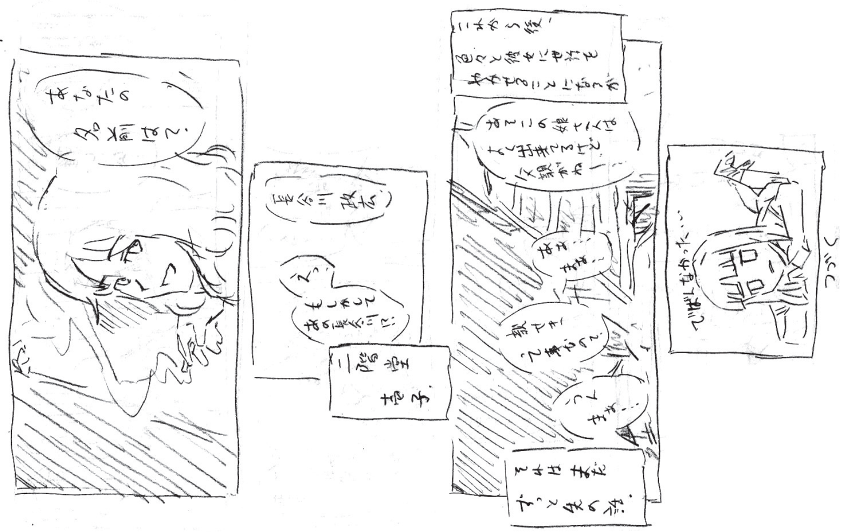


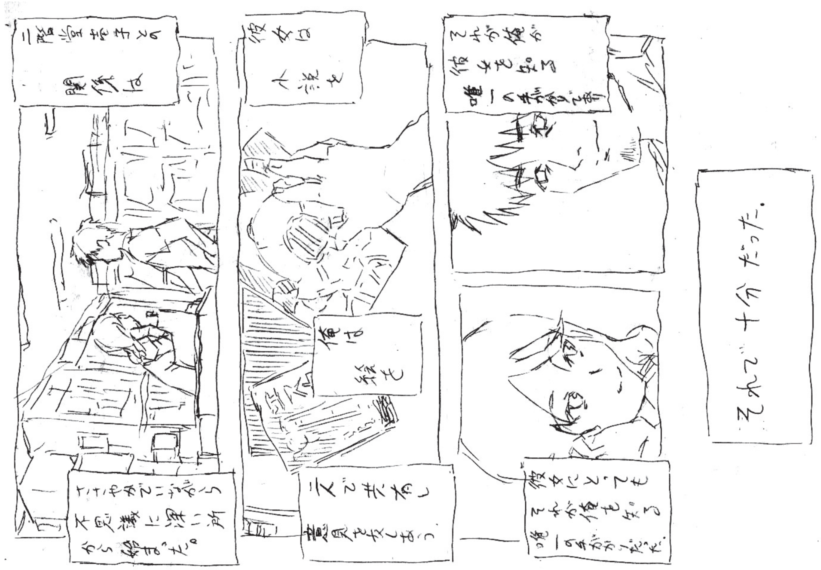


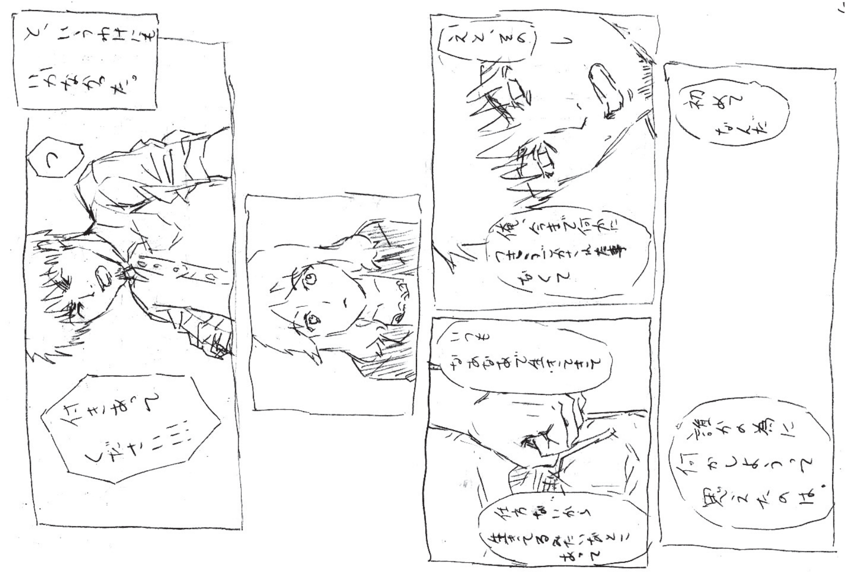


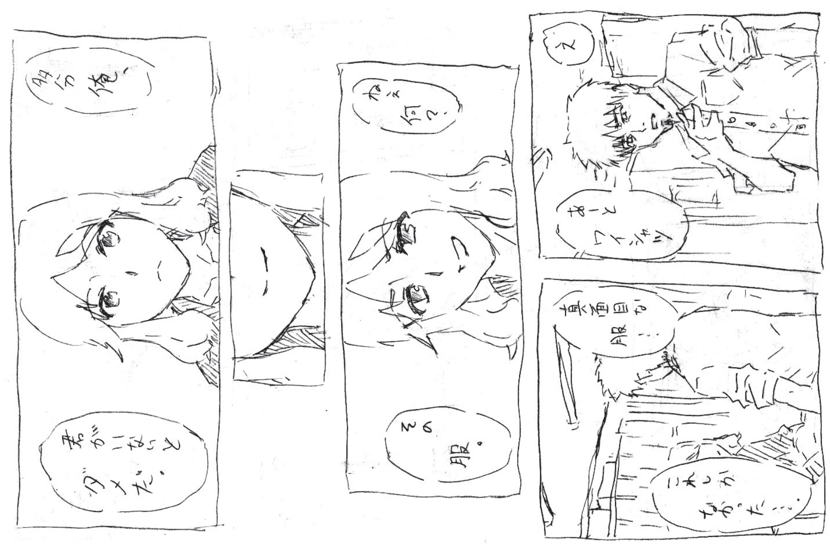


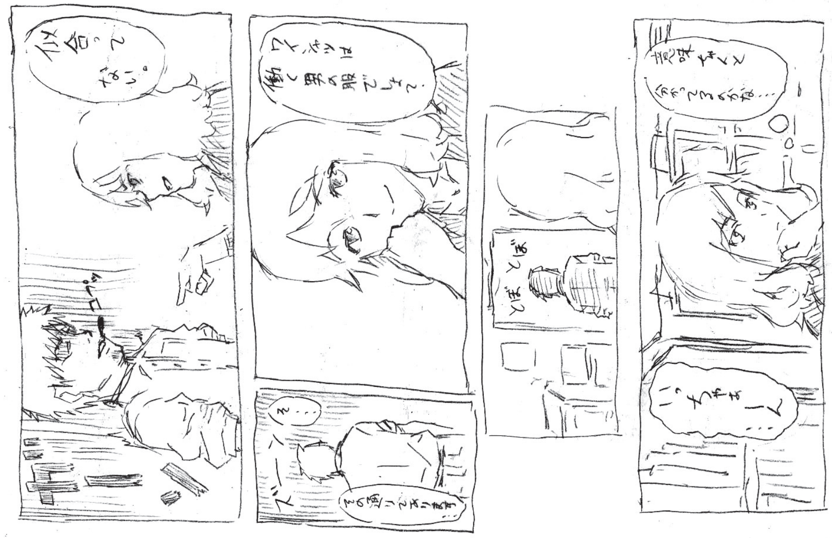


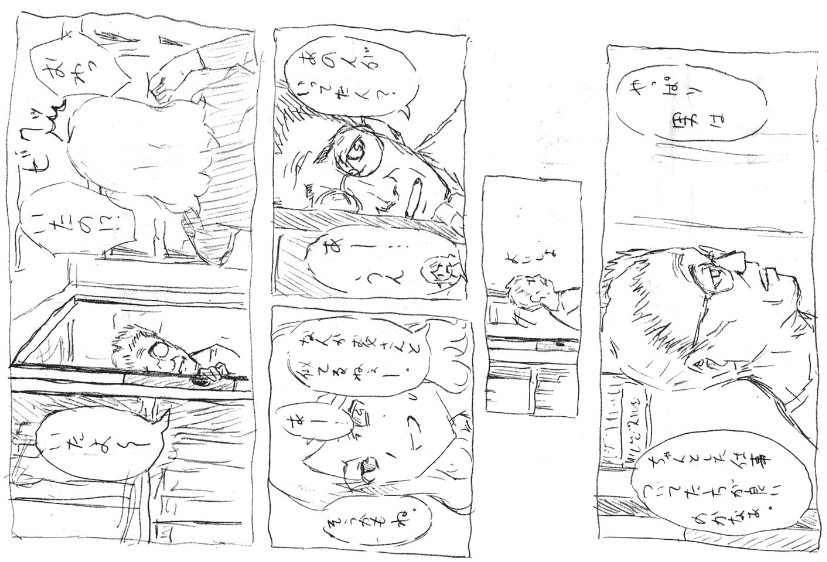


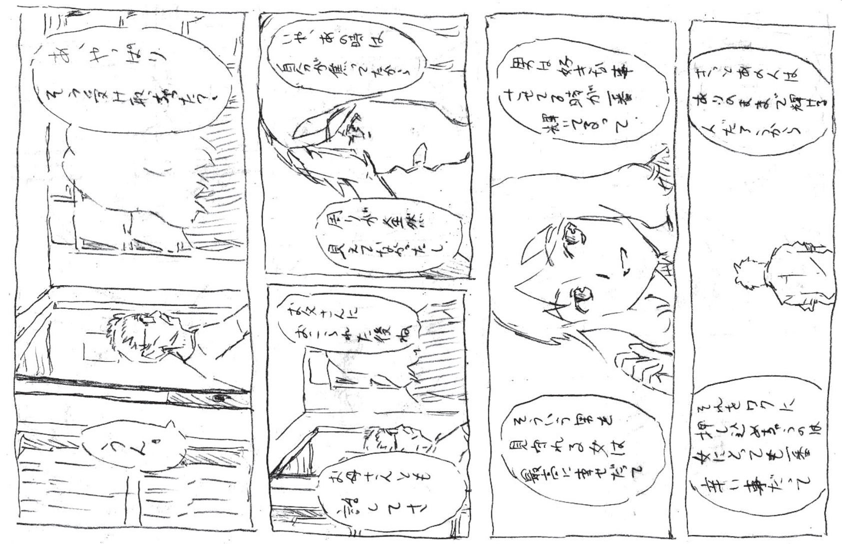


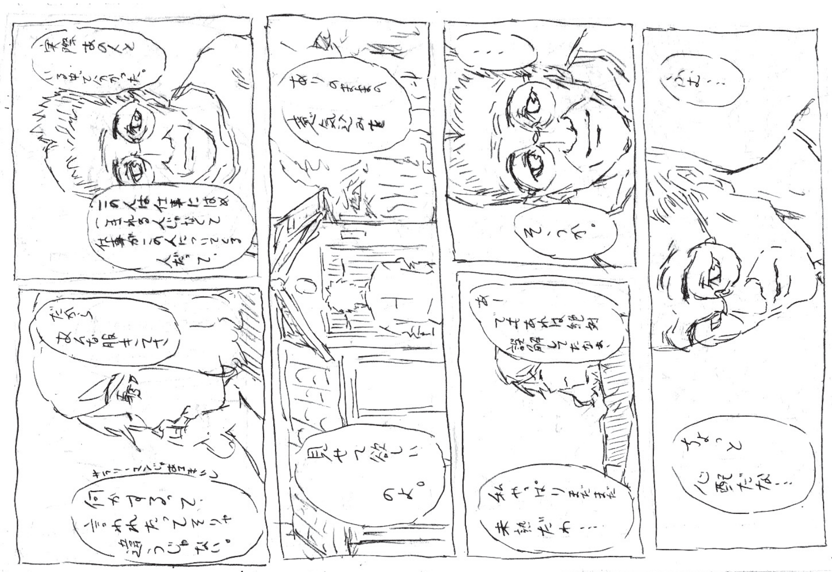


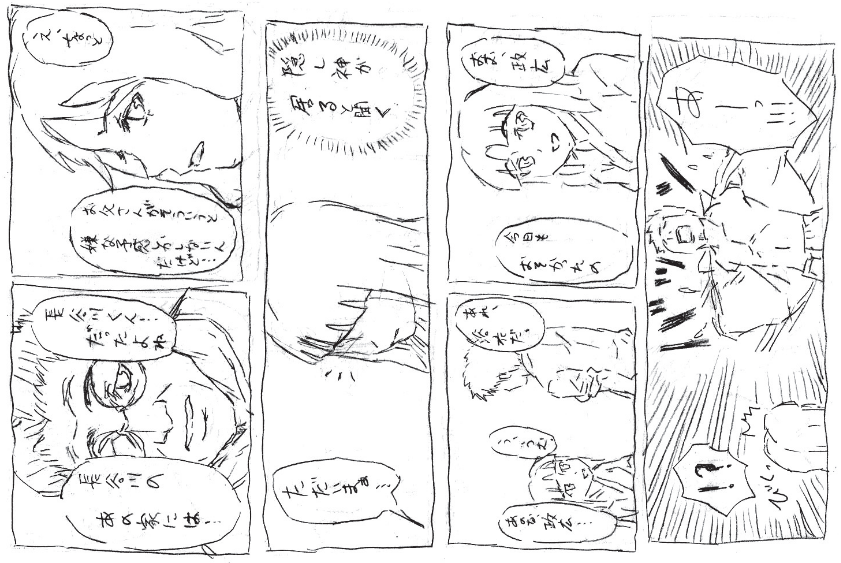


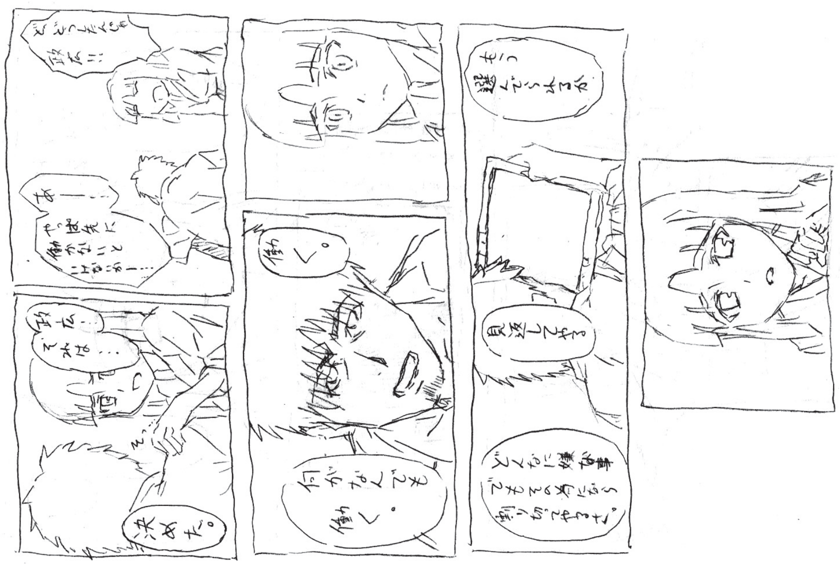


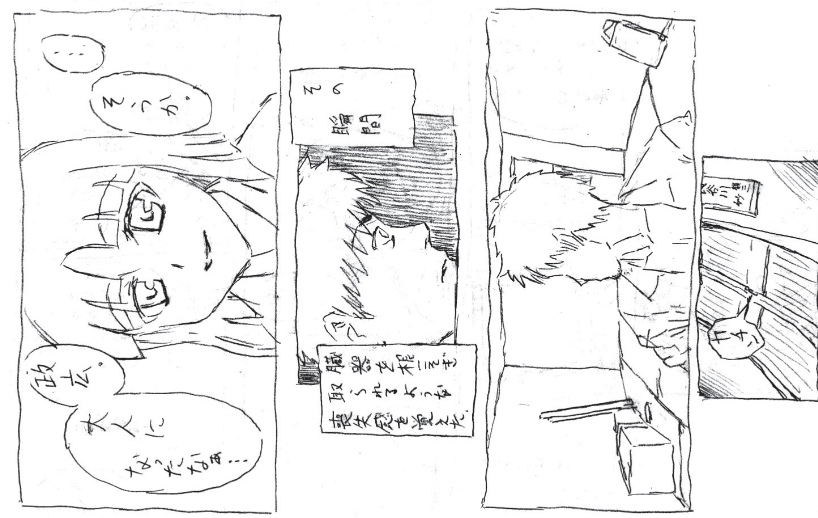


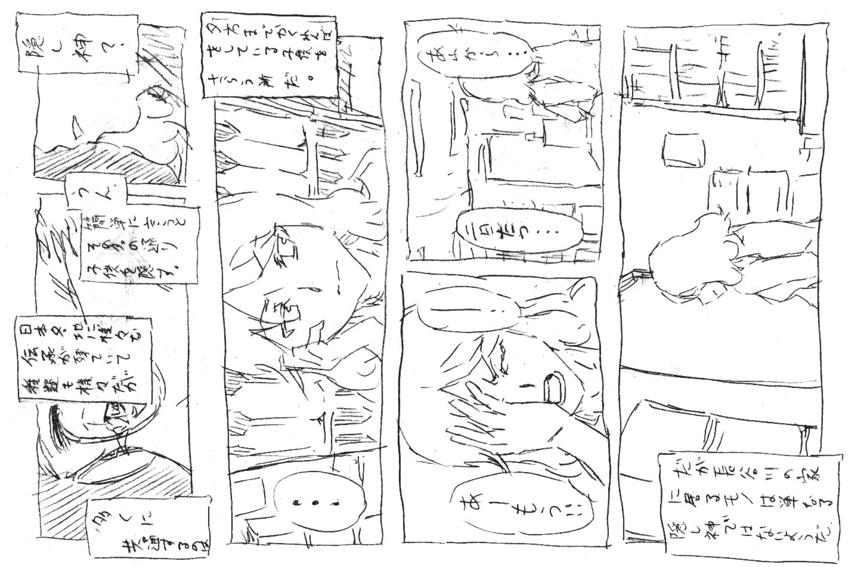


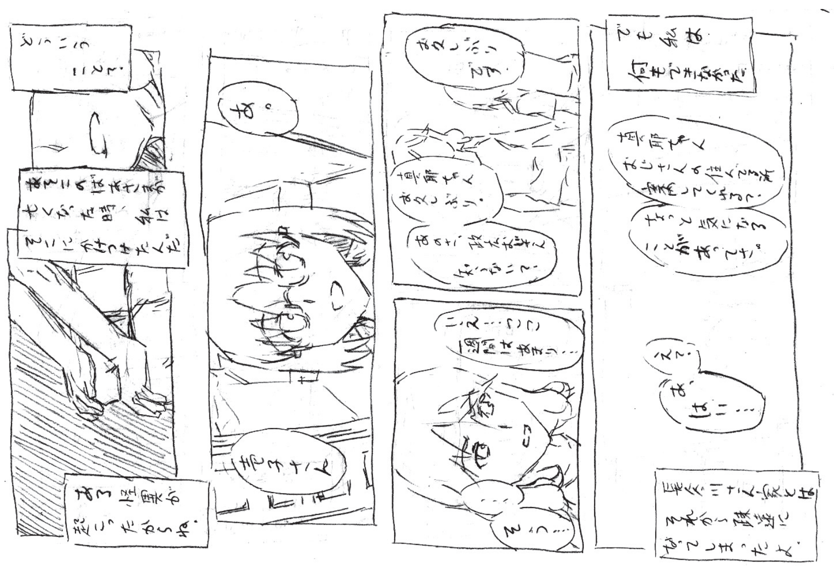


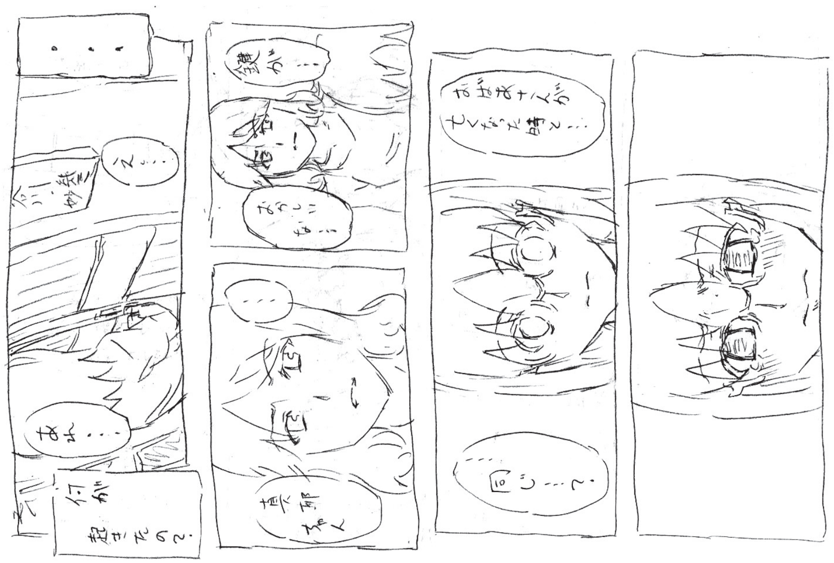


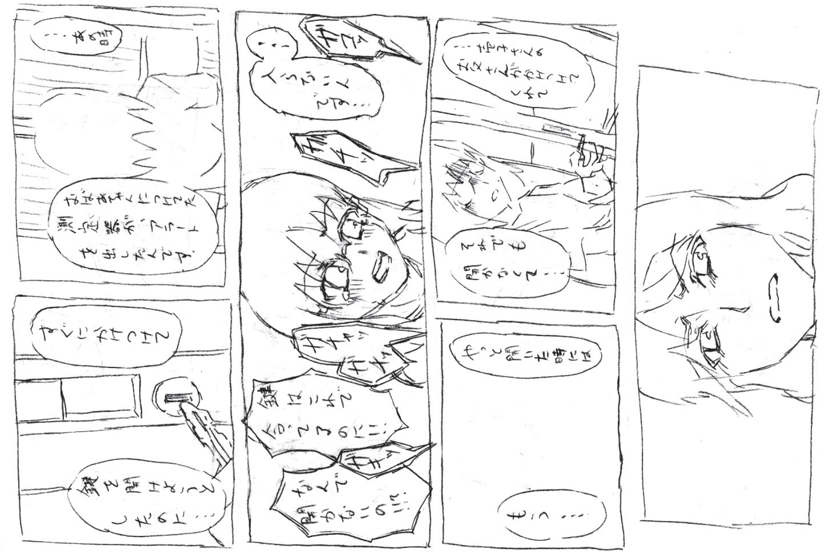


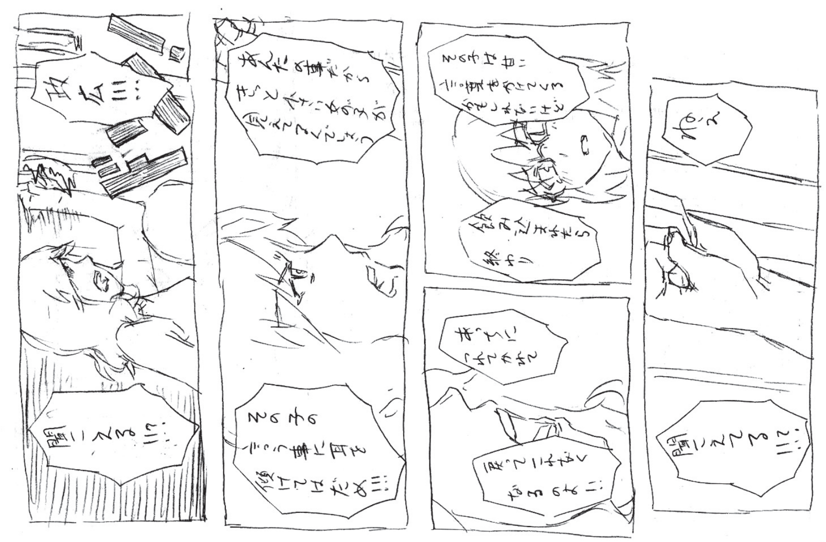


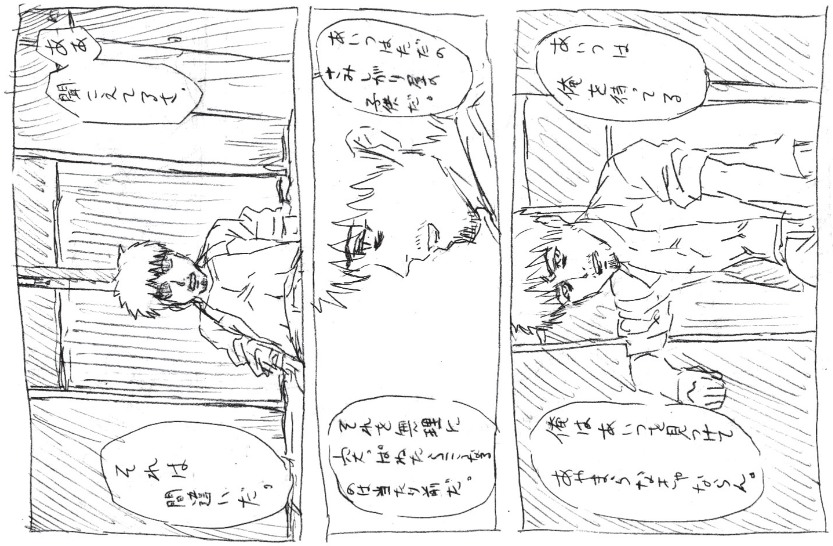


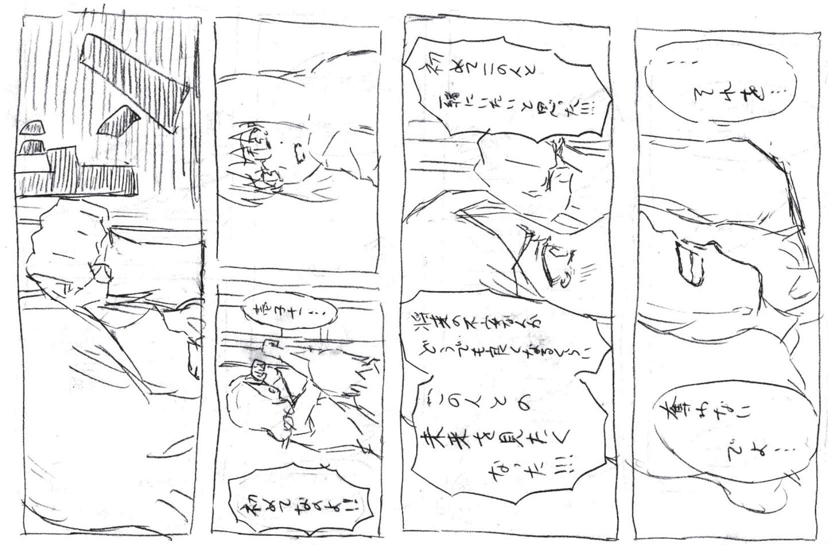


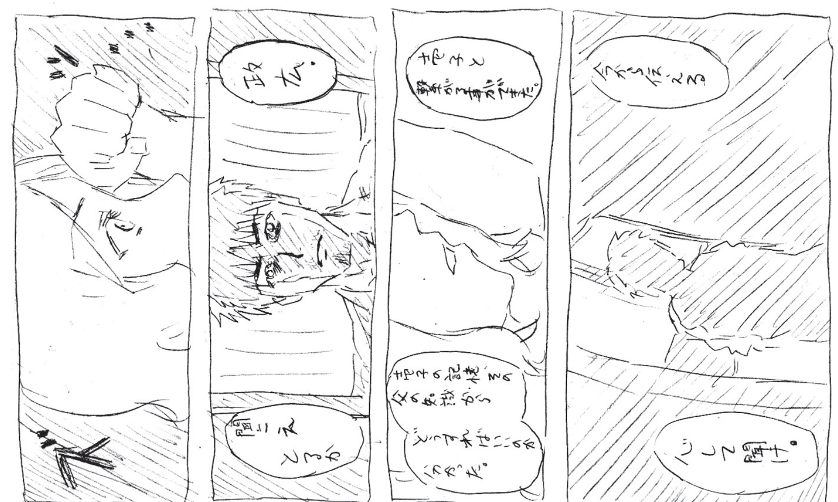


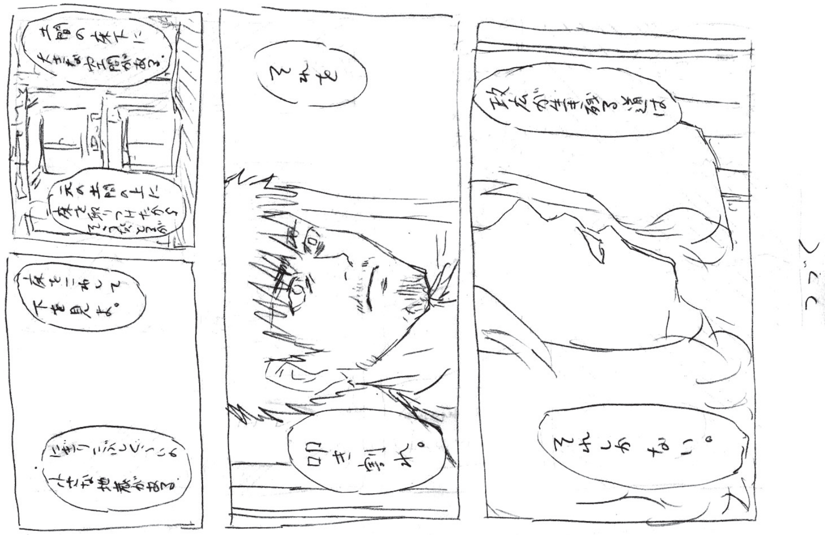


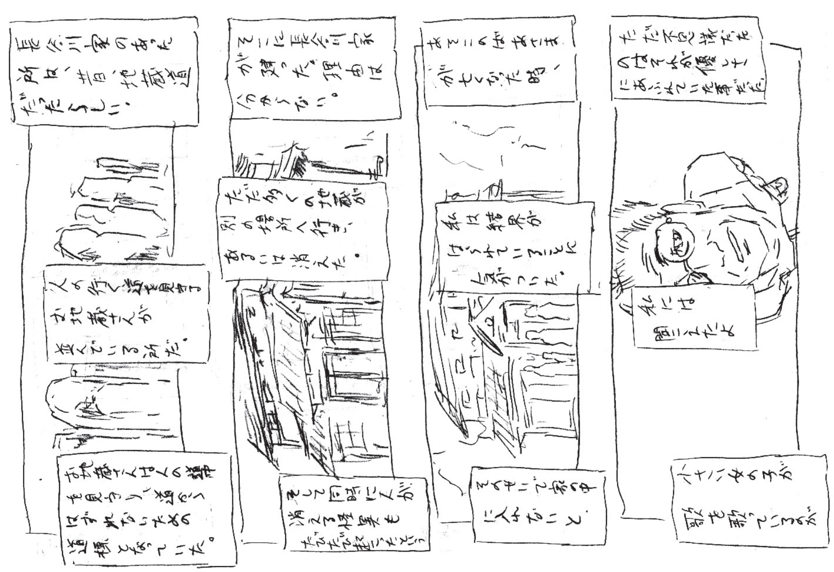


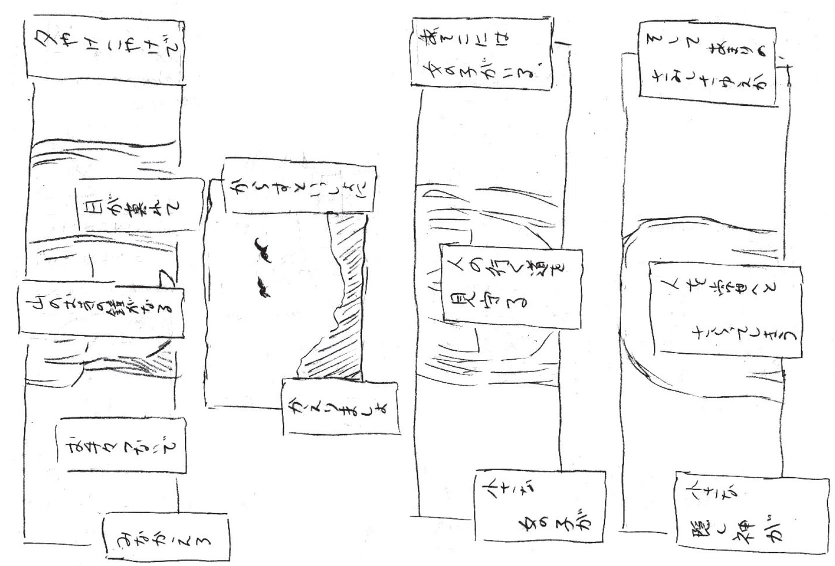


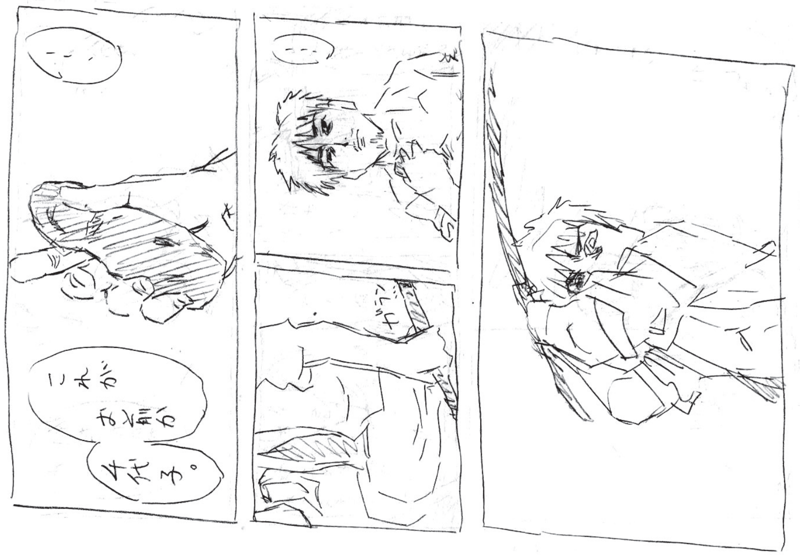


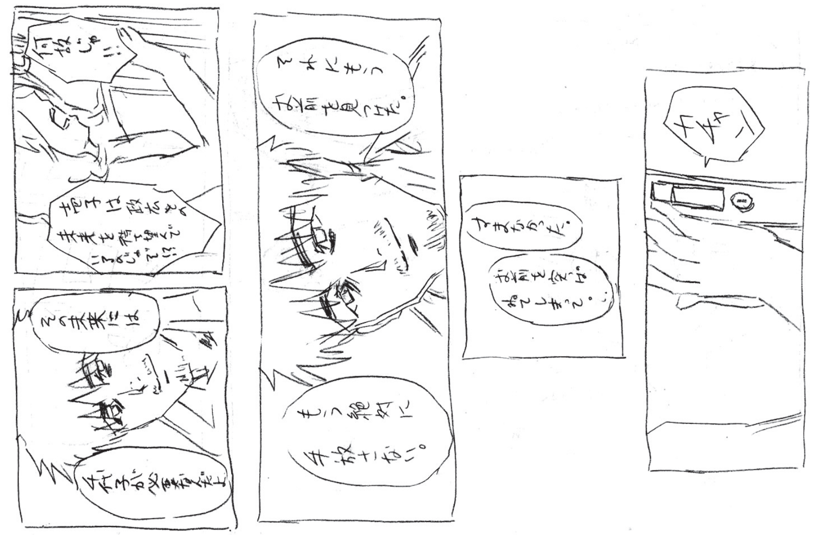


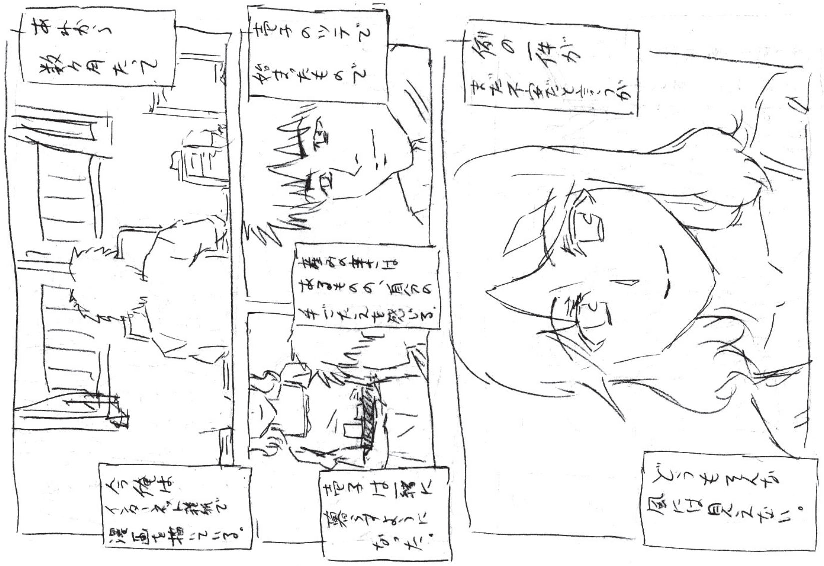


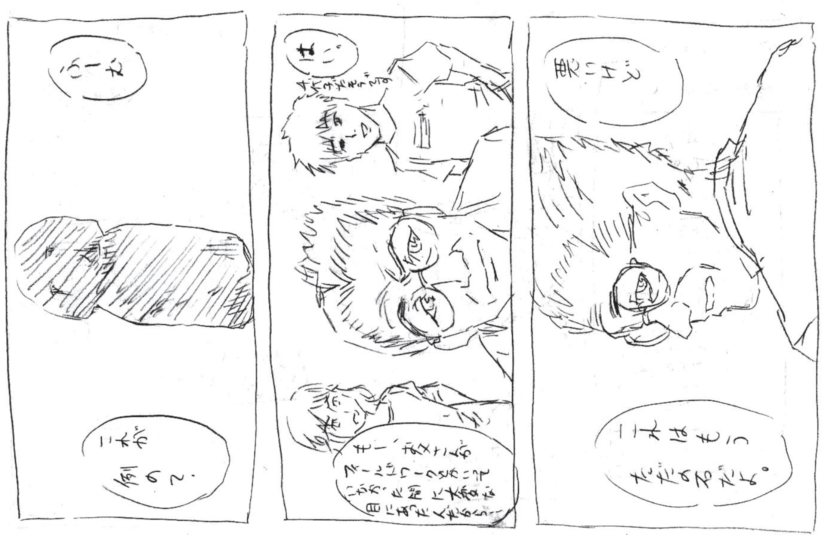












私はお化けじゃありません。
ノガミさん、という農耕の守護神です。

柿ちゃんです。かかしやってます。

レポート以外のテーマ

Discuss about Themes

づら研では、レポートではなく、テーマだけ設定して話し合うこともある。この１年間で出たテーマは、「身体性」「怒り・痛み・悲しみ・暴力・マグマ・お化け」「学校」「友だち」など。今回の冊子には、「学校」と「友だち」の回について、参加者から報告を寄せてもらった。

学校について（KJ 法でのワークショップ）

高頭 悠樹 (Yuki)
Alternative Link Creator

●づら研でのワークショップの概略

日　時：2013 年 5 月 13 日 (月)13 時～ 17 時（15 時ごろ 10 分休憩）
場　所：大阪ボランティア協会・会議室
　　学校の教室の半分くらいの大きさ（狭め)
気　候：快晴で日差しがギラギラ。午後 1 時ごろには、25 度を超え夏の陽気が感じられた。
参加者：人数 8 人（男：女＝ 5：3 ／ 20 代 5 人、30 代・40 代・60 代各 1 人）
　　格好：みんなラフめの普段着
内　容：名前程度の自己紹介の後、本題へ。

（1）「KJ 法」⇒参加者各自が、自身の持っている「学校」に対するイメージをカード 1 枚につき一言ずつ書いていく。そのとき、自分の世代・性別・学歴（不登校歴）も明記する。(ex. 紙面↓)

友だち関係
男・20 代・大学院

（2）各自がある程度カードに書き尽くしたら、模造紙に書いたものを出し合い、似た内容が書かれたものどうしでカテゴリー分けをしていく。

（3）（因果）関係のありそうなカテゴリーどうしを線で結び、関連性を調べる。

（4）誰がどのようなものを書いているかをチェックし、その人が育った環境や世代間の意識差のちがいなどを楽しく話し合う。

●私の「学校」に対するイメージ

「同調性―フツーか変か―」「人間関係」「競争・値踏み・比較」

ぼくは、自分が体験した学校教育のシステムや決まり事や、そこでの人間関係が、今の自分の人格形成・ものの考え方に大きすぎる影響を与えたと思う。常に自分が周囲と比べて劣っていないか、(間) 違っていないか（優れていないか、自分らしさがちゃんと出ていないかではなく)、さらにそのようなことを気にしている雰囲気が出ていないかなどと、気にするようになってしまった。営業スマイル――仕事でお客様に対して、仕事仲間に対して、友だちに対して……etc ――が常にちゃんとできているか、それぞれの集団の中での自分の役割・キャラクターは何で、周囲から期待される役割にきちんと答えているかというふうに。

今は、そのような自分も受けいれたうえで、子どものころからぼくが人一倍強かった（と自分で思っている）人から認められたい欲求と、向上心（自身に対しても他人に対しても）を活かして、やりたいことを実現させようと動いている。

物心がついたころ、ぼくはじっとしていられず、よく一人で走り回っていた。同年代の友達とは遊べず、また外でスポーツをしたり外出することを嫌がり、たとえば保育園に行く時などによく駄々をこねていた (保育園の怖い先生による管理教育が嫌だったのもあるが)。当時のぼくの趣味は、パズルやパソコンで遊ぶこと、ピアノを弾くこと、計算問題を解くこと、電車ごっこをすることといった、一人遊びばかりであった。

小学校低学年から中学年にかけて、ぼくは地元の学校の「通常の学級」に通いつつ、週に 1 日～ 2 日のペースで「情緒障害通級指導教室」[*1] にも通っていた。当時は、比較的理解のある大人たちに囲まれたおかげで、とくに大きないじめなどは受けず、楽しく学校生活を送れていたと思う。しかし、ちょうどそのころより、自分が周囲の同級生・教員・地域の人から、補助が必要な「特別な」子供として一人前に扱われていないと、感ずるようになった。

ぼくは背伸びをしようとして、みんなの話に無理やり食いつこうとしたり、実技教科や習字の時間などに担任や他の生徒から補助を受けることを煙たがるようになった。ただ、忘れ物を一人だけした時に言い出せなかったりと、無理をすることも多くなっていった。さらに、周囲が話している話題やその場の「空気感」を理解できなくても知ったかぶりをしたり、一人だけ周囲と意見や立場

*1　おもに発達障害の徴候が見られ（診断の有無を問わず)、学校での集団生活に不適応をきたしている子どもにコミュニケーションの取り方や生活力を養うところ。

が異なることを素直に言えなかったり、自分が無理矢理話題に入るために、他人がついていけない方向に会話を展開させてしまったりすることも多くなり、かえって周囲との摩擦が増えていった。

中学校の前半はいじめを受ける日々が続いていた。初めは言葉での冷やかしが多かったが徐々にエスカレートし、一時期は殺されかけるくらいの暴力を毎日のように振るわれた。しかし、いじめのリーダー格にケンカで勝ってからは立場を逆転させたばかりか、学校内外で関係のない人にまで迷惑をかけるほど荒れてしまったこともあった。その後も、不器用ゆえに背伸びして積極的に同級生や周囲の大人に、「自分はすごいんだ」ということをアピールしようとコミュニケーションを試みては、その結果、ちょっといじられたりすると勝手に「失敗した」などと落ち込むことの繰り返しを、高校・大学時代の前半も続けた。

ようやく、大学を卒業する前ごろには、対人関係が不器用な自分を受けいれて、自分がそのような人間に育ってしまった社会（とくに教育）の環境とはどのようなものかを調べようと思い、社会学系の大学院へ進んだ。

今ぼくは、10 代のころ経験したトラウマを活かし、個性が強いゆえに誤解も受けやすい思春期（中高生くらい）の子どもたちがより自分の長所を「絶対評価」してもらえる教育環境を実現させようと、日々動いている。

「友だち」について（フリーディスカッション）

2013 年 6 月 10 日　P.N. 野草

●づら研に参加する前の私の「友だち観」

まず、私がごくごく個人的に築き上げてきた、「友だち」という言葉から連想されるイメージについて（事前の考え、イメージの章です）。

今回、参考文献にあがった書籍が、ことごとく「友だち」という言葉をネガティブ・イメージとして捉えているという指摘が、議論の最初に山下さんから入りました（『友だち地獄』『教室内カースト』『桐島、部活やめるってよ』など）。私にとっても「友だち」という言葉から連想されるイメージは、ネガティブのオンパレードでした。９歳という、比較的早い段階から学校に行かなくなった私にとって、そもそも腹を割って話せる友だちをつくる機会がなかったというのが、まずひとつの要因ではないかと思います。

たまに学校へ行くと、クラスメイトはみんな私にやさしく、親切に接してくれました。毎日学校へ通うことが当たり前の彼ら彼女らにとって、ごくたまにしか学校に姿を見せない私は、自分たちとは「ちがう」存在です。私が不在の教室では、担任の先生から「野田さんが少しでも学校に来られるように、みんな親切にしてあげましょう」というような「お達し」がなされていたことは想像に難くありません。

私が教室の扉を開けると、先生は満面の笑みで私を迎えます（今にして思い返せば、これってクラスメイトにとっては相当な圧力なんじゃなかろうか）。

そんな雰囲気の中で、私をいじめたり、乱暴にあつかったりする子はひとりもいませんでした。また、学校に行くのは「当たり前」、それが「正しい」ことだと信じて疑わない 10 歳前後の彼らにとって、毎日学校に来られない私は「かわいそう」な、もっと露骨な言い方をしてしまえば「格下」の存在です（自分の地位をおびやかすことのない存在、めんどうくさいけど取るに足らない存在、みたいな感じじゃなかろうか）。

私は、クラスメイトにとって「異物」であり、もっとも適当な言葉を当てはめるのなら「お客さん」でした。だから私と彼らの間には、常に見えない壁が存在し、おたがいにどこかよそよそしさを拭い去ることができない関係ができあがっていったのです。

私が自分を「観客である」ともっとも意識し、「友だち」という言葉にネガティブ・イメージを決定づけられたのは、小学校６年生のときでした。

担任の先生は、ベテランの女性で「彼女の不登校は私がなおしてみせる！」

とやる気マンマンでした。手を変え品を変え、ずいぶん執拗な登校圧力がかかっていたように思います。また、来年は中学生ということもあって、「中学生になっても不登校を続けるの？」と、親、先生、クラスメイトとほとんどすべての周囲の人たちから眼差されていた１年でもありました。

そんな中、私もこの１年間は、精神的にも体力的にもへろへろになりながら、以前に比べればずっと多くの時間を学校で過ごしていたように記憶しています。

といっても、週に２～３日が限界でしたが。

また、担任の先生はクラスの女の子の間で人気のある、明るく体育が得意、動物が大好きないつもグループの中心にいるＡさんに、私の面倒を見るように頼んだのだと思います。ある日学校へ行くと、それでまであまり接点のなかったＡさんとＡさんをとりまく６～８人くらいの女子が、「野田さん！　よく来たね！」と私を取り囲みました。当時 12 歳の私は、目が点になりながらも、「これも先生の作戦のひとつなんだろうな～」とぼんやり感じたのを覚えています。

Ａさんは、明るく思いやりがあり人当たりもよく、感情表現が素直で、同じ年の私は「とてもかわいらしい人だな」という印象を持ちました。実際Ａさんはいつもクラスメイトに囲まれ、女の子たちは少しでもＡさんと話したい、そばにいたいという熱気をはらんでいました。彼女がこれだけ好かれるのも、無理はない話だなと、私も素直にそう思いました。

学校に行ってＡさんと話せるのは、私にとっても楽しみなことになりつつありました。そのようにしてＡさんと話すようになってしばらくして、私は「あれ？」と思う違和感にいくつか出会います。まずひとつ、ＡさんとＡさんをとりまくグループの顔ぶれが、少しずつ変わっているのです。

Ａさんによく話しかけ、時にＡさんの変わって場を仕切る「側近」の子たちはいつも同じ顔ぶれでしたが、比較的おとなしく、私にもあまり話しかけずにいつも場の成り行きを見守っているような、「はしっこ」にいる子の顔ぶれが、どんどん変わっていくのです。

あれ、先週来たときはにこにこしながら話を聞いていた、あの子は今日はちがうグループの子と一緒にいるな。

そういった感じに、私からしてみればけっこう激しい周期で「Ａさんグループ」の女の子たちは入れ替わっていきました。

私も高学年になり、学校へ行かないながらも、教室内には親しい、気の合う子たちが集まった「グループ」というものがあり、そのグループのメンバーの子を、「友だち」と呼ぶのだということは理解していました。だから「友だち」が、しかも決まってあまりでしゃばらない、おとなしい「友だち」の顔ぶれがどんどん変わっていくことに、戸惑いを覚え始めました。また、同じクラスの中にＢくんという男の子がいました。私が引越しをしてきた１年生のとき、一番最初に話しかけてきてくれたのがこのＢくんでした。

Ｂくんとは家も近く、まだ学校へ通っていたころは、同じ登下校のグループで、学校が終わってからも他の友だちと一緒に楽しく遊びまわっていました。Ｂくんはお家の都合で、２年間ほど別の地へと移り住み、６年生になってから再び、ご近所へと戻ってきたのです。

私はＢくんのことがなつかしく、また同じクラスになれたことがうれしくて、ときどきＢくんと話をするようになりました。また、最後まで学校に残っていた日は（担任の先生は、一度教室に姿を見せた私を、なかなか途中で帰そうとはしてくれませんでした）、最初はひとりで帰っていた私にＢくんと２～３人の男の子が声をかけてくれて、途中から彼らと一緒に帰ることが多くなっていきました。

教室内でのＡさんグループの動向に、とまどいを感じ始めていた私にとって、このＢくんたちとの帰り道は、心がほっとなごやかになる、とても大切な時間でした。けれどもある日、グループの子の一人が私を階段の踊り場にひっぱってきて、こういいました。

「野田さん、Ｂくんたちと一緒に帰ってるんだって？　ダメだよ!!　Ａちゃんはくんのことが好きなんだから！　もうＢくんと一緒に帰るの、やめたほうがいいよ」

またもや私は「え？」と「あれ？」の連続でした。

ＡさんがＢくんのことを好き、それはわかった。私から見て、ＡさんとＢくんが話しているところをあまりみたことがなかったので、おどろきはしたけどそれよりも、Ａさんの好きな人のことを、Ａさんからではなく他の人から知らされた。Ａさんはそれでいいのかな？　なんだか悪いような……。

それにＡさんとＢくんの関係と、私とＢくんの関係の間には、なにかつながりがあるのだろうか？　それはまた別の話のような気がするけど……。

Ａさんの気持ちを知ったいま、Ｂくんと一緒に帰るのは、たしかにＡさんになんだか申し訳ないような気がするけど、私にとってもＢくんとのつながりはとても大事なものなんだけどな……。

何よりもわからなかったのが、Ａさんから言われるならともかく（Ａさんの性格上、そういったことは起こらない気はするのですが）、あなたがそれを私に言うの？　あなたがＡさんの「友だち」だということは知っている。だけど

……本筋としてあなたは関係がないのではないの？

当時はここまで具体的に言語化することができなかったので、私が抱いた印象は、「なんだかきもちわるいな」でした。

Ａさんのグループ、Ａさんの「友だち」のことが、自分とは全然別のことわりを持って動いている、理解の追いつかない存在として、とても遠く感じたのです。

結局私は、もやもやした思いを抱えながらも、Ｂくんと一緒に帰ることをやめませんでした。Ｂくんと話をすることは、単純に楽しかったのです。学校に通っていて、ほとんど唯一起こる「いいこと」だったのです。そんなできごとが続くなかで、教室でＡさんグループと共に行動することは、私にとって少しずつ、何だか疲れる、緊張することへと変わっていきました。

けれどもＡさんたちは「頼まれて」私の「面倒」を見てくれている存在です。彼女たちにもそれぞれ大人から押しつけられた立場（役割？）があり、事情があります。私が自主的にＡさんたちのグループと離れるのは、おたがいにとってむずかしい状況だったのです。そんな中で、私に「友だち」という存在をネガティブな印象へと決定付けるできごとがおこりました。

Ａさんグループの中に、Ｙさんという女の子がいました。彼女はあまり目立たず、自分から発言することも少ないおとなしい子でした。彼女は字がきれいで、不登校児の例に漏れず字を書く機会そのものが少なく、同級生に比べてヘタクソな字しか書けない私は、とくに習字の時間でいつも恥ずかしい思いをしていました。

わたしはＹさんの字のていねいさ、きれいさに驚き、「Ｙさんって字かとってもきれいなんだねぇ」と感心して話しかけました。そのときの彼女のひかえめな、それでいて感じのいいはにかむようなほほえみは、無償に私の胸を打ちました。今まで気がつかなかったけど、この子ってとても感じのいい子だな。それから私は、Ａさんグループと一緒に行動するときはさりげなくＹさんのようすをうかがうようになりました。

私の「面倒」をみなくてはいけないＡさんは、私が話題に置いていかれないよう、つねに私に気を配って話しかけてくれました。わたしはＡさんの話に耳を傾けながら、内心ではどこかＹさんの立ち居振る舞いが気になっていったのです。

そんなある日のことです。

体育館での授業を終えて、体育館用の運動シューズから上履きに履き替え、３階にある６年の教室へ戻ろうと、Ａさんたちは階段をのぼろうとしていました。その集団のなかに、Ｙさんがいない事に気がついた私は、ごく当たり前にＡさんたちに声をかけました。

「あれ、Ｙさんまだ来てないよ」

その一声に振り返った時の、彼女たちの表情は忘れられません。Ａさんたちは、まったくの無表情でした。

「それで何か問題があるの？」「それがどうしたの？」とでも言いたげな、けれどもけっしてきょとんとはしていない無表情。その後、少しの苛立ちをにじませ、彼女たちは立ち止まらずに階段をのぼっていきました。

その時、私は痛感したのです。

ＡさんをふくめたＡさんたちのグループにとって、Ｙさんは別に「いなくてもいい」存在であることを。当人がその場にいなければ、そのことを隠そうともしない、彼女たちのきびしさを、残酷さを。今まで言葉にならなかった数々の違和感が、言葉と実感になって彼女たちが消えた階段から降ってきました。

私は今まで、親しい、気の合う子たちが集まって形成された「グループ」があって、その「グループ」のメンバーを「友だち」と呼ぶのだと思っていました。そういうグループも、実際には存在するでしょう。けれど、Ａさんたちのグループはそうではなかったんだ。みんな、Ａさんだけがほしかったんだ。友だちになりたいのは、友だちだと認めるのはＡさんであり、Ａさんが認めた「友だち」だけなんだと。みんながＡさんを大好きなことは、最初からわかっていました。だけど私は、Ａさんのまわりに集った子たちは、みんな「Ａさんが好き」という共通点を持つ友だちであり、ある種のファンクラブの仲間のようなものなのだと思っていました。そう思う一方で、グループに入れてもらい、あんなによくしてもらいながら、Ａさんのことも、Ａさんとおなじグループの子たちのことも、どうしても「友だち」だと思えずにいた自分。教室に通うことで精一杯だった私は考えたこともなかった。Ａさんに気を配られ、何の努力もせずに話しかけられている私をみていて、他の子たちは一体どんな気持ちでいたのか。

私は怖くなりました。

私が今まで見ていたのは「友だち劇」で、私はその観客のようなものだったのだと。私は「友だち」について、なぁんにもわかっていなかったのだと。私はそのまま通路を引き返して、Ｙさんを探しにいきました。彼女はまだ体育館の入口で、運動シューズを上履きにはきかえていました。

その彼女の横顔をみたときの、私のあの気持ち。今でも言葉にできません。

それから私は少しずつＹさんと話すことが増え、まだ私とＢくんが一緒に帰り続けていることを知ったであろうＡさんたちとは、少しずつ、見えないくら

いの速度で距離ができていきました。

中学にあがるころ、一緒のクラスになりたい人はいる？　と先生に聞かれて私が挙げた名はＡさんではなくＹさんでした。その中学も、結局１年と少し通っただけで行けなくなりました。私が、夏休みが明けてからは学校へ行かない、と告げたときのＹさんの顔。中学の卒業式に来てほしいという手紙をくれた彼女に、どんな言葉を返していいのかわからずに、返事も返さず、卒業式にも行かなかった私。

私はＹさんにとても不誠実で、彼女を傷つけ裏切っていたんだろうなという気持ちは、自分の事で精一杯だった当時より今のほうが強くなりました。

中学を卒業してからどこにも所属せず、私がはじめて「人間関係」を築き、学ぶきっかけとなったコムニタス・フォロ[*1]に出会ったのは、19 歳になったばかりの秋でした。

ここからの話をしだすと、十分長ったらしい文がさらに長くなるのでざっくりと削り、流しますが、コムニタスで出会い、別れ、今もまだ関係を模索中のさまざまな人たち。年齢も、最終学歴も、現在の状況も人によってみんな違います。気の合う人もいれば、どうしてもわかり合えなかった人もいる。私はここで出会ったすべての人たち、誰かひとりだけでも、「友だち」という単語では語りたくはないと思っています。私にとって彼らは正真正銘「名状しがたき」存在なのです。

名前をつけてラベルを貼ることを拒否しながら、結局は形容してしまっているというその矛盾ごとひっくるめて。そして私は、ごく個人的に「名状しがたい」その感覚をとても大切にしているし、していきたいと思っているのです。

だから、今回のづら研が始まるまでの私の「友だち観」は、ネガティブ・イメージを通り越して、むしろ「アンチ友だち」派だったと言えるのではないでしょうか。

●づら研に参加してみての、さまざまな「友だち論」

ようやく本題、今回のづら研に参加しての感想です。

まず私が一番驚き痛感したのは、私がいかに強く「友だち＝学校、学校で発生する関係」と思い込んでいたか、ということです。学校の外で、家族との関係をのぞけばほぼ一人で育ち、学校に入ってみれば「友だち」という関係の中

＊1：ＮＰＯ法人フォロの活動のひとつ。学齢期を過ぎた若者（40代の方もいますが）の集まる居場所。づら研の母体とも言える。づら研メンバーでもある山下さんがコーディネーターを務めている。

で発生するデリケートさ、ある種の残酷さにひどく傷つき（そう、あの時私は傷ついていたのです）、自分にとってほぼ初めての「つながり」の場に集う人たちを「友だち」ではない、と言いはる私が、一体どれほど「友だち」について知っていたというのでしょうか。

そのことに気がついたのは、「空気の読み合い」、「一人外れてはいけない」、「『友だち 100 人できるかな』なんて歌はそもそもナンセンス」(ここで出てきた、『友だち 100 人』という歌詞はいつから定着したのか？　という疑問の声、個人的に非常に面白いなと思いました) など、おそらく参加されたメンバーがそれぞれが「学校」で体験したのであろう「友だち関係」のむずかしさ、大変さなどを語り合っていた時にひょっこりとでてきた「そもそも『友だち』という言葉がいかに学校に影響されているかってことですよね」という一言でした。

それは、今までいろんなテーマでづら研をやってきたときにも、たびたび登場した「日本の『つながり』や『関係』の土壌がいかに学校に独占されているか」という問題提起の再来でもあると思います。

おそらく今回参加したメンバーのなかで、もっともと言っていいほど「友だち」という関係を「学校」にのみ関連づけていた私は、その影響を色濃く受けながら、影響されていることそれ自体にまったく無自覚だったのです。

そんな内心の驚きのなかで、「野田さんの言う『友だち』というイメージは、完全に『学校』に汚染されているよね」というメンバーからの一言が、今回のづら研で私には一番印象に残った発言でした。

汚染！　そうだったのか？！

私の持ってる「友だち観」は限定された条件のなかで、かちかちに固められたものでしかなかったのか？　でもそれじゃあ、学校に影響されない「友だち観」ってどんなものだろう……？

新たに湧き出た疑問に答えてくれたのは、主に 30 代以上の、仕事を持っていたり、家庭や子どもをもっていたりする、づら研参加者の間で比較するのなら、年齢層が上のメンバーの人たちでした。

「ママ友ってすごく疲れるんですよね」子どもを持つ母親という立場をもったメンバーの一言です。

「マイノリティなことはママ友の集団では出してはいけないんです」

うわぁ！ママ友！！

すっかり忘れていたけれど、私にだって将来関わりがないとは言いきれない、これまたヘビィな問題です。お子さんが不登校だった女性は「『親の会に行く自分』と『それ以外の自分』を使い分けている」と発言されました。

そんな中で貴戸さんが「ママ友の問題、私もすごく悩んでるんです、でも最近、ママ友ができたんですよ〜!!」と、コーディネータとしてというより、一人の参加者として、貴戸さんの抱えている「リアル」の話をはじめました。

貴戸さんの新しくできた「ママ友」は誰にでも、はちょっと話しづらいマイノリティな問題を貴戸さんに打ち明けてくれたのだといいます(そのことをきっかけに貴戸さんとその女性は「ママ友」というより、「同じ母親という属性をもつ友だち」へと関係が変わっていかれるといいなと、私は勝手に思っています)。

その後の議論は「自身のマイノリティな部分を打ち明けられる存在＝友だち、親友、仲間、同志」といった形へと流れていったように思います(余談ながら、「ママ友」との関係に悩みながらも、「『ママ友』は友だちとは呼ばないんですよ！」といさましく発言されたメンバーに、こっそりと、でも盛大な拍手を送りたいです)。

その話をする前に、私にとってまったく新鮮だった「友だち」の話を。ずばり「職場の飲み友だち」です。この話をしてくれたのは、めでたく古希を迎えられた男性と、現在ヘルパーとして働く30代の男性。古希を迎えられた男性メンバーは、昔お勤めをしていたころ、上司が部下を誘って無礼講として街へ繰り出す「飲み会の日」がとても楽しかったと話されました。また、現在ヘルパーとして働く男性はは「飲みに誘われ、最初はめんどくさいと思ったし、行くかどうか迷った」と語ります。しかし行ってみたら「意外と楽しかった」と言うのです。「内容は、なんというかそういう話(シモネタ)ばっかりだったけど」と。

これは聞く人によって、とくに女性にとっては、いろんな感情が想起される、ちょっと微妙な問題かもしれませんが、いわゆる「男どうしの付き合い」という私にとっては永遠に当事者足り得ないからこそ(すべてにうなずけない部分があるにしても)、非常に興味深い話でした。

また「最近は『女子会』と呼ばれる女どうしの付き合いも増えてきている。それは昔にはなかったよいことではないか」と山下さんが発言しています。たしかに女子会は女子会で、独特の気楽さ、面白みがあります。「男どうしの付き合い」がある一方で「女子会」もどんどん広まっている。これは相対的に見ていいことなんじゃないかと私も思います。

私のこれまでの「友だち観」は、子どもどうしの関係オンリーでした。だけど人間歳を重ね、大人になると今度は「大人どうしの関係」が発生してきます。そんななかで、大人にも「オトナの友だち」が必要なんだなぁ、そしてそれは私の定義していた「友だち観」とはまったくちがったものなのだと。

私はこの7月で25歳になりました。

これは世間的にみれば立派な「オトナ」の年齢なのですが、私自身、自分が「オトナである」という意識は皆無です。かと言ってもうコドモではもちろんない、青年期というにもややトウがたちはじめている……。私は私自身をそれこそお得意の「名状しがたき」時期にいるのだと、そこはあまり突っ込まずに「ていっ」と棚上げしています。あるいは、中2病をひきずっているだけ、ともいえますが……。

そんな私に、「学校」をはなれた、「オトナの付き合い」、「オトナの友だち」について語ってくれたメンバーのみなさん、ありがとうでした。

見識が広まった気がします。

流れを戻して。

繰り返しになりますが、議論の流れは「自身のマイノリティな部分を打ち明けられる存在＝友だち、親友、仲間、同志」という定義でほぼ固まりつつありました。

しかしここで面白かったのは、誰もが「友だち、親友、仲間、同志」といった言葉に共通のイメージを持っているわけではない、ということが議論の中で明らかになったことです。大体40代より上のメンバーは、「友だち」は日常の何気ない話を共有する存在で、幾人かおり、数少ない「親友」には、自身のマイノリティーな部分や悩みなどの打ち明け話をする、といったイメージを共有しているようです。

一方で30代や20代のメンバーは、「親友」という概念やイメージをそもそも持ち合わせていない、ということが分かったのです。私自身、「親友」という言葉に対して、とくに思うところがないというか、いまいちピンとこないのです。

ある男性メンバーは「友だちよりも仲間、仲間よりも同志といった形で、信頼のランクが上がっていく」というような発言をしています。

「親友ではなくて？」という山下さんの質問にも、「親友という感じではないですね」と答えています。言葉にも鮮度というものがあるのだとしたら、「親友」と言う言葉は、じょじょに鮮度を失いつつあるのかもしれませんね。

ピンとこない、と言えば。

私にとっては「仲間、同志」という言葉もいまいちイメージしづらい対象です。

その言葉で自分にとって密接な関係を表すという意見が多かったので、つい発言できずに終わってしまいましたが、私にとって「同志」はともかく、「仲間」

はどうしても「学校くさい」感じがして受け付けづらいのかもしれません。また「同志」という言葉は、「安保？　革命？　活動家？」といったちょっとカタいイメージで、どうにも日常的ではない感じが……これって私のほうが偏っているのかもしれません。

自分にとって「仲間、同志」のイメージ、定義はこんな感じだよっていう意見がありましたら、また教えてください。

最後に、今回のづら研を終えてあらためて私が思ったこと、感じたことなどを。

それは、「友だち」という言葉を通して見えてきた関係の「流れ」のようなものでした。あるいは流動性、ともいえるかもしれません。

今回のづら研に参加するまで、私が拒み続けてきた「友だち」という存在は、「学校」のみで発生する関係であり、その流動性は、おそろしく固いものでした。

コンクリートでできた灰色の校舎に、何百人という固定された年齢の子どもたちが集められ、その中からさらに同じ年に生まれた子どもたちが何十人とひとつの教室という名の「ハコ」に放り込まれ、その構成は最少でも１年間、変わることはないのです。そしてそのすべてを、子どもたちは自分で選択することができない。

こうやって書き出してみるだけで、私などはすでに息苦しさでいっぱいになってしまいます。そんな中でやり直しのきかない、緊張感をはらんだ「友だち関係」が広まっていくことに、当事者である子どもたちを責めることができるだろうか。

あのころの私にとってＡさんや、その周りの子たちはどこか残酷で、恐ろしい存在でした。けれどもづら研を終えたいま、彼女たちはどこか痛々しい、何か言葉をかけたいのだけれど、私一体のどんな言葉があのころの彼女たちに届くのか……そんな複雑な、どうしても切ない気持ちになる存在です。

一方、私がコムニタスでつながってきた人たちとの関係は、流動的で、常に流れ続けているものでした。時には時間をかけて、時には気持ちを整理する余裕もないくらい怒涛の展開で、関係は流れていき、今もまた流れ続けています。

ゆえに名前を付けづらい。カテゴライズしても、その内実がころころ変わっていくのです。ある他者との関係が、昨日まで良好だったとしても、今日何が起こるのかはわかりません。今日笑顔で別れた人と、明日も笑って別れることができる保障はどこにもないのです。

また、一度関係が悪化したら、二度と元には戻らない、ともまったく限らないのです。さんざん喧嘩し、まわりを巻き込み、気がついたら以前よりもずっと心地よい関係に落ち着いていた。なんてことが実際に起こるのですから。

そこにいたるまで、果てしないと思えるくらいの時間と労力は、当然のように必要でしたが。

ここに書いたことが、単純な学校批判、自身の通っている居場所賛美につながらないよう、私は十分に注意する必要があります。実際、人とつながりを保ち、関係の変化を受け入れていくのには、途方もないエネルギーが必要です。これ以上ないくらいめんどうくさく、また誤解を恐れずに言えば泥臭い作業であると、私は実感しています。

上手に体裁をつくろうことができる、ある種のクレバーさを持った人たちのことを、どれほどうらやましいと思ったか。自分の見たくもない泥に手を突っ込むことでもあり、そうとは知らず無頓着に他者の泥を掻き乱してしまうことでもあり（これ、当然ですが恨まれます）、だから私が言えるのは、結局個人的な好みを主張するだけのことなのかもしれません。

関係やつながりは、最初に型やハコがあって、そこに人を当てはめるのではなく、まず人ありきで、人に合わせてかたちや名前がゆるやかに変化していけるものであればいいと。そして私もまた、「名状しがたき」ものものを尊ぶと言いながら、「友だち」という関係にかっちり「学校」という型をあてはめ、カテゴライズしていたのだということを。

「学校」という存在にもまた、それはあてはまるわけなのですけど……。

また、今回、細かくは書ききれませんでしたが、「濃い暗色系のイロは排除され、やさしい明るいイロで空気をつくりあげる」といった日本の学校の抽象的なイメージや、フェイスブックの「友だち承認」というナゾ機能について、日本語の「友だち」と英語の「フレンド」はそもそもの意味合いがちがっているのでは？　などなど、私自身が知識に明るくなく、感想を深められないところがはがゆいながらも興味深い議論がたくさん出てきたことを、ここに補足しておきます。

以上で 2013 年６月 10 日に行なわれた「友だちについて」の感想レポートを終わります。

出前づら研

DEMAE DZURAKEN

づら研は、この１年間で兵庫県の神戸市、姫路市、三田市、島根県の松江市の３カ所にお招きいただいた。このうち、姫路市と松江市で開いた会について、原稿を寄せていただいた。

出前づら研 in 姫路　2012年11月18日

中島薫子（ふくろうの会）

ひとりの若者との出会いが『づら研』につながり、私たちが拠点にしている姫路市男女共同参画推進センター「あいめっせ」フェスティバルの企画講座「最先端に生きる若者に学ぶⅢ」に「出前づら研」として来ていただきました。

小さな会場は満席で、会員以外の参加者が多く、いつもの講座とはちがう緊張感に包まれていました。事前に冊子を読んでの参加者や、すでに「づら研」とはどんなものかを知って参加された方もおられました。

冊子ももちろんですが、彼らの言葉はよく整理されて、とてもわかりやすく理解できました。また、山下さんの絶妙なリードで、参加者と若者たちの意見交換も時間が足りなくなるくらい白熱しました。

それでも、若者から直接話を聞くと、さらに「なぜ？」と疑問がわいてくるのです。会場からは、「ここまで理路整然と、つらく苦しかった実体験や、今の活動や仲間のことなどを話せているのに、社会に出ようとは思わないのですか？」という質問がありました。それに対し、づら研メンバーの女性は「この場だから、話を聴いてくださる場と思えるから、私は話してもいいんだ思えて、話せるんです。今だから語ることができるんです」と答えられました。

私は会を運営していて、たびたび壁にぶち当たります。そのたびに「ここだから話せる」、そんな場を開くことが大切なんだと自分に言い聞かせつつ、もうすぐ10年が経ちます。

当会の親や当事者でも、「当事者研究」ができないかと思います。ただ、「こうあるべき」という社会通念に縛られ、どっぷりつかってきた頭には、どれが本当の自分の思いなのか、何が自分にとって大切で必要なのか、わからなくなるときもあります。

10年も経つと、もう当事者の親として考えることをしなくなって久しくもあり、安穏としている頭に問題を提起するのもエネルギーが必要ですが、見つけた問題を文章化し、仲間の前に提示して語り、理解し合い共有して発信することなど、同じ課題を持つ親の会・当事者の会だからこそできる当事者研究の場を増やしていければと思います。そんな私の願いをこめて、「づら研」を多くの人にもっと知ってほしいと思います。「づら研」のますますのご活躍をお祈りしています。

出前づら研 in 松江　2013年3月9日

木村悦子（ＮＰＯ法人ＹＣスタジオ理事長）

●アンケート・感想より

親を見ていて、自分が親になることがこわい。

小学校に入る前、すぐ思ったのは、自分は学校というところに向いていないということ。行かされるのでがんばって行っていたけれど、親のＤＶ、父が母に手を挙げるところを見て、母は家を出るという。私は学校に行けないと思った。見張っていないと心配だったし、私がしっかり母を守らなければと思った。

母は学校に行かないといけないという考えがあり、引きずってでも学校へ連れて行った。　小5のとき、とうとう別れることになり、必死で父と母をつなぎ止めていたが、力が抜けた。

父と子2人になり感じたことは、安心感。ですが、父が嫌いでした。
父は小さいときから生きづらさを抱えて生きてきたというのはわかっていたが、いくら親とはいえ、他人だと思った。物事をゆがませて見るところが許せなくなった。

父に対して、とうとう私は見限ってしまって、4～5年前に父を殴って蹴った。父がもっと殴れというので何でかと思っていたら、人づてに知ったことですが、娘は元気になったと言うのでした。うつと付き合っていて、死にたい、死にたいと思っていたころだったので、父は大喜びでした。勘ちがいもいいところ。

父も母も、私は支えきれなかった。守りきれませんでした。

今は親と距離をおいて生きています。（30代・女性）

●松江でも自前のづら研を

3月9日、松江市市民活動センター1階の音楽スタジオで、山下耕平さんと貴戸理恵さんを進行役に、出前「づら研」を開きました。当事者の若者が優先、余裕があれば親や支援者もＯＫという呼びかけで、35人が集まりました。なんと、そのうち21人が生きづらさを抱える若者でした。

島根初の「生きづらさからの当事者研究会」は、緊張のうちにスタート。自己紹介から、津路くんのレポートを中心にみなさんの息を呑むような率直で真摯なやりとりに、会場はどんどん引き込まれていき、後半は会場の若者から自身の生きづらさを表白する発言が相継ぎました。今まで独りで心の奥に抱えていたものを初めて人前で言葉にできた人がいて、それを丁寧に受けとめて返す

人がいて、さらに深まりつながっていく……。これは、大変なことです。松江でも自前の「づら研」をやってほしいという声もあがりました。続けていけば大切な何かがつかめそうな感触があって、私自身気持ちが高ぶっています。

もし、コムニタス・フォロに手伝ってもらうことができれば、今度はＹＣスタジオで、当事者だけの島根版「づら研」をぜひ始めたいと思っています。

コムニタス・フォロのみなさん、山下さん、貴戸さん、よろしくお願いいたします。

出前づら研 in 松江のヒトコマ（2013 年 3 月 9 日）

づら研に参加して

Voice of Dzuraken

づら研に参加して

●田上幸代

私がづら研に参加したきっかけは、貴戸さん、山下さんに、『おそい・はやい・ひくい・たかい』（ジャパンマシニスト社刊）という雑誌の不登校特集でお世話になったご縁からでした。

でも、「生きづらさからの当事者研究」にすごく興味ひかれながらも、顔を出すのに少々勇気がいったような気がします。私自身も「もやもやを抱えながら生きている＝生きづらさに心あたりがある」からこそアンテナに引っかかったのですが、「生きづらいです！」と名のり出る（？）ことへの恐怖や、年齢的、立場的なものが場ちがいであったりしないだろうかなど、あれこれ考えてしまい……扉をあけるのにエイッと力んでしまいました。

だけど、重いと思いこんでいた扉をあけてみると、そこは特別なことはない、だけど非日常な語らいの場でした。私は、まだたったの２回しか参加しておらず、知ったようなことを語れる立場ではないですが、具体的な経験やできごとはちがえど、「学校（社会）のこういうところが違和感」「こういうことが私にはつらい」という内容には、うんうんとうなずけることが多く（そうではないことだって、もちろんありますが）、なにか居心地のよさのようなものもありました。ドロッとした部分や、自分の毒など、ふだんは自制していることを出していい場所なのだと。日常は出さないようにしていることを出す、そこに足を運ばなかったら接点がないであろう年齢や性別もちがう人たちとかかわる、そこが私にとっては非日常でした。

ストレートに出てくるみなさんの言葉にヒリヒリし、胸にチクリと感じながらも、堂々と語る姿にまぶしさもあり……あらためて、貴重な場です。自分のもやもやした部分を引っ張り出すことになったら、どうなっていくのやら……づら研の今後ともども、すごく興味があります。

●如月百合

学校にいたころの記憶は、今も私を息苦しくさせる。ときにその記憶が思いもよらないところでよみがえり、途方にくれることがあるが、私にとってづら研に参加するというのは、その記憶を見つめなおす作業にも似ている。

ただ、どうして、と。意味を問いかけ続けているが、答えはいまだ、わからない。

ジェンダーによる文化的な環境が、男の子を男の子にし、女の子を女の子にする、らしいが、私は女の子らしいね、と言われたら喜ぶような子どもだった。おとなしく、内気で、怒ることが苦手な性格が女の子「らしい」と定義されるのなら、の話だが。それを演じることで楽であろうとしたのかもしれない。そうするのが得意でもあった。

だが、そうすればそうするほど、何かに抑圧されるような感じを受けた。そのような行動や言動をするのは、あなた（女の子）らしくない。こうしなさい、ああしなさい、よりも「らしくない」と否定されるほうがつらく、私はそれに従順であろうとした。今でも、そうであるかもしれない。それがコンプレックスにもつながり、かえって生きづらくさせる要因のひとつであるかもしれないというのに。

づら研に参加していて、思う。人の生きづらさはさまざまで、どれひとつとして同じものはないと。それが「女性」「男性」になると、根本的にまったくちがうものに変化する。それゆえはがゆいことも、とまどうこともある。人と人との境界が、たやすく超えてしまうような苦しい日もあるが、そこには限界をつくることも必要だろう。同じ場所に年齢、性別、物ごとに対するとらえ方、ちがう考えをもつ人たちが集まって関心をよせあうということだけでも、参加する意義をあたえてくれるに十分だ。

否定され続けたころのことを思うと、家族や、友だち、恋人との関係を築くときに、困惑することがある。こんな私でもいいの、と思ってしまうのだ。遠ざけたい過去の記憶が、今もなお私をしばりつけていることに、愕然としてしまう。それでも、自分をあきらめる理由など、どこにもないはずだ。

づら研に参加して３年目になるが、そこに居続けたのは何か変化を求めたわけでも、まして活路を見出したから、というわけでもない。ただ、知りたいことがそこにある、ということ。今日という日を歩いていくなかで、ときに立ち止まって考えなければならないような、大切なものが。いくらめんどうでも、それで生きづらいと言われようとも、私は考え続けることをやめないだろう。記憶でがんじがらめになるのなら、その記憶ごと、自分を赦せるようになりたい。

そのためにきっと、づら研に参加している、と思うのだ。

●山下耕平

づら研冊子１号の巻末に、づら研に関わってきながらも、自分がレポートを書くのは気後れがする、というようなことを書いた。まあでも、いつまでも逃げてはいられないので、今年３月、40 歳を目前に肚を決めてレポートを書いた（48p）。

自分なりに、嘘をつかず、ギリギリのところまで皮をめくって書いたつもりだが、この日のづら研は、なんだか空転してしまって、自分でも思っていた以上にエネルギーを使って、疲労困憊だった。「生きづらさは自分に閉じ込めず他者と共有しよう」なんて、言うは易し、いざ自分の番となると、それがいかにエネルギーのいることか、痛感した。

しかも、あらためて読み返してみると、私自身、フタをしてきている黒い塊があることに気づく（おもに中学時代のことだ）。それは、時間の経過とともに風化していて、いまや荒々しいお化けではないけれども、つめたく縮こまって固まっている。まあ、でも、この塊があるから、自分の生きてきた道筋があるんだなと思う。

もうひとつ、づら研に参加してきて気づいたことを言えば、親との関係が語られることが多かった、ということだ。「生きづらさは社会が生み出しているものだ」と言えばスッキリするが、雇用関係や学校関係より、どろどろとしたものが渦巻いているのは、どうしても家族関係なのかもしれない。家族だって社会的に構築されているものにちがいないが（近代家族）、そういう分析では届かない生きづらさがあるように思う。まだうまく言葉にはならないけれど、たぶん、そのあたりに何かカギがある。それは今後の課題ということで。

最後にお礼を。

昨年、冊子１号を刊行した際には、多くの方にご注文いただき、カンパをいただきました。また、冊子に「づら研、出前します」と書いたところ、神戸オレンジの会、ふくろうの会（兵庫県姫路市）、ＹＣスタジオ（島根県松江市）、ぱそこんスペース宙（兵庫県三田市）に招いていただきました。多くの方と交流でき、ありがたかったです。

「づら研」があちこちで繁殖してくれたなら、これ以上にうれしいことはありません。